

---

# 勇者になろう

パラチン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者になろう

### 【Nコード】

N2414I

### 【作者名】

パラチン

### 【あらすじ】

自称神様に突然異世界に飛ばされて世界を救うことを強要されたので仕方なくやってやるうじやないか！と、勇者を目指して（異）世界を救うかもしれない物語

途中から書き方が大幅に変わってますご容赦を（汗

明日はあるんだと信じたい(前書き)

初投稿です、よろしくお願いします

明日はあるんだと信じたい

オレは夢を見ているんだと思う。

そうでなければこんなこと、あり得るはずがない。

こんな、目が覚めたら目の前に少女がいるなんてこと。

……ついに幻覚まで？

そんな馬鹿な。

「えーっと…日本に住んでる坂神裕也君…で間違いない？」

「あ、うん、多分…」

てか日本で、範囲広っ

オレ以外にも同じ名前の人間はいるんじゃないだろうか？いやいる  
だろう。

いやその前に、この全身真っ赤ですごい目に優しくない少女は誰だ  
ろうか。

「曖昧だなあ、合ってるの？合ってないの？高校生の裕也君。とい  
つても間違っはす無いんだけどね」

「なら聞くなよと。その前にあんたは誰？そして腹に立たないで、  
眠い」

「寝る気なの!？」

深夜だもん。

それにこんなリアリティ溢れる夢は好きくない。

夢は非現実的だから夢なんだ。

あれ、今の状況は非現実的だなあ。でもリアルなんて矛盾してるよ。

「で、あんたは誰？」

「神様ってやつ」

「ワロスワロごめんなさい跳ねないで」

神様?なんだそれ?

あと早く腹からどいてくれ。

「冗談はいいから、どうやってオレの部屋に?そして何故に入ってきた?てかどいて?」

「どうやってって……こう、神秘的なジャンプで。用が無かったら来ないよ。あと冗談じゃなくて真正正銘の神様だよ。ホラ」

そう言うと自称神様は指を天井に向ける。

すると唐突に、刃物がたくさん降ってきた。剣、鎌、ナイフ、刀、

キリなどなど。

それらは全てドスドスと音をたててベットに突き刺さる。全て、だ。一つも刺さり損ねてない。

ついでに言つとオレにも刺さっていない。

「……………」

夢の可能性が上がった。

夢であつて欲しい度も上がった。

「どづつ？信じてくれた？」

こうね、信じられない物を見せて信じさせるっていうね。もうね、自分が何考えてるか分からないっていうね。てかこれ、脅迫じゃね？

「……………まあ、夢だとして、用つてのはなんだ？」

「夢だとしないでよ!？」

「いいからいいから。ささ、話してみ？」

「なんで会話の主導権握られちゃってるんだろつ……………」

「その調子で腹からどいてくれると助かる」

「それは断る」

「何故！？てかさつさと用件を話せよ！」

このままだと用件を聞く前に腹が陥没する気がする。

「分かった分かった。えっと……色々とはしょって説明するとね？  
今から坂神君に異世界に行ってもらって勇者になってもらうの。つ  
まり一つの世界を救う大冒険の始まりってこと？」

「成る程、ついに二次元への扉が開いたのか。この日をどれだけ待  
ち望んだことか……」

「いやだから現実逃避は止めようよ!？」

ただどこれは余りにも現実離れしすぎているだろう。

これはもう現実っぽい夢として処理するしか無い。決まりっ。

「……もうそれでもいいけどね」

少女はため息をついて、不意に浮きだした。

浮けるんだったら始めから浮けよ!と言いたくなっただが、なんかど  
うでもよくなった。

そんなことよりも、少女がどいたというのに、身体が動かない。まるで金縛りにあったように。

それに気付くと共に、身体が動かない不安感と恐怖に襲われた。

「あ、動けないでしょ？それも神様の力なんだよ」

「ぬうおおお」

「突然錯乱されても困るからね。とにかく落ち着いて」

「おおりやああああ！……あれ？」

「え？そんな……あれ？」

突然動けるようになり、錯乱するどころか逆に冷静になる。いやあ、半分ふざけてただけど、まさか打ち勝てるとは。

「どうやったの？」

「寄声を発した」

「いやそうじゃなくて……ってまあいいや。とにかく食糧と凶器持ってきて。今から異世界行くから」

「……え、ガチ？」



「うん、ガチ」

「いやあの……うーん……ああ、うん、分かった」

なんだか考えることが面倒になってきた。糖分が足りないのかな？  
もう夢だと割り切って行動することにした。

「食糧と凶器だけでいいんだよな？」

「うん、多分」

「多分かよ……まあいいけど」

「自分で言うておいてなんだけど……それでいいんだ」

「面倒だしな」

「面倒って……」

向こうでも調達できるだろうし、荷物は少なめでいいか。  
と割り切って坂神は食糧と凶器を取りに行った。

くくく

「こんなもんか？」

簡単に、パンとジャム、それに凶器としてバットを数本持ってきた。ぶっちゃけた話、他にいるものか思いつかなかったんだ。

「少ないね」

「……やっぱり？」

自称神様は考えるそぶりを見せる。今ならバットで殴って全て無かったことにできると思った。

9

「あ、服だよ。服が足りない」  
「成る程」

タンスから数着取り出す。  
これで完璧な気がする。

「それじゃあ全部これに入れて」

そう言って渡してきたのは小さい麻の袋。  
その大きさは、頑張っても食パン一つしか入らないと思われる。

「…オレそんなに握力ないよ?」

「潰して入れるってわけじゃないよ!!ちょっと貸してっ!」

袋を引つたくられる

そのまま自称神様はオレの学ランを掴んで…  
あれ?それ入れる?

グイッ

「ほら、入るから」

四次 ポ トかよ

「そんなにポーっとしないで、さっさと入れるっ!」

「おう…分かった」

「これちゃんと取り出せるのか?」

「やってみて」

やってみてと言われても……手を突っ込めばいいのか?

手をつつ込む。

さっき入れた物がどこにあるのかが頭に浮かんできた、全て。

なんだこれ？不思議な気分だ

あ、これだ

「……………」

「できたでしょ？」

何故だろう？まあいいか

くくく

「終わったぞ」

「あ、そう？それじゃ行くよ？」

……………

「どーにこー？」

「異世界」

「今から？」

「今から。さっき言っただけ？」

「そんなことも言っただけ、確か。じゃあこっちの世界のオレはどうなるんだ？」

「始めからいなかったことになるから問題無し！」

釈然としない。

世界の歪みとか考えたらそれでいいんだろうけど、それはつまり、帰る場所が無くなるんだよな？

……ふーむ。

「これって強制？」

「強制。坂神君が嫌と言っても連れていくよ」

「なんでオレなんだ？」

「力に耐えられる人間が君しかいなかったから」

「力？なんだそれ」

「さっき見せた力。創造の力だよ。手ぶらじゃ生きていけないだろうし、第一、それが無いと異世界に送れない」

「……その力の詳細は？」

「全部は秘密。有り体に言えばね、頭に描いた物が現実になるんだよ」

「とにかく、異世界に行ける人間がオレだけだから行かせると」

「その通り」

この自称神様はこっちの事情を考えてないのは分かった。それじゃ、開き直ってしまったほうが楽だよな。

前向きに考えるか。

と、自称神様が急にハツとした顔になり、焦りを見せる。

「あ、やば。今すぐ送るから、準備OK？」

「いや、出来ればもっと情報を聞いてか」

「あーゴメン、後でね。それじゃ」

視界が反転する。

決して気持ちいいとは言えない浮遊感が身体中を襲う。

視界は反転し続け、次第にまぶたが重くなり、脳がパンクする錯覚に陥る。

まだ理由を聞いていないのに。チキシヨウ。

明日はあるんだと信じたい（後書き）

誤字脱字やアドバイスや悪いところ、教えてくれると助かります



第2話 不意の反動には耐えられない(前書き)

休みのうちに…

## 第2話 不意の反動には耐えられない

「……………」

目が覚めるとそこは短草草原だった。

珍しく、頭が冴えている。

いつも寝起きは死ぬ程辛いのに。それもこの草のおかげだろうか。所謂セラピーというやつだ。

「……………現実逃避はやめるかな」

覚えている。

この世界を救うとかなんとかのためには自称神様に送られたことは鮮明に覚えている。

ただ

「360度地平線が見える場所から一体なにを始めると?」

何からすればいいのかわからない。

まさかこんなことになるとは……………」

やっぱり歩くか。歩き回って人里を探すしか無いのか。

早くもリタイヤしたくなる気持ちを身体全体で抱えこみながら立ち上がり、ついでに歩きだす。

「はあ……その前に動物に喰われたりしないだろうな？てかあの自称神、後でつていつだよオイ……ん？」

カサツとポケットから紙が滑り落ちる。

それを拾いあげて見ると何やら文字が書いてあるらしかった。

『ごめんね。話す時間無かった(汗 とにかく、大事なことを話してなかつたから書くね。そっちの世界は危機に晒されてるんだけど、それには黒幕がいて、そいつを見つけ出してとっちめて欲しいのよ。誰かはまだ私も分からないけどね。じゃ、まあ気楽に旅しながらついでにやっちゃってね。』

「……なんだこれ」

まあ大事なことは聞けたからよしとするか。  
自称神様についても聞きたかったんだがなあ……

紙をポケットにしまい込んで再び歩き出す。  
そこでふと思い出したことが一つ。

「力つてのを使ってみるか」

とりあえずこれを使いこなせばどうとでもなる気がする。

というわけで西洋の剣を想像してみる。

「えっと……柄に鍔に刃だろ、これでいいか？　そおいつ！」

現実に移す方法は分からなかったので、気合でやってみた。結果は、成功。脳内の物を現実に移すことは成功した。だけど、及第点には程遠い。

「……なんだ、これ」

現れたのは一目で不安定だと分かる物体。

かろうじて剣なのは分かるが、鍔と刃の結合している部分は曖昧でぼやけている。他にもあらゆる箇所がぼやけて識別不能になっている。

しかも、薄い。ぺらっぺらだ。

そしてその不安定な剣は数秒してすぐに霧散した。

「……………」

風が気持ちいい。

いや、障害物が無いからかやけに風が強い。寒い。ついでに心も寒い。

……ずっと現実逃避したかったのだが、性格によってその案は却下された。

きちんと細部まで考える必要があるとなると、どうもこの力は使い辛いな。

確か学ランに化学の教科書が入っていたから、エネルギー弾とかは撃てるかもしれないが。

「いや、エネルギー弾を創造出来たとして、前に飛ばせなきゃ意味無いじゃん。うっわ使えねえ」

多分その場で爆発して一番ダメージくうのはオレだろうし。

こんな力でどうしろと言うんだ、自称神様よ。

問題はそれだけじゃない。

オレは今見渡しが良いすぎる草原にたった一人で立っているんだ。

「てかこの世界には人間なんていません。とかいうオチじゃねえだろっな？それはともかく、いたとしてオレは会えるのか？人間に」

食糧は確かに持ってきたが、一ヶ月とかは全く持ちそうに無いぞ。自重しなかつたら一週間だって危ういんだ。

……うわぁ不安要素満載。

「大体さ、こつ人里に飛ばしてくれてもよかつたろうに。なんでこ  
んなとこに　　っ！！！！」

突然体が悲鳴を上げる。

が、何となく分かつた  
神の力とやらの反動だろつな

使えねーくせに…くそ

そこで意識が途切れる

第2話 不意の反動には耐えられない(後書き)

ギャグが思いつきません…

第3話 化け物発見。助けてー（前書き）

初戦闘！ですがどうでしょう？



### 第3話 化け物発見。助けてー

「う……………」

上半身を起こす

あれ？デジャヴユ？

「でもないか、もう夕方だし」

とうかこんなに見晴らしのいい草原で寝てて大丈夫だったのか…  
以外と安全なんかな？

「とはいえ、立ち止まっても仕方ないしな。とりあえず歩こう」

立ち上がる

そつえば朝から何も食べてないな  
気絶してたし、当たり前か

「…なんか食うか」

取り出したるは自称神から貰った魔法の袋、略して四次元ポケト

さらにその袋から適当にパンと牛乳を取り出す

「これじゃ朝飯だな」

まあいいか

「…もう真っ暗だ」

どうするかな

あ、まだ寝巻きのまんまじゃん  
ま、いつか。とりあえず歩こう  
さっきまで寝ててもう眠れそうにないし

「あー、音楽プレイヤーでも持ってきたら良かったなー」  
などと言いながら歩く

テクテク

「ん？なんだあれ？」

何かいるようだが、暗くて全く分からない

「黄色っぽいな？」

あ、目が合ったっぽい

ん？なんか四足歩行っぽいな？

こっちに走ってきてるっぽいぞ

「おいおい…なんだよあれは」

四足歩行で、体は黄色く異形。  
青い目が四つ

「ああ、所謂…魔物ってやつ？」

とりあえず、逃げよう

何もしないよりはマシなはずだ！

「うわああああああ！！」

うっわ速っ！化け物速っ！

てかキモいっ！見た目がっ！

追いつかれる！

ならば、返り討ちにする！

「って勝てるか？オレに」

とりあえず袋からバットを出す

カーボン仕様だコノヤロウ

「さあ来いや化け物が！！」

震える足を無視して無理矢理集中して中段に構える  
まさかバットで剣道をやるとは思ってなかったよ  
てか剣道を使う日が来るとは…

さて、面が吉か、胴が吉か

ああ、考えてる間にもう目の前に！

「くっそー！」

横に凧いだ

それを化け物はしゃがんで避ける

あ、終わった

「ゴアアアアアア！」

食らいついてくる

歯、あつたんだ

「そおおおおい！！！」

右に跳んで避ける

咄嗟に、閃いた

これなら！

化け物は着地したあとにすぐまたこちらに跳んできた

「　　っ！！！」

神の力を、使った

突然化け物の眼前に化け物に似た何かを創造する  
だけどそれはあまりに不安定で、すぐに霧散してしまった

だが、ヤツは一瞬怯んだ

「今だっ！！」

痛みを堪え、化け物の足目掛けてアッパースイングする

バキツと嫌な音と共にそれが折れたことが分かった

「ギャガツ！？」

そのまま他の三本もアッパースイング

「グ…ガアアア！」

残ったのは移動手段を失った醜い化け物

「はあ…はあ…勝、てた…」

力の反動で全身が軋む

しかし、一回目よりも痛みが走るのが早い

それに意識を保ってる

「少し…慣れた…のかな？」

でもよく考えると、使った瞬間に気絶してたら死んでたわけで…

足が…震えてるよ

あ、涙出てきたかも

「マジ死ぬところだった…」

恐いので早くこいつから離れよう

実は回復力が凄いとかがあったら洒落になんねーし

「ひ、人…人間はおりませんか？」

うう…体が痛い…

## 第4話 門番（前書き）

いつ不定期になるか分かりませんが  
温かい目で見てください

## 第4話 門番

「…あ」

日が明けてきた

どろりで眠いわけだ

「ああ、足が疲れてるよ。気がつかなかった」

どうするか

ここで寝たらいけない気がする  
てか生活習慣が

「ああもう嫌だ。痛いわ疲れるわ襲われるわ人はいないわ」

ああそうだ、自称神はどこにいるんだよ  
もう詰めだよ詰め。どうすりゃいいかわかんない

「……………あ。」

視界に草以外のものを発見

「やっと、やっと無機物を見つけた」

泣きそう

自然と足が速足になる



「あれは…城壁か？」

しかも掘りまである  
てことは…城か！！

「やったあ！よりどころ発見！」

眠気も疲れも吹っ飛んで走り出す

あり？入り口はどこだろう？

ぐるりと一周する

「あつた。お、川もあつたんだな」

てか間近に来て思ったけど、掘り深っ！！  
落ちたら死ぬそうな深さだな

入り口は一本、橋があるだけ  
入り口から見えるのは村だった

「そりゃあんな化け物があるんだ、入り口も一つになるだろ。てか  
城じゃなかったのか」

まあ、とりあえず入るか

「なんだオマエは！！」

甲冑に身を包んだ男が剣を突き付けながら立っている

おお、やっぱりこういう展開か

「えーっと…ただのしがない人間です」

『人間』以外に答えることなんてないし

「ならば何故手ぶらなのだ！」

「手ぶらじゃないですよ、ホラ」

腰にかけた袋を指す

「そんなもので外を出歩けるものか！ナメているのか貴様！」

「ごもつとも。じゃあ…」

「武器…てか凶器ならありますよ」

どこからともなく、いや袋からバットを突き付ける

カーボン仕様だぜコノヤロウ

「うわっ！どこから取り出したんだ！？」

ああ、やっぱりここでは四次元ポケ トなんてないんだな

「始めから持ってたよ」

「いや、確かにその袋から…」

「やだなあ、そんなことあるはずないじゃないですか」

「いや、しかし…」

あれ？話が逸れてる逸れてる

「で、早く入れてもらえると助かるんですけど」

「ああ、そうだったな。でもあと二つ確認させてくれ」

なんだ、まだあるのか？

「その服装と、髪と瞳の色はどうしたんだ？」

そっぴりやまだパジャマだったな

…色？はて、ワックスすらつけない真っ黒のはずだが

「…民族衣装です。それに、髪と瞳の色って普通の黒でしょ？」

「そっぴりか…黒い民族もいるのか…」

…？こっぴりちじゃ違うのだろうか

「あの…あなたの色は？」

「青だ。そんなものを聞いてどうする？」

いや、あんたも同じような質問してただろうがよ

それにしても、そっぴりか

黒は珍しいのか

…染めるのもなんかなあ…

「いやなんでもないです。それより…そろそろ入っても…?」

「ああ、いいぞ。ところでお前、名前は?」

「坂神裕也。呼び方は坂神でも裕也でも。あんたは?」

「レオンティウス・ヴェルデ。レオンでいい。よろしくな、ユウヤ」

なんだ、案外いいやつなのかもな

「こちらこそよろしくレオン。じゃあな」

入ってみて気がついたんだが…

なんかピリピリしてるな…

まあとりあえず宿を探さなきゃな…落ち着けねえ…

あれ?円は使えるのか?

「おいユウヤ！」

「あれ、レオンじゃん。どうしたん？門番は？」

「聞きそびれたことがあつてな。ユウヤ、お前ごう…なんていうか…黄色くて目が青い魔物を見なかったか？」

「ああ、いたよ。それがどうかしたか？」

あんまし思い出したいくないんだけどなあ…死にかけたし

「お、お前、大丈夫だったのか！？」

…成る程。こんなふうには色々巻き込まれるのか

そんなのゴメンだコノヤロウ

「いたけど再帰不能だったよ。四つの足全部折られてた」

…自分がやったから金くれって言うっても無駄だろうしな

「そうか！分かった、ありがとう！」

「…行つちまいやがったな」

さて、寢床を…

あれ？まだ昼じゃん

…眠いな

「パンでも食って寝るかな」

城壁（城じゃないから村壁か？）にもたれて昼飯を取り、そのまま寝ているホームレスの姿がそこにはあった

第4話 門番（後書き）

金が無くて昼間から道端で居眠り…

勇者の姿じゃないですね（汗）

第5話 大蛇（前書き）

……シリアスは入れるつもりでないのに……



## 第5話 大蛇

「…う……」

うー、頭痛い

ん？あれ、全身が痛い  
寝違えたのか

…そりゃそうだ

こんな硬いところで寝たんだ、当然か

「あー…ボーっとする」

低血圧つてやだなあ…

あ、もう夕方なのか

「……………ん？」

一つの家から何か呻き声がする  
いや、泣き声か？

「…入ってどうしたんですかって聞くのはNGだとして。」  
「  
どうするかね

「レオンとか何か知らないかな？」

この村の入り口まで歩く

「おーい」

相変わらず重そうな甲冑を身につけているな

「ん？どうしました？」

……レオンがきしょい

「あの…レオンさん？ちよいと気持ち悪くありませんか？」

我ながら失礼だな

「あ、いえ。僕はレオンさんじゃないですよ」

…そうだったのか

そりゃ毎日一人で門番やってるわけじゃないだろうしな

「ああ、レオンさんならその小屋にいますよ」

「そっか。ありがとう、今日の門番さん」

「いえいえ」

なんか…兵士っていつでもお堅いやつってわけじゃないんだな

そりゃ人間だし、当然か

そして教えてもらった小屋に向かう

「おい、レオンー。」

扉を開けるなり呼んでみた

すると小屋にいた5、6人の兵士っぽい人がこっちを凝視する

…気まずっ

「おお、どうしたんだユウヤ」

「こじじゃ話しづらすぎる

あとレオン、仮面で分からなかったが、お前って美形だったんだな

「そういえば…ありがとな、お前のおかげであの魔物を退治できた」

「へ？……ああ、あの黄色い化け物か」

「そっぴゃあの化け物、そんなに危険なやつだったのだろうか？」

もちろんオレにとっては危険極まりないやつだったけど

「あいつは魔法が効かない特殊な体質でな、おかげで自分も魔力が使えないらしいが」

妙なやつだな？

てか魔法で…使われたら絶対勝てないし…運が良かったな

「でもそれならレオン達で叩けばよくないか？多勢に無勢だろ」  
オレ一人で勝てたんだから

「それじゃありスクが大きいな。ヤツの襲撃からこの村を守るために戦力が分散されてな。それに何分、気性が荒い上にこついう甲冑も意味が無い程に一撃が重いんだよ」

やれやれ、といった風にレオンが首を竦める

…マジ死ぬとこだったんだな

「それで、話ってなんだ？」

「そうだそうだ。さっきあの家から物凄く気まずい声があるんだが…何かあったのか？」

誰かが死んだのだろうか

そついうのはあまり好きじゃないんだが

すると、ちよつと予想外の返事が返ってきた

「あつたというか…これからある、が正しいな」

レオンの表情が辛辣になった

やはりどのような形にせよ、嫌なことなんだろうな

「何があるんだ？」

「それはな…」

かい摘まんで説明すると

半年前、突然山からバカみたいにでかい大蛇が現れた。

その大蛇は不定期に村を襲い、その村で一番魔力の素質のある美女を攫うのだそうだ

始めの内は村人達も応戦していたが、王宮から派遣された兵士でも全く歯が立たないためにやがて村人が周期的に娘を差し出し始めたという

そしてちょうど今日の深夜が、その娘を差し出す日らしい

全く、ふざけた話だ

「今回は何故か白い髪を持っているのが気掛かりなんだが………ユウヤも行ってやるといい」

ちなみに、レオンも王宮の兵士らしい  
下っ端のようだが

「…連れ去られた人が生きている可能性は？」

実はいいヤツだったとかじゃ洒落になんねーしな

「無い。仲間が連れ出そうと後を追うと、既に村人は干からびて死  
んでいたそうだ」

「そうか」

連れ出そうとした…か

そんな勇者もいたんだな

「分かった。それじゃあその娘のところに行ってみるわ」

行って喜ぶわけでもなさそうだがな

悲しむくらいはさせてもらおう

家の中に入ると村人達が道を譲ってくれた

みんなもう話は済んでいるんだろうか

そして、悲しい運命にある無力な娘を見た

長く、白い髪の美しい人だった

その頬には涙こそ流れていないが、涙の跡はくっきりと残っている

何より、まだ幼いのだ。

自分と同じ年なのか、年端もいかないのか皆目見当もつかないが

気付けば、声を出していた

「…名前は？」

すると、少女は少し迷ってから

「…ミラ…」

と、こちらを見つめながら言う

続けて

「…あなたは…？」

何故か驚いた

オレの名前など、取るに足らないものだろうに

「…坂神裕也。呼び方は坂神でも裕也でも」

「…ユウ…ヤ」

なんでレオンといいこの子といい、ファーストネームで呼ぶのだから  
うか

まあどうでもいいが

「じゃあ、独占しちゃ悪いからな。オレはそろそろ…」  
ここにいと、泣きそうだ

そのまま立ち上がり、出口に向かうと

「じゃあね…ユウヤ」

さよならの挨拶をされた

だけど、何故かそれがあまりにも糞だったので

「ああ…またな、ミラ」



『またな』と答えた

ちよつと涙が出てきたので振り返らずに出ていった

外のもう冷たい空気を感じて考える

例えば、オレがその大蛇に立ち向かったとして

かなりの確率で勝てないだろう  
そして、村の中に出てきた大蛇にオレが牙を剥けば大蛇は村を襲う  
だろう

だから、身勝手な行為はいけない

だから、戦ってはダメなんだ

村に迷惑がかかるから

だから、一人で戦おう

第5話 大蛇（後書き）

シリアスですね…

坂神「このときはまだパジャマだけだな」

それはあんたが面倒臭がりだから

坂神「……………」

**第6話 神の力で悪を潰す（前書き）**

かなり真面目な戦闘シーン！

…バットを戻すのは仕様です

## 第6話 神の力で悪を潰す

大蛇が来る方角は分かる

どうせ祭壇がある方向だろう

その祭壇と思われる場所はひどく高いところにあり、そこからなら城壁（？）を越えて地平線まで見えるようだ

…その大蛇とやらが住む山も見えるんだろうな

「そついや…この世界に東西南北の概念はあるのか？」

ちよつどいい、着替えついでにレオンに聞きに行こう

…パジャマは恥ずいからな…

オレは兵士達の小屋に足を進ませた

「ちよいと場所借りるよー」

「…前回もだが突然入るのには自重しろ。ここにはとりあえず王宮の兵士がいるんだぞ、ユウヤ」

お気遣い感謝です

でも道端で着替えるわけにもいかないでしょ  
常識的に

「あ、そうだレオン。あの祭壇の方角は北か？あと大蛇はその方角  
から来るのか？」

私服に着替えながら方角の概念があるのを前提に聞いてみる  
後半は確認だ

レオンは案外普通に答えてくれた

「ああ、そうだ。だが、何故そんなことを？」

「何となく。分からなかったからだな」

よし、着替えも確認も済んだしそろそろ行くかな

「レオン、オレはそろそろこの村を出るよ」

レオンは少し、一瞬躊躇って

「　　そうか、一人で大丈夫か？」

流石、詳しいところまで突っ込まないのな  
人間できてるよこの人

「おう、だけど道に迷ったらまた来るかもな」

もちろん生きてたら帰るつもりだし、保険保険

「迷うなら早くしたほうがいいぞ。あの魔物も退治したから俺達は数日後には国に戻る。同行させてやるよ」

そうなのか

じゃあ戻っても詰みにはならないんだな

………それにしても

「じゃあ、また会えるといいな。レオンティウス」

「そうだな、サカガミユウヤ」

おお、苗字覚えてくれてたんだな

オレは小屋を後にして、門番の僕っこ兵士に別れを告げ、村を出た

「……レオンのやつ、気づいてたなあ」

そうでなければ、あいつはオレが今村を出ずにレオンのいた国についていく案を出していたはずだ

それよりもそろそろ深夜だ  
気を引き締めないとな

勝算？もちろんある

単純で、外してもすれば即ジ・エンドだが

「あれだ、神の一手ってやつだ。…おお、我ながら上手い」

化学の教科書をめくる

ダイヤモンドの構造って四面体だったよな…

「全く…使いづらいな…」

この力は

突然、目の前の山のふもとから馬鹿みたいな轟音が響く



「…来たか」

ズズン…と移動の音がする  
身体の芯まで響きそうになる

おおう、足がすくむぜ  
ん？身体が震えてる  
武者震いだコノヤロウ……  
あ、涙出てきた

もう大蛇の姿が視認できる

黒光りする鱗に、毒なんてあってもなくても噛まれたら即死しそ  
うな牙

目があっただけで身動きがとれなくなるだろう眼光

てか何よりでかい  
想像はしてたけどやっぱり想像以上の迫力だ

そして気がつくのと、すぐ目の前にそいつがいた

…あ、気づかれた？  
そっか、蛇って温度の違いで獲物を判断できるんだっけ

でも、そっちの方が好都合

「さあ、来いやああああああ!!!!」

叫んでみた

「キュルアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

…負けたな、いや分かっていたけども

てかノってくれるとは…ハハッ

袋からバットを二本取り出す

カーボン仕様は勿体ないので普通の金属製を

「二刀流……興奮すんぜ……」

もちろん強がりだよ!

無理矢理テンション上げてますが何かあ!?

大蛇が丸呑みにでもしようとしてるのか知らんが、大口開けて突進してきた

ジャンプ?そんなんで避けれるほど脚力ありませんよ?

「ふんぬっ!!」

歯にバットを引っ掛けてそのバットにしがみつく  
流石に金属は砕けんよな

もう一本は邪魔なので袋に戻した

突進はすぐに止み、一瞬静止する

チャンスはここだけっ！

慣性の法則でふっ飛んでいきながら右手を大蛇の頭部にかざす

炭素が四面体に連なっているイメージを『想像』する

右手の先 大蛇の頭部に目の焦点を合わせ、そのまま一息に

『創造』した

大蛇の頭部すれすれに馬鹿でかい四面体のダイヤモンドの角が現れ、

刹那のうちに大蛇の頭に突き刺さり、

そのまま地面に縫い付けた

「あぐ…がっ」

……… 反動でかつ

… まあ 想像はしてたが

オレの意識はフェードアウトした



第7話 再来（前書き）

説明ですね、ハイ

あんまり好きじゃないです、説明

## 第7話 再来

「ここは…?」

ああ、分かった

夢だな

夢って分かる夢を見るのも久しぶりだな

ふと見ると、紅い髪と紅い瞳の自称神が見えた

「久しぶり〜」

お久しぶり〜じゃねえよ

「おい自称神。今までどこにいやがった」

何度死にかけても出てこねえし

「いや…ね?まさか魔力の類を無力化するなんて考えて無かったんだよ」

つまりは予想外だったと

…オレはマジで危なかったと

「それは何か?つまりオレは死んでもおかしく無かったと?」

すると自称神は深々と頭を下げて

「それは…ほんとゴメンナサイ」

謝った

神様も謝るのか、へー

「なんかこつちの世界への干渉がしにくくなってね。ほら、前より光ってないでしょ？」

確かに…前はまともに見れなかったからな、赤すぎて

よく見るとその自称神は髪はロングで、真っ赤なワンピースを着ている

なにげに可愛いかったり？

「うん、で？」

続きを促す

「だからこれからもあんまり手助けできないかもしれない。今だって制限時間あるし」

神が手助けしてくれるんなら大助かりだったんだけどな

てか時間制限あるのか

だったら質問をできるだけ消化しないと



まずはこの力

「あの時分けてもらったこの力。使い勝手悪すぎるんですけど？維持できないし、反動デカすぎて連発できないし」

「ああ、すぐに慣れると思うよ、あんな無理したんだし。というかよくあんな精巧な物質を造り出したもんだね。維持できないのも使い続ければ想像力を伸ばせるよ。あと、コツを教えようか？」

…無我夢中だったしな

コツは是非知りたい

「無意識にやってたみたいだけど、右手をかざせば想像を一気に移さなくてもいいんだよ。まあ負担は大きくなるけど」

成る程な、部分部分で分けて少しずつ移すことができるのかかなり助かるな

「それと材質もイメージするのは難しいでしょ、ダイヤはいい発想だったけど。」

炭素だけだったからな

化学の教科書で炭素一つの重さも大きさも見た目もダイヤの構造も分かるし

てか

「それ、克服できるのか!？」

克服できれば本当に頼もしい

「うん、肌に触れている物の感覚を頭のイメージに移すんだよ」

「…ということとは、あれか？鉄の何かを創造するときにはバットを握れば材質はOK？」

「そうそう、飲み込みが早くて助かるよ」

やった、これで原子の性質やら分子の形やら構造やらを考えなくてすむ！！

「そうだ、今はまだできないだろうけど一応。…創造できるのは物体だけじゃないからね」

「それは…例えば？」

「闇だの恐怖だの光だの…といったもの。他にも、新しい性質の分子とか原子とか。事象だってOK。練習する価値はあると思うよ」

…使いこなせればホントにチート級の強さだな

「ホント…無敵だな」

「神だよ？当たり前だよ」

そりゃそうだ  
何たって神だもんな

「あ、そうだ。言葉が通じるのは気にしちゃ負けなのか？」

地味に気になるんだが

「そんなに丸つきり根拠が無いわけじゃない。こつちの世界とあつちの世界は関係あるんだし、季節だって同じはずだよ」

そつといえば互いに支え合つてるとかなんとか言つてたな

だから重力とか一日の長さとかも変わらないのか、やりやすくて助かるな

「あ、そろそろ限界みたい」

「そつか、じゃあな」

「うん、またねー」

ここで目が醒めた

てか全身がヤバイ

痛い？いやヤバイ、ホントにヤバイ

筋肉痛？違う、ヤバイんだ。とにかくヤバイ

ふと、大蛇を倒せた達成感が沸き上がってきた

おお、ヤバさとブレンドして歓喜と狂気でイヤッフィー

…あ、涙でてきた

霞んだ視界を脳がやっと認識する

「…よう、起きたか。ユウヤ」

「よ。迷子になれたぜ、レオン」

第7話 再来（後書き）

…何か書きたいなあ

## 第8話 お別れ（前書き）

…書き方を少し変えてみたり

少し見やすくなりました？

## 第8話 お別れ

「まあこんなことになるのも想定すべきだったよな」

…今、オレは奉られている

村人のみんなは本当に嬉しそうに、楽しそうに騒いでいる

それだけあの蛇を憎んでいたんだな

でも祭壇に奉られるのはなんか、生贄にされてるみたいで嫌ですな

「なあー！下りていいかー!?!」

レオンに叫んでみる

だってみんなオレそっちのけなんだもん

すると下から声が返ってきた

「いいぞー！多分ー!」

多分てなんだよ、多分て

まあいつか、下りよう

…つかかなり情けない話、下りれないんだが…  
だってさ、全身ギシギシいってるよ？

痛みなんてほとんど感じれないくらいなんだよ？

なのにさ、村人のみんなさ、勇者だ！黒髪の勇者が現れたぞー！…  
とかいって担いでいきやがったし…

あ、涙が…

なんだよ？

怪我した猫を木の上に乗せて下りられないのを見るのと同じだぞ？

…想像したら思った以上に酷いな、これ

…さて、どうしたもんかな

「レオンー！下りれねえー！」

とりあえず叫んだ

プライド？羞恥心？そんなのシラネ

「はあー！？お前、高所恐怖症だったのかー！？」

「違……………とりあえずこっち来ーいー！！」



と、こんなくだらない  
というか情けないことがあった後

「そつだ、レオン」

兵士の小屋で話す

「ん？なんだ？」

「これからお前のいた国に行くんだろ？やっぱりこの黒髪は目立つ  
んだろつな」

道行く人全員に凝視されるなんて冗談じゃないぞ  
一体どんな羞恥プレイだよ

「そつだろつな、少なくともオレは初めて見たし」

「だからさ、赤いカツラとか無いか？」

我ながらナイスアイデアだと思うんだ

「あるにはあるが…赤いのでいいのか？赤い髪なのに炎の呪文を使わないと怪しまれるぞ？」

そうなのか、どうやら髪の色と魔法の系統は関係あるみたいだな

「うーん…じゃあ金属の系統の魔法とかはあるか？」

これからはそつち方面のチート技を使うつもりなんだし、あつたらピツタリなんだけど

「金属の魔法？そんなの聞いたこともないぞ」

あえなく撃沈

どうする？

…面倒臭いし、赤でいつか

「あーじゃあ赤でいいや。炎使えばいいんだろ？」

マッチの赤リンと熱を同時に創造すればいけそうだし

…でもどうせ主には剣だろうな、あんまし力使えないし。反動のせいで

「髪が赤いと炎以外使えないのか？」

この制限があつたらちとキツイ

「いや、そんなことは無いな。俺だつて炎を扱うことはできるし。ただ威力は弱いわ効率は悪いわであんまりいいことは無いぞ」

使えるだけで十分だ

「それで、次はこっちからの意見なんだが。いいか？ユウヤ」

「ああ、いいよ。なんだ？」

「お前には軍に入隊した方がいい」

「…へ？なんで？」

「国が退治できなかつたあの太蛇を倒したんだ、国にとってはメン

ツ潰れもいいところだろうさ。それで、お前を消しに来るかもしれない。国ってやつは威厳が無いと潰れるんだよ」

「ああ成る程、そこでオレが軍に入隊すれば威厳も保たれて、同時にオレも消される動機が無くなるのか」

全く、ほんとに面倒臭いな

「そういうことだ。なんだか物凄く申し訳ないが」

「なんでレオンが謝るんだよ。…まあいつか、入隊するよ」

「助かる」

あ、でも束縛されると色々ヤバイかもしれないな  
文字通り、『神のおつげ』とやらもありそうだし

「でも、いきなり単独行動とかするかもしれないが、いいかな?」

「ばれなきゃ大丈夫だろ、ばれなきゃ」

ばれたらどうなる?」

…まあいつか

いやあんましよくないけども

「で、もうすぐ出発だ。行くぞ」

「了解」

小屋からでて村のたった一つの出口に向かう

すると、あの髪の高い少女が駆け寄って来た

「おーミラ、無事だったか」

何となく頭を撫でる

すると少女　ミラは少しはにかみながら、笑顔で言った

「…うん…『また』、会えた」

…そっか、確かあんどき『またな』って言ったんだっけ

…はずっ！恥ずかしい！！

「それで…一緒に…行きたい、な…って…」

上目使いで見上げてくる  
うわやっべ萌える

だけど…

「あー、なんだ。せつかく助かった命だ、危険に晒すなんて勿体ないことはやめなさい」

きつとオレについて来たらきつとまた死にそうになる

いや、死ぬかもしれない

てか最終目標は打倒神らしいし

「で……でも…！」

「ダメだ。ミラには生きていて欲しい」

「それじゃあ…ユウヤは…？」

「大丈夫だ、オレは無敵になる予定だからな。それに、またいつかここに帰ってくるから、な？」

「……………うん、分かった…じ、じゃあ…絶対に、戻ってきてね！」

「おう、まかせろ…！」

そこでレオンが

「おーい…そろそろ行くぞ、仲間が待ってる」

「あ、わりい」

そして、村の外にある馬車へ向かう  
…馬車なんだ…

そして振り返って

「じゃあな…ミラー！」

「うん！ありがとう！またね、ユウヤ！」

そのまま馬車に乗って

「…ふう」

「大丈夫かユウヤ？身体、ほとんど回復してないんだろ？」

大丈夫じゃねーよ

正直しばらく動けそうにない  
少し、いやかなり休ませてもらおう

「爆睡モード、入りまーす」

「なんじゃそりゃ」



第8話 お別れ（後書き）

読み返すと…展開遅いですね（汗

でもこればかりは…

第9話 波乱の予感（前書き）

…休みのうちにいくつか投稿しようと思っていたのに…

なんでこんなことだ…（泣

## 第9話 波乱の予感

三日後

療養完了、完全に完治したぜ

いや、それよりも国だ  
本物の国だ

外見はさっきの村とそう変わらなかった  
いや、目茶苦茶でかいが

そして、予想してたよりは大きくないが馬車がゆっくり入れるくらの門をくぐる

…なんかゆめタンの駐車場みたいなところに出たんだが  
暗くてよく見えないな

「おい、ここからは歩きだ」

ああ、成る程。

ここは駐車場ならぬ『駐馬場』といったところか

…あれ？馬ってこんな暗い場所で育ててよかったわけ？

オレをいれて七人で奥へ向かう

そういえばレオンと僕っこ以外口を聞いてすらいないな  
まあ全員寡黙なヤツってことにしておこう

隣で歩くレオンに話しかける

「なあ、レオン。報酬とかって出ないのかな？金欠なんだけど、つかぶっちゃけ無一文」

「断定はできんが…期待はしてていいんじゃないか？」

「マジでか！金が無いと色々不便だからな。…それと、今どちらに向かわれているの？」

「隊長んところにな」

「隊長？そついや軍ってどんな内部構成なんだ？」

「ん？言ってなかったか？…いや、来る途中に言っただろ」

「え？オレはここまでほとんど爆睡してたぞ」

「は？じゃああの受け答えは？」

「返事してたの？…多分それ寝言。もしくは眠る寸前の頭で適当に返してたか」

「…フザケンナ」

いやぁ悪い

でも起きてると痛かったんだもん

「お願い！もう一度！」

「仕方ない…でも次はないぞ？」

「助かるっ」

軍には階級があるらしい

基本的には第一級から第十一級までで、第五級から第一級は上流階級とみなされる

特に第一級は貴族みたいな扱いだとか

ちなみに、上流階級になると一般階級の民とは別の区で生活できる

とか

まあもちろん隠密行動を主にする部隊や専属の護衛兵士などの例外もあるが、そこは結構曖昧で状況に応じて作られたり解散したりしているらしい

レオン達は五級だそうだ

上流じゃん、うへあ

ちなみに、入隊試験でオレは四級の人間と戦うらしい

勝つ負けるでなく『どれだけ刃向かえるか』を主に、どれだけ技を使えるか等で判断する

と、こんなところだ

てか入隊試験で戦闘なのかよ

「それより…おいレオン、まだ着かないのか？」

さっきみたいな真っ暗ではないが、ずっと廊下を歩いている

すると、突然レオンが言った

「あ、ここだここ。この部屋で少し待っててくれ」

「お、おう」

そう言っつて部屋に通された  
あ、取っ手あつたんだ

…しかし…

「…何故に畳？イスも何もない中で畳のみ？正座でもしてると？」

…ここは何の部屋なんだ？

流れで行くと応接間か待合室じゃないか？  
こんな部屋が？冗談じゃない

「…だが、この坂神裕也。正座ごとき、もはや朝飯前なのだよ」

仕方ないので正座する

どうせ報告とやらが終わればすぐにでていくんだ

…得意なんだよな、正座

小さいころからずっとさせられてたから…

あれ？泣きたい

そのまま正座で待っていると、不意に扉が開く  
レオンか

ガチャッ

… 青い修道服に銀髪の女性と目が合った

「……………」

パタン

… タッタッタッタ

… !ダダダダダダダダ!

「いたぞ!こつちだ!」

「なんて足の速いんだ!? あんな服装なのに!」

「いいから走れ! また見失うぞ!」



「え？何？なに？」

第9話 波乱の予感（後書き）

後書ききまりっ！

とある日記

「せっかく助かったんだから、  
何かしなくちゃ

と思って今日から日記を書くことに決めた。  
続くかな？ 続くといいな」

第10話 試験開始(前書き)

……ギャグ？

無いですよね……すみません……

## 第10話 試験開始

変なことがあったあと

オレはレオンにある部屋に連れて来られた

石造りの壁に囲まれて、所々にいろんな武具がおいてある

「今から入隊試験だから、しっかり身体を馴らしておけよ」

「は？今から？」

「おう、一時間後だ。オレも観覧席で見てるからな、気い張ってけよ。ちなみにそこらへんの武器は使っていないぞ。持参のでもOKだ」

「おう。…じゃなくて今から？お、おーい……………行っちゃった」

…やべ、技考えなきゃ

赤髪なんだから炎使わないとな  
んで、その印象を叩き込むための盛大な『開始ぶっぱ』を使えば後  
はいいだろ

だから…あ、熱が出せんかったときのために黄リンも考えてないと

んで、形は…

あ、そういうや爆薬って…ニトログリセリンが…知らないな

あ、燃焼とかは…

炎色反応使ったらカッコイイのができそうだな…

あと、保険にこれとあれと…

教科書を見ながら色々紙に書いていく

「うし、完成」

攻撃パターンとか色々しっかりしてるぜ

あ、そだ

鎧とか着なきやな…

軽いやつと

コンコン  
扉をノックする音が聞こえた

「あ、はい」

「準備はできたか？」

「完璧ッス」

「そうか、しかしお前もツイてないな」

「え？」

「入隊試験で隊長に戦うなんてよ。まあ、頑張りな」

…神様はオレを見放した？

いや、自称神はこっちにあるんだが

「え、マジっすか。でもまあ最善は尽くしますよ」

「死なないようにな」

…おい

そんなこと言うなよ

泣きたくなる

「あわよくば勝ちたいッスね。てか勝つつもりですけど」

「いい心意気だ。さあ、この奥が闘技場だ」

「ういっす」

そのまま奥に向かうと広間にでた

その広間は円形で天井が無く、周りに観客席がある

いわゆる、コロシウムってヤツだ

今は人はかなりまばらだけど、時には凄い人数が集まってそうだな

周りには審査員と思われる人もいて

広間の真ん中には真っ赤な鎧に身を包んだ男がいた

こいつが第四級の隊長か

炎髪灼眼ってやつだな、男だけど

顔？ああ、イケメンだよ？

「来たか！話は聞いたぜ？なんでもあの大蛇を倒したそうじゃないか！強いのか？強いんだろ！？」

なんだこの熱血バカは

「ああ、まあそうだ。名前は坂神裕也、呼び方は坂神でも裕也でも」

「おっと、まだ名乗ってなかったな。俺はフォルス。フォルス・アルバートだ、よろしくな坂神！」

…苗字だ

しかもニュアンス合ってる

「よろしくな。んで、いつ始めるんだ？」

気づけばめっちゃタメ口

あんれ？

「そうだよな！そのこのネーチャンが開始の合図を鳴らしたら戦闘開始だ！ほら早く！」

そんなに急かすなよ

そこの大人しそうな女性もビビってるぞ

「あゝ！？お前が話してるから開始できねえんだろっが！」



!?

なんだ、大人しくないじゃん

「んじゃ行くよ!?!?始めっ!?!」

フォルスが剣を抜いて突進してくる

てかいきなりかよ

でもとりあえず当初の予定通り右手を突き付ける

「デス・フェニックス!?!」

『開始ぶっば』「うー」

## 第10話 試験開始(後書き)

短っ！

くとある日記

「今日は料理に挑戦した。

だけど…おじいちゃん、味見したときに『うん、美味しいよ』って  
言って倒れちゃった。

流石に私は味見する気にならなかった。

おじいちゃん、ゴメンナサイ…

でも失敗は成功の元って言うし、これも見方を変えればいい経験…  
かな？」

第11話 紅蓮の不死鳥（前書き）

何故今日の閲覧数が急に伸びたんだろう？

そして今日長っ！

あくまで主観ですけどね

## 第11話 紅蓮の不死鳥

メモを見ながら叫んだ

「デス・フェニックス!!」

かなり細部まで想像したそれを  
オレの目の前、フォルスの眼前に『創造』する

まばゆい閃光とともに、辺りの温度が急激に増加する

いかん目を開けてられない

くそ、この隙に攻撃するつもりだったのに

やがて光が収まる

…目がちかちかする、チキショーめ

すると、フォルスの声が聞こえた

「はあー…はあー…ぐ…！…なんだ…今の、は」

どうやら突っ込んだようだ

この阿呆め

この力は少なくともオレには創造しかできないため、移動能力は皆無  
つまり、基本的に自ら飛び込まない限り無害なのだ

しかし

「あーくそ、いつてえ…」

反動はでかい

なんせ質量はともかく、複雑さはダイヤモンドの数倍だ

でもダイヤで大分慣れてたおかげか、ダメージはそこまで大きくない  
動ける

「うおりゃあっ！」

袈裟掛けに斬りかかる

「くっ……ふんっ！」

ギインツ！

オレの剣が宙を舞う

やはり隊長か

「だがしかしっ！！」

そんなことは予想してた

だから馬鹿正直に斬りかかった

勢いのまま右腰の袋に左手を突っ込み、左に一回転する

左足で踏み込む

「！？…くっ！！」

フォルスの右手が光り、咄嗟に防御膜を張る

だがそんなものは関係無い！

抜きたるは我が至高の一振り

「BEYOND・MAX！！！！」

パキーン！

ドフンッ！！！！

独特の打球感が腕を伝う

今のは我ながら会心の一撃だった

胸を鎧越しに殴打されたフォルスは吹っ飛んで転がった

審査員の一人が寄っていく

フォルスはどうやら気絶しているようだ

ヤベ、勝っちまった

…ちよつとやり過ぎたかな

「さ、坂神裕也の勝利…」

審査員は本当に驚いているようだ

やがてまばらだった観客席から、やはりまばらに拍手が聞こえる

中には指笛を鳴らす者もいる

するとあの大人しくない女性が話しかけてきた

「うん…それじゃあ…結果は後で知らせるから、あの控室で待っていてくれる?」

「あ、分かりました。…なんかスンマセン…」

なんかKY感の中で本当は黒髪の赤いカツラを被った坂神裕也は、  
すぐごと控室に戻って行った



（控室）

鎧を脱いで、ふと呟く

「あゝ… やつちやった感がなあ…」

てかフォルスのやつ、魔法って防御膜しか使ってないし  
なんか実力を出される前に倒しちやったなあ…

ラスボスが通常攻撃しかしてない内に倒したような、そんな空虚感だ

「まあ、やつちやったんだ。後はどうにでもなれと」

段々面倒になったので投げやりになってみた

それにしても、カツラ、暑いな  
今が秋だからって関係ない

暑いもんは暑い  
だからちよいとカツラを脱いだ

「あゝ、随分と涼しいわ」

ガチャッ

銀髪に青い修道服

「すみません、赤髪の人！ちょっと匿って下さ……え？」

「あーはいはい匿うのね！？いいよ！ほら、そこに丸くなって！」

背後に回って背中を押す

その隙に赤いカツラを被った

「え？いや、髪……あれ？赤い？え？」

オレが思うにこの人はバカだ  
なので隠し通す！

「いや、オレは赤髪だよ？何言ってるのぞ」

「いやでも…今確かに…黒髪…？」

「見間違いだよ、ホラ。どっからどう見ても赤髪だ」

ダダダダダつと足音

「あ、来ました」

咄嗟に身を隠す変な人

やがて扉が開く

「すみません！ここに変な娘は…」

「変な娘ですか？ここには誰も来ませんでしたけど…」

即興のポーカーフェイスで対応する

てか変な娘って…

「分かりました！ありがとございませす！…クソッ、どコト…！」

兵士はそのまま去っていった

「ありがとう、変な髪の人」

「黒髪だっ！…間違った、赤髪だっ！」

あゝもう！何なんだ、この女性はっ！？

「てか、あんたは誰なん」

「それじゃ、さようなら。どうもありがとうっ！」

出て行った

…ホント、何なんだ？

不意に扉が開く

「坂神クン？」

あの大人しくない女性だ

「えっと…とりあえず第3部隊に配属ってことになったけど、いい？」

「ハイ、第3部隊ですね。あ、そうだ。…療とか…あたりしません？」

「え、療？そんなのないけど…」

「……………ハイ。分かりました」

…報酬が無かったらまた野宿か？

いや、働かずに寝床を欲しがること自体おかしいのだろうか？

バイトとか探さないといけないのかな…

「それと、これは私情なんだけど」

「え、何？」

「アタシと戦ってくれませんか？」

おっとビックリ

てか無理、『デス・フェニックス』で身体が思った以上にボロボロなんだよ

だから、一度言ってみたかった台詞を言おう

「女性」

「女性を殴るなんてできない　なんて言ったらしばきます」

ひどいやひどいや

つかシバくって…随分おてんばだなあ

「あゝ、ゴメン。ホント無理なんだ。さっきの戦闘でもっ…」

「え？一撃も受けてなかったでしょ？」

「そうじゃなくて…力の反動が…」

いやまて

『自分の放った魔法で自分にダメージ？  
しかもそれを開始直後に出していた？』

…ダメだ、カッコ悪い（汗）

「実はあの魔法、まだ使い慣れてなくて…それで少し思った以上の力がですね」

うん  
嘘はついてないぞ

「謙遜しないでよ。無方陣無詠唱で何言ってるの?」

あゝ…それは失念してた

…やむを得まい

「ああ、分かったよ。でもこれからだと日が暮れるから、明日な」

「分かった、じゃあ明日の早朝こいでね」

ふと思う

これ、ダサくても『反動で身体が…』って言ったほうが良かったんじゃないか…?」

…泣きてえ

第11話 紅蓮の不死鳥（後書き）

時間ギリギリ…

くとある日記

「今日も料理に挑戦しようとしたらおばあちゃんが先に作ってくれていた。

いつもはあんなに早く作らないような…

でも、大皿を囲むときって必ず最後の一個が余るんだよね。

これが…深層心理!？」



第12話 本日三度目(前書き)

…もっとギャグ入れたいですねー

## 第12話 本日三度目

なんだここは

居間、廊下、キッチン、トイレ  
イス、机、ソファ、ベッド

「これは…泣けるぜ…」

嬉し涙だぜ

あの後レオンに会って『デス・フェニックス』を相当褒められた

そのときに報酬の話に移って、オレが「金でもいいけどやっぱり部屋  
が欲しいな」とぼやいたところ、見事に『家』を手に入れた

…家だぞ家!?

喜ぶしかないだろう!!

ちなみに、レオンに家まで案内されてこの国の作りが大体分かった

あのコロシウムは一般階級と上流階級の住居の境にあり、大体誰でも自由に入入りできる

そしてこの国の出入り口は何箇所かあるようだ  
そりゃ逃げ道くらい無いとな  
広いし

ああ、一般階級と上流階級の住居と言ったが、どちらも自由に入  
りできる

規制がかけられているのは図書館とか貴族とやらが住む城くらいだ  
そうだ

図書館？ああ、一般用と上流用と貴族専用の三つがあつて、魔法書  
とかがあるらしい  
そのうち行ってみよう

「レオンの家とあんまり近くないのはちと残念だが……」

そういえばもう一つ  
なんか兵士の訓練とかその他諸々の通知はポストつぽいのに入れら  
れるらしい

返す必要があるものには返事を書いて郵便局つぽいところに届け  
ばいいらしい。  
例外もあるらしいが

その他にも教会とか色々あるがそれらは適当でもいいとのことなので、ゆっくり知っていきいこうと思う

「……………ヒマだな」

飯はパンを食ったし

風呂入ったし

体を動かさそうにも激しい運動はまだ無理だし

技考えるのも飽きたし

「…寝るかな」

まだ薄暗い程度の時間の中でオレはベッドに向かう

嗚呼…久々の寝床だ…

そのとき、扉をノックする音が聞こえてきた

コンコン

ガンッ！ガンッ！

ドンドンドンドン…！

ゲシッ！

「おいちよつと待て！今蹴った！？人ん家蹴った！？」

扉を開けると

そこには今日三回目の銀髪と青い修道服

ああ…こんな気はしたんだよ…『ガンッ！ガンッ！』辺りから…

「あ、ど、どうも…こんな夜分に…すみません…あ、赤い髪の人じゃないですか！なんでここに！？ストーカーですか！？」

この場合ストーカーはお前じゃないのか！？とか

いやお前知らない人ん家蹴るのかよ！？とか

そもそもお前誰だよ！？とか

言いたいことはありまくりだけど

「…とりあえず、入るか？」

「あ、どうも」

こんな寒い中でぶるぶる震えてんだもんよ  
いや後半は元気だったけど

く居間く

「で、事情を聞こうか。てかお前は誰だ？」

「どっちか一つを質問して下さい。ちなみに選択肢は事情を聞くか、  
事情を聞くかのどちらかです。何となく」

「……………まあいいや。じゃあ事情を聞こう」

ツッコんだらこいつの思いつっぱだ

「いやですね、最近警備が厚くなってきてですね。次捕まると脱走  
に苦労しそうなんですよ。だから、ちょっと泊まらせてもらおうか  
など」



「あの…もしかしてどつかの偉い人とかだったりします？てか単刀直入に言つと、姫様とか？」

「そんなはずないじゃないですか。確かにここのお姫様も家出癖があったりするらしいですが、少なくとも私はお姫様じゃありませんよ」

良かった…

最高にややこしいことにはならなさそうだ

いやぁ本当に良かった

「というか服装で分かりませんか？修道服ですよ修道服。教会の関係者に決まってるじゃないですか」

「あ、確かに。いやぁ少し動転してたようだ」

「それと、いつまでレディを居間で立ち話させるつもりですか？なんかもう暗くなっちゃいましたし、寒いですし、お風呂を借りたいんですけど」

「あ、うん、ゴメン。風呂はそこを曲がったところだから、どうぞ？」

「ありがとうございます」

その銀髪で青い修道服の人は呑気そうに風呂場に向かっていく



が、ふと振り返り、真顔で

「覗いたら、滅びます」

そう言つと今度こそ風呂場に入つていったようだ

「…で、結局何も分らんのかよ」

名前すら聞いてねえ

第12話 本日三度目（後書き）

…最近、眠いです…

〜とある日記〜

「今日、村を魔物が襲ってきた。

村に入った途端村のみんなでケチヨンケチヨンにした。

でもその魔物には魔法が効いてたけど、なんでだろう？

魔物なんて滅多に來ないのに、まあそれはたまたまなのかな？」

第13話 お泊まり(前書き)

…詰みじゃない

これは詰みじゃない…

### 第13話 お泊まり

風呂上がりの彼女に問う

「んで、結局お前は誰なんだ？」

「あれ？言っでなかつたですっけ？私の名はフィリス。フィリス・レジーナ。教会で修行中の麗しき歌姫」

いや、確かに美女なんだよ？

だけど自分で言うなよ

麗しき歌姫ってなんだよ

「それであなたは？」

「へ？あれ？オレも名乗ってなかつたっけ？」

「そうですよ、私の中ではずっと赤い髪の人ですよ」

良かった

赤髪で定着してる

「そっか。オレの名前は坂神裕也。呼び方は坂神でも裕也でも。これでもいいか、フィリス？」

「いきなり名前で呼ばれるのも違和感バリバリですね。じゃあ短い間、よろしくお願いします。裕也」

「ああ、よろしくな」

気がつくともう夜じゃないか  
明日寝坊したらシャレになりそうにないのに

「んじゃもう寝ようか。ベッドはそこにあるから。」

「はい!？」

「何驚いてんの？まさか、一緒にとか考えた？この馬鹿野郎」

「馬鹿ってなんですか!というか、『オレがベッドで寝るからお前は床で寝ろ』って言われると思ってました。意外です」

「オレはどれだけ鬼畜なんだよ!ちゃんとソファで寝るよ!」

「けど、寒くないですか?」

「フフフ……実はこの押し入れには毛布があるのだ!驚いただろう?驚いただろう?」

さっきフィリスが風呂に入っているときに見つけたのだ!

これで寒さ対策は完璧!

「なんでそんなに誇らしげなんですか……でも、多分寝違えますよ？」

「外に比べれば…壁に比べれば…どうということは無いです！」

あのをきを思い出すと…

今でも泣けてくるぜ…うつうつ…

「同情します…じゃ、お言葉に甘えてベッドを借りますね。ありがとうございます」とうございます

「どういたしまして。ほんじゃあ、お休みフィリス」

「おやすみなさい、裕也」

ソファーに横になり、毛布で包まる。

寝息が聞こえた

…寝るの早っ！！

まあ今日はかなり走り回っていたようだし、疲れてるんだろうな

かく言うオレも、疲れたし痛いし早く寝てしまおう

「……………」

「次の朝」

「あー…」

眠いよ

やっぱり熟睡するとダメだな

二度寝したい衝動に駆られる

「おっと…ダメだダメだ。今日はコロシウムに戦いに…ふああ」

いかん、まぶたが重い

このまま寝てしまっ…

「起きろー…オ・レ！」

毛布を投げ捨てて奇声を上げる  
どうだ、これなら…

「きゃっ！」

ビシヤッ

…牛乳…オレの顔に…

「うん、完全に目が醒めたよありがとう」

「だ、だって急に起き上がって毛布を投げ付けてくるんですもん！  
…すみません」

どうやら、牛乳を飲みながらオレを起こすかどうか迷っていたところだったそうだ

てか、そっぴや、コイツがいたんだっけ…

「とりあえず掃除するか…」

「そうですね…」



着替えて雑巾持ってきて牛乳の後を拭く

そうしている内に、ふと気になったことを聞いてみた

「フィリスはこれからどうするんだ？」

「え？うーん…教会に戻るのもなあ…あの人面倒臭いしなあ…」

あの人？

コイツが面倒臭いと言っただ、そいつは相当…アレなんだろうな…

…逢いたくないなあ…

「で、結局？」

「裕也さんについていこうかな、と」

「あ、そう…」

まあ断る理由もないし、いいか

「裕也さんの周りって面白いことがありそうですしね」

「まあ…確かに…な」

鋭い

ちよつと今からコロシウムに行くところだ

「…んじゃ、片付いたし、そろそろ行くか」

「へ？どこに行くんですか？」

「コロシウム」

途端にフィリスの顔がにやける

「やっぱり…面白いことがあるんですね！」

オレってそんなに面白いことを呼ぶように見えるのかなあ…？

「いいから行くぞ、今すぐだ」

「はい」

鍵を持って家から出る

フィリスも続いて出たのを確認してから、鍵を閉める

「おっと、郵便を確認しないと」

ポストつぼいのを確認する

あれ？何も無い

てっきり部隊から何かあるかと思っていたのに…

「いいや、行こう」

そうして二人はコロシウムに向かって歩き出した

### 第13話 お泊まり（後書き）

短いなあ…

〜とある日記〜

「今日はまた魔物が出てきて、久しぶりに魔法を使った。

むやみに使うなって言われてたけどみんなが苦戦してたからいいよね？」

それにしても…今日で二回連続？これもたまたまなのかなあ？」

第14話 試合 そして黒マント（前書き）

時間ギリギリ…！  
そして短い…！

## 第14話 試合 そして黒マント

（控室）

できるだけ軽い鎧、軽い剣を選ぶ

ポケットには『デス・フェニックス』等のメモ用紙を

袋の中にはいつもどおり鈍器を

「うし、それじゃあ行くかな」

またあの広場に足を運ぶ

不意に、なんでオレこんなことしてるんだろうと思ったが、そこは  
全力で無視する

「 来たか」

「来なかったらどうなっていたか、分からなかったからな」

「じゃあ、始めるぞ?」

目の前には、鎧を着て両手に短剣を二本もつ紅い髪の女性。  
髪が紅いってことは炎を使うのか

てかこの人、昨日と比べて覇気が溢れてるよ  
…まともじゃって、勝てるかオレ？

ちなみに、フィリスは観覧席のどっかで隠れて見ているらしい

「ちょっと待って、自己紹介くらいしないか？」

「え？ああ、そうね…私は第3部隊 あなたと同じ部隊の、フレ  
イ・カシミアよ」

「オレは坂神裕也。呼び方は坂神でも裕也でも」

「ええ、分かった。じゃあ始めよう、坂神裕也」

「おっ」

静寂が二人を包む

審判なんていないので、開始の合図が無い

しかし、そんなことは杞憂に終わった

「行くぞ!!!」

突然、短剣を投げてきた

不意を突かれたが

それを紙一重で避ける

「うおっ!…つとと」

二本を警戒して

咄嗟に崩したバランスを整える

だがフレイは短剣を投げる気配が無く、ましてやこちらに来る様子すら無い

「フレイムボール!!!」

突然複数の火球を放った

そうか!もう一本は杖の変わりりで、投げたほうは詠唱のための時間稼ぎか!

「うおおおお!!!」



次々に襲い掛かる火球を剣で薙ぎ払う  
ふと、視界にこちらに向かって走るフレイを見つける

ちっ、同時攻撃か！

…仕方ない

素早く右手をフレイに向ける  
避けきれない火球が掠るが、それは無視

『創造』

手の平に面が当たるようにして、ダイヤモンドのほぼ無敵で透明な  
壁を創る

反動はほとんどない  
慣れって凄い

オレが知る最強の盾はこれ以上の火球を防ぎ、さらに向かってくる  
フレイも…

ガァンッ！

「へぶっ！」

鈍い音とともにフレイがぶつかる

あれだ、下を向いて歩いていたときに電柱にぶつかる痛さ…と言えば分かるだろうか  
しかも全力疾走なので痛さ倍増！

……うわっ…痛そ…

グシャ、とフレイが仰向けに倒れる

そしてすぐに額辺りを押さえて

「いっつっつっつたあああああああああ！…！」

ワオ、絶叫だ

わかるわかる、泣けないくらい痛いよなあ…

でも試合なんで、とりあえず剣を突き付けて

「オレの勝ち」

「うう……分かった。私の負」

突然、オレとフレイの横の空間が歪む

「「!!!?!」」

歪んだそこから出てきたのは装飾のある黒いマントを羽織り、頭部は黒い兜で覆われた「人」

ソイツの目がオレを捉え、次に口を開いた

「貴様か」

その手をオレに向ける

刹那、ソイツが視界から消え、コロシアムの一角で轟音

次に現れたのは

「無事…ですね、良かったです」

フィリスだった

フィリスは、先程轟音があったところを向くとすぐに詠唱を始めた

「主は無属なれ。主の性は乙女なれ。主の身は常に清められし身なれ…」

そして、主は汝の気に召すものであれ。》

コロシアムの一角　その煙が少しずつ晴れ、あの黒マントの影が現れる

「《我は条件を満たしつる者。故に汝の降臨を望む》  
来なさい。私の十八番」  
さあ、

詠唱が終わると同時に、フィリスの足元に大きな魔法陣らしきものが現れる

そこから現れたのは、美しい純白の女神だった

第14話 試合 そして黒マント（後書き）

展開が遅い？

重々承知しています  
ホントにすいません

〜とある日記〜

「…今日はとても眠いので、日記は『眠い』だけにしようと思った。  
でもこれも日記だよな  
…と言いつつ」

第15話 助け(前書き)

短っ!!

ホントすいません!

…短っ!!

## 第15話 助け

なんだこれ

目の前にはフィリスと、その背後の純白の女神

なんだこれ

フレイとの試合が終わったらいきなり黒いのが現れた

フィリスが助けしてくれたところを見るとすごい危ないらしい

「フィリス！なんだこれ！？」

後ろ姿のフィリスが落ち着いた口調で話す

「私から離れないで下さい、死にますよ？」

「お前だったら勝てるのか？アレに」

「私では多分無理です。それよりも、今は死なないことを考えて下さい」



うへえ

大ピンチ？

その時、黒マントが動いた

「ラ・ゾーイディオン」

いきなり黒マントの背後に、でかくて真っ黒い、長剣二本を両手に携えた騎士が地響きと共に下りてきた

次にフィリス

「いきますよ、ワルキューレ」

純白の女神に次々と鎧が付けられていく

純白の長剣と盾を持ったその姿は、いくなれば戦女神といったところか

同時に、黒騎士はフィリスを、戦女神は黒マントめがけて剣を振り下ろす

黒騎士の長剣は盾に防がれ、純白の長剣は黒騎士の膝で止められる

そして、空いた黒騎士の左の長剣が戦女神を斬りつける

ただの一閃

だが、それだけで戦女神はほぼ戦闘不能になる

…ダメだ、割り込めるレベルじゃねえ

「くっ……やっぱり敵いませんか…」

戦女神      ワルキューレを消す

「おいフィリス！消していいのかよ！？」

「大丈夫ですよ、そろそろ来るでしょうし」

「え？来るって何が…」

コロシアムの入り口に人影

その金髪の間人は来る途中に始めた詠唱の最後を口にする

「《 天駆ける流星、その力、今ここに為さんとす。メテオ・ストーム！！！」

どこからともなく物凄い量、物凄いでかい火の球が黒騎士に降り注ぐ

黒騎士はそれを受けきれずに20発くらいを受けて霧散した

しかし、メテオ・ストームの量は20程度ではない  
次々に黒マントめがけて降り注ぐ

「《 》」

黒マントがいると思われる場所から、突如大きくて黒い腕が伸び、  
その手の平で全てを受け止めた

だが、金髪の間人は間髪入れずに

「《 ルナライト・ジャベリン》！！！」

光速の一閃が黒い腕をいとも容易に貫通する

「チッ……」

黒マントは舌打ちしたあと、一瞬にして姿を消した

助けにくれた人を見る

肌は白く、金髪にウェーブがかかっているその人はこちらに向かって来ていた

そして目の前で一言

「大丈夫？」

「あ、大丈夫です。助けってくれて、ありがとうございます」

「いいわよそんなこと、ああそうだ。私はサニル・ヴェルスターク、あなたの名前は？この世界の勇者さん？」

…なんですか？

第15話 助け（後書き）

くともる日記

「気がつくと、私の部屋に一冊の魔法書らしきものがあった。明日にでも読もうかな」

第16話 お告げとか図書館とか（前書き）

やっと…余裕が…！

それと、もう少し長くしたいと思い始めた今日この頃です

## 第16話 お告げとか図書館とか

…今、なんと？

「…えと、勇者？ですか？」

サニルはちよつとだけ驚いたような顔をして

「自覚ないのね……そう、あなたが勇者。この世界を光へと導く、勇者。…それより、名前は？」

「ああ、坂神裕也。…サニルさん、あなたは一体…？それとさっきの黒マントは？」

さっきの魔法、あれは色々理解を超える強さだった  
あんなものを使うサニルさんって一体何者？

それとあの黒マント

なんかオレを狙っていたようだが…



「私は第一部隊所属のしがたない兵士よ。ちなみにさっきのヤツの正体は全く不明。でもあなたが勇者である証拠ではある」

第一部隊！！

この国ではば最強の人間じゃないか！

そんな人物も黒マントについては知らないのか  
でも、オレが勇者である証拠とは…？

「ここからはフィリスの方が詳しいわね。いいかしら？」

「はい、かまいません」

フィリス　コイツもなんか凄いの出してたな…

「ええと、私が教会の関係者ってことは話しましたね？その教会で、神父がお告げを聞いたんです」

「お告げ？どんな？」

「ええと……」これからこの世界を救う勇者が現れるから、よろしくね。』

『その勇者を絶対に死なしてはならん、命を賭してでもな』

『あ！！あなたの出番はまだあとだから！』

『それと、すぐにその勇者を狙う者が現れるやもしれん。必ず追い

返せ』

『あゝも〜無視するな!!!あんたが出てきたら私の影が薄くなるから!まだ出てくるな〜!!!』

……でした」

それを聞いたオレとサニルは完全に予想の斜め上をつかれ、どう反応していいかわからない

そうか、サニルもこれは聞いてなかったんだな

てかこの神、片方は絶対あの『自称神様』だよな  
いや、ここまでしてるんだ。もう『自称』とは言えないかもな

153

「まあ、そう硬直するのも分かるんですが………それでも、大事なことは含まれているんですよ?」

そうだ

『これから勇者が現れる』

『勇者が何者かに狙われる』

これはつまり、正体が分からない『何者か』に狙われたのなら、狙われたほうは高確率で『勇者』なわけで

「勇者が誰か分からない上に、あのお告げもあんな調子でしたし…  
…正直、裕也さんが襲われたときはビックリしました」

「それで、話を聞いていた私が異変を察して、助けに来たってわけ」

そうだったのか  
しかし、このオレがこの世界を救うってのはどうやら、真面目な  
ことらしいな

……実感？  
無理、できねーよ

「で？これからオレはどうすればいいんだ？」

結局、何をどうすればいいのか分からない  
途方に暮れると？

それにはまずサニルが答えた

「ん〜、とりあえず王様に会って話をしてみたらどうかしら?」

「そうですね、そのうちまたお告げを頂けるでしょうし」

「王様…か。礼儀とか知らないぞ?オレ」

「それは大丈夫でしょう、礼すればいいだけですし」

「そうね、王様って結構寛大だから」

うーん…まあなるようになるか?

ということ、今から王様に面会か?  
面倒だ…

「あ、でも今日は無理ですね」

「ああ、そういえばそうだったわね。じゃあ明日に行くってことで」

「そうですね」

「あ、ああ…分かった。じゃあ明日、城の入り口前でいいか？そこ以外知らん」

「はい」

「分かりましたわ」

「じゃあ今日はこれからどうするかな」

「話に……ついていけない…」

「あ、フレイ？なんか久しぶり」

「とりあえず、図書館とやらに来てみた」

「なんか棚が馬鹿みたいにでかくてどうやって本をとればいいのか分からない、みたいなのを想像してたが、意外とまともだった」

ただ単にだだっ広いだけで

「そりゃあ、手が届かないところに置くわけないわな」

そついやちゃんと文字は読める

平仮名、片仮名、漢字、英語

全てあることは確認済みだ

もちろん、意味不明の読めないものもあるのだが

「うーん…オレ魔力あるのか無いのか分からないんだけど……方法  
を知ればオレでも魔法を使えるんかな？」

なんかやってみようと思いつながら色々な本を手にとる

というか、どこにどんな本があるのか分からないんだよなあ…

「…なんだ、これは歴史かよ」

棚に戻してまた日本語のを探す

ちよつと奥まで行ってみるか

奥へ奥へと進んでみる

奥へ奥へ

奥へ奥へ

「…広っ！！」

やべ、迷って帰れないとかいやだよ

まあ迷ったらそのときはそのときだ、と考え直してまた日本語の本を探す

「お、あったあった。『空を飛び続けてしまう魔術』…？なんか、後には退けなさそうな代物だな……………」

『空を跳ぶ魔術』…？跳ぶくらいならオレでもできる」

「プフッ…あっ」

…？  
笑われた…？

誰でもいいけど姿を見ようと音がしたほうを確認する

「あれ…？」

けど、そこには誰も居なかった

「聞き違いか？」



第16話 お告げとか図書館とか（後書き）

サニル…強っ

なお、フレイの最高の魔法はフレイムボールです  
よく使いますが（汗

くとある日記

「昨日の本を読もうとしたらなんか出てきそうになった。  
ビックリして閉じたら出てくるのをやめたみたい。  
今度ユウヤが来たらこれで驚かそうかなあ…フフッ

でもこの本って、もしかして魔本？だったらどうしよう。  
開かなかつたら大丈夫…？」

第17話 玉座（前書き）

なんか…薄い気がします…

## 第17話 玉座

次の日、早朝、

「し、失礼します！」

「失礼しまーす」

そう言つてガチガチの状態で扉をくぐる  
というかまたなんで早朝？  
みんな朝強いのね。羨ましいよ

ここは城の最上部、玉座だ

周りには護衛の兵士が六人くらい  
床には赤い絨毯がひいてあり、壁にはお偉方と思われる肖像画が沢  
山ある

そして、オレに少しの階段を挟んだ先に王様と王女様が座っている

オレとフィリスは礼をして片膝をつく

「おおフィリス。そちらの方が勇者なのか？」

「はい、王様。名前は坂神裕也、件のお告げにあった勇者と思われる者です」

勇者勇者ってなんか：言つてて恥ずかしくないか？  
言われる方も恥ずかしいんだが

「そうか、では坂神裕也殿」

「は、はいっ！」

「単刀直入に聞こう。おぬしは勇者か？」

「いえ、勇者：とかだとは思っていません。ですが、ちょっと普通とは違うとは思っています」

異界から来たことは話すべきなんだろうか？  
いやそれはあとからでも話せるし、あの自称神にでも聞いてからにしよう

：黒髪もバラさなくていいか  
説明が面倒だ

「普通でない、とな？それは例えば？」

「はい、自称：おっと失礼。神様を実際に乗られ、会話したことがあつたりします」

「乗られたとな！いや確かに普通ではないな！！ハハハハハ！！」

「王様：少し“地”が…」

フィリスがフォローに入る

…“地”とな？

まさか…面白い人だったり？

「おっと…スマンスマン。コホンッ、しておぬしに聞きたいことがある」

「あ…はい、なんででしょうか？」

「おぬしはどのようにするつもりかね？」

…はい？

「どのよう…とは？」

「いや、おぬしが神と会話したり、正体不明の者に襲われたということ、やはり何かあるのだろう。」

まあそうだよな

てかありまくりだけどな

あの黒マントは知らねーけど

「その上で、だ。これからどう行動するのか、聞かせてくれ」

王様の目は真剣そのものだった

この世界のために、返答次第でどう行動するか。決心しているような

これには、真剣に答えないと

「神様に聞いたように、この世界の異変を正し、元凶を断つつもりです。まだ色々と実感が湧いてないし、決意もしきれてないと思いますが、今はこれ以外に道はありませんので。」

王様は少し思案したあと、急に口調が優しくなった…ような気がする

「まあ…今はそう思うのが普通よな。いきなり勇者と呼ばれたようだし、気持ちの整理もついておらんのだろう。これからのことは少しずつ見えてくればよい」

「…はあ。分かりました」

「うむ、よろしい。ではもう帰っていいぞ」

「「はい」」

「失礼しました！」

「失礼しました」

玉座を後にして城から出てくる

「…なあ、フィリス」

「なんですか？」

「王様との話も終わってしまったんだが、これからどうすればいいんだろうか？」

「それは…お告げを頂くまで待っているしか…」

やっぱりそうだよな  
でもさ、何もしないってのはなんか、あんまし好きじゃないんだけ  
ど…

「そうだよな〜じゃあ本でも読みながら気長に待……………」

「?…どうしたんですか?」

ふと、ホントに偶然、城壁を越えて、城外にあるそれを視界に捉えた

体操座りの状態で、激しく前回りをしながら飛んでくる凄くでかい  
ゴーレムっばい何かを

「変態だ…」

「え?」

「変態!変態だ!変態が空を飛んでこっちに来る!!ギャハハハハ  
ハハハ!!」

「え?え?」

腹が痛い

そりゃね、あまりに変態すぎるもん



前回りだよ？前回り！

飛んで来るんだよ？でかいのが！

非現実的過ぎるぞギャハハハ！

…ん？

あれ、思ったよりでかい？

…ん？

あれ、ここに着地するんじゃない？

…ん？

あんなバカでかいのがあんな速度で落ちてきたら、被害甚大じゃねえか？

「ちょ！フィリス！あれ！あの変態どうにかしないと…！」

「え？変態って…！！」

フィリスもようやく気付いたようだ

「え！？何あれ！？何か飛んできてます！？」

「なんとかしないと！」

「待って下さい！そんな急には……」

チュドーーーーー

ズシューーーーー

説明しよう

なんか物凄くでかい火球（おそらくサニルの魔法と思われる）が変態に当たって、そのまま落下  
その衝撃で軽く地震

「お、落ちた！撃ち落とされた！あの飛んできてた変態が！プハハハハハハハ！」

や、やべ…ツボに入った…

腹が痛い、腹が痛えよう…

「と…とにかく、私達も加勢しに行きましょう！多分杞憂に終わる  
と思います…」

「わ、分かった。行こう…プクク…」

第17話 玉座（後書き）

もっと時間が欲しかったりしますねえ…

～とある日記～

「今日はおじいちゃんの畑仕事を手伝ってみた。  
とても重労働でビックリしちゃった。

でも、おじいちゃんは全く疲れた様子を見せなかった。  
汗もかかず、息も切らさずに。

…凄い、というよりちょっと怖かった」

第18話 ポケジジー（前書き）

…もっと…!  
もっと長く!

## 第18話 ポケじじー

「ちょ…っわ、でかつ」

目の前のゴーレムを見て無意識に呟く。

でかすぎてよく分からないが、全長10メートルくらいだろうか。いや、多分もつとあるだろう。

とりあえずまともに殴られたら致命傷になるな。

運が悪けりや即死？

それだけは言える

ちなみに、そのゴーレムはただ今サニルと戦闘中

サニルの戦法は、大技を撃ち込み、その隙に間合いをとって詠唱。そしてまた大技を撃ち込むというパターン戦法。

対するゴーレムは、近づこうとする度に大技を受けてのけ反る。といったことを繰り返している。

結論から言おう。

ゴーレムが有利だ。

だってなんかダメージほとんどないみたいなんだもん。

逆にサニルは

「フウ……フウ……《煌めく夜空、その深遠なる位置。我は  
》」

どんどん疲労が溜まっていく。

おそらく魔力も際限が無いわけじゃないだろうし、いつか打ち止めが来るだろう。

え？オレとフィリス？

何もしてないよ？

いや、何もしてないわけじゃないんだけど。

「なあフィリス」

「はい」

「オレ達にできることは何だろうな」

「とりあえず…打開策を考えて下さい」

「了解」

だってさ、でかいんだもん。

フィリスの“ワルキューレ”もあいつの鉄拳にかかれば一撃で消し飛ぶだろうし。

大蛇のときのダイヤモンドって策もあるが、それは無理。

あれは多分一回が限界だし、基本的に遠くに物を『創造』するのは無謀だ。

んで、あいつは多分かなり硬いだろうし。  
てことは上空からスピードを付けての落下を当てなきゃいけないし。

うーん…どうしたものか。

「《 汝に捧ぐ冥の理、ハデス・ブレイク冥王破砕》！！！」

サニルの目の前に直径10メートルくらいの一つの魔法陣が現れ、  
それぞれが光りだす

次の瞬間、真っ黒な極太ビームが放たれる

それをゴーレムは全身で受けて吹っ飛び、また小さな地響きを起こす



しかしすぐに右手で草の大地を掴み、起き上がるうとする

「全く！キリがないですわね！それよりもあいつは！？アレックスはまだですの！？」

随分とお怒りの様子みたいだ

でも、アレックスって誰なんだ？

そのとき、いやにはつきりとした声が響く

「アレックスじゃない！アレキサンダーだ！！」

「これ、耳元で騒ぐでない。遠い耳が近くなるではないか」

颯爽と現れたのは、黄色い髪に青銅の鎧、長剣と盾を携えたおそろくアレックス（？）であろう青年

と、意味不明なことを呟くローブに片手に支え棒のじいさん

「やっと来たわね、アレックス！コイツをどうにかして頂戴！」

「いやだからアレキサンダーだよ！それと、コイツは全くの専門外

だ！！お前も知ってるだろう！？」

「そんなことはどうでもいいから！何か無いの！？仮にも第一部隊でしょ！？」

「無駄口叩いてるヒマがあったら詠唱しろよ！……っちにくるぞ！ホラ！」

…仕方ない

左手を地面につけて右手をゴーレムの右足に向ける

地面と全く同じ質の塊を、今まさに右足を出そうとした瞬間に『創造』する

ガッ

ピタン！

ゴーレムが俯せに転倒する

「なんかこけたぞ！早く！」

「指図するんじゃないわ！《ニニ》に極めし」《



「ほっほ。誰じゃろうかのう」

思い付いたようにフィリスが問う

「もしかして……………大魔導士セルヴァン様ですか？」

「誰じゃそれは？」

違うのかよ！

そついう流れじゃないのかここは！？

「ワシの名は……………はて？」

「「「「え！？」」「」「」

「……………まあそんなことより、早く帰るわい」

そんなこともクソもあるかと小一時間問い詰めた

「のじいさん…ポケてるな」

第18話 ポケじじー（後書き）

じじいスゲー

〜とある日記〜

「久しぶりに友達と遊んだ。  
ホントに楽しかった、やっぱり生きて良かったと思う。」

ただ、隠れてこっちを見続けていたおじいちゃんはどうしてようっ…と  
いつか、畑はいいの？」

第19話 独白(前書き)

すみません！

急性スランプでした( ; )

久々に時間がかかりあったのに、全く、全く何も浮かばないので  
orz

これからも二日に一回とかになるかもしれない  
(いや、できるだけ一日一回更新しますが)

ですので、長い目でお願いしたいです

m ( ; ) m

## 第19話 独白

（自室）  
（夕方）

色々ありすぎてなんだかなあ…

と、ひとりごちながらベッドにダイブ

「…なんだかなあ…」

あのあと、じいさんはボケちゃってて素性が分からないままどっか  
行っちゃまったし

フィリスはお告げを待つために教会に戻ったし

サニルさんは普通に帰ったし

アレックス（定着）さんはじいさんについて行ったし…



「結局、じいさん何者だったんだよって感じだよなあ……」

ああ、なんもしてないけど疲れたなあ

ん？王様に会ったりゴーレムとの戦闘を見たり謎の激強じいさんが  
でてきたり…

なんもしてないけど…

色々ありすぎなんだよ

「それにしても、オレの家族とかってどうしてんだろっな？」

これまで元の世界のことなんて考えてなかった

もちろん家族が嫌いだとか、不登校だったとか、複雑な事情があっ  
てあの世界が嫌いだったわけではない。

成績だつて中の上くらいには入つてたと自負している。

ただ、与えられた選択肢の中でこれといったことが見つけれずに、  
漠然に生きてた。

未来だつて、簡単に想像できる。

仕事して、何か趣味みたいなものを楽しんで、もしかしたら好きな  
人ができて一緒に暮らすのかも知れない

「まあ…多分オレが面倒臭がりだからだろうけどな…」

この時期は進路を決める大事な時期だ

だが、仕事だつてやり甲斐を感じてその仕事そのものを楽しめる人なんてごくごく小数だろう。

そして、『やりたいこと無いし、とりあえず親父と同じ方向にでも行くか』つて考えのオレはその小数にはなれない。きっと。

こんな風に考えれるオレはきっと恵まれてる。選択肢が沢山あるんだから。

それは分かる、分かっているつもりだ。

だけど

「先に見える今なんて、つて考えちまうんだよなあ…どうしても」

それはもう、いつ死んでも未練は無いつて、本気で思ってしまう。

何度こんな性格を呪ったことか。

でも、ホントに、死ぬときをイメージしてもそのときオレは、『まあいいや』って、このまま生きていても っと思っっている自分が簡単に想像できる。

まあ、そんな考えは命に対してかなり失礼な態度だし

実際に死にそうになったらどう思うかなんて知る由も無いけれど。

そんなんだから、この世界に連れて来させられたときも『死んだと同じ』だと、それはもう『簡単に』割り切れた。

ちなみにとりあえず言っておくと、死ぬか生きるかと問われたらオレは『とりあえず』生きる と答えるだろう。

死ぬことは後でもできるし、死んだあとに生き返ることなんて絶対できないから。

後悔はしないだろう方向に。

「つくづく…嫌になるよ。やりたいことがハッキリしてりやなあ…  
もしくはこの性格をどうにかしてくれと」

だからこの人生、音楽とゲーム以外を楽しめないんだろう。

勉強なんて、高得点を取ったときの嬉しさ以外にやり甲斐なんて感じない。

最近はそれも飽きてきて、試験前でさえ勉強しなくなってきたしなあ……………

「でも、まあ第二の人生？が与えられたんだ。楽しめるといいなあ」

この世界でのオレの未来は、全く分からない。

そんな世界の中でなら…………と、どうしても考えてしまう。

というか、何回も死にそうになって、これからも死にそうになるんだろっから未来があるのか無いのかも分からない

さらに、元の世界でなかった『生きる目的』だってこの世界にはある。

『この世界を救う』という目的。

当然ヒマせずに生きて行けるだろう。

「ワクワクが止まらねえぜっ」

.....

「オラア、ワクワクしてきたぞ！」

スマン、なんか言いたくなつた。

と、誰に向かってでもなく謝ってみる。

窓を見るともう暗い。

秋だなあ、早いよ。

そつえば、晩飯も風呂もまだだ。

「面倒だし、いつか。一日くらい。」

飯は食いたくなったら食べばいいし  
風呂も気が向いたら入ればいい。

「……………ん？」

と、一人暮らしするとヤバい性格を出していると不意に声がした

「ちよっ！本気？ガチ？マジなの！？やめてっ！」

「そう嫌がんなよー。お嬢ちゃんがこんな時間にこんなところにいるのが悪いんだぜえ？」

「え？そうなの？」

……………そうじゃないと思う

「うん？…ああ、そうだよ。お嬢ちゃんが悪いんだよ」

「やめてよして触らないで肌が汚れるー」

……………この子はバカなのか、はたまた余裕なのか判断に困る。

「てめえ！誰に言って」

「知らないよ。でも汚いのは分かる。本能？いや、女の勘？いいや！乙女の勘で！！」

「てめえっ！ていうかお前は追い詰められてんだぞ！？逃げ場はない！ピンチなんだ！分かってんのか！？」

コイツ、隣の家のリビングの電気が点いているのは分かってないようだ。

……………結論。どっちもバカ。

バカの性質は違うけども。

……………「こついうのを助けるのって、密かな憧れだったんだよなあ

「はいはい、ピンチは見方を変えるとチャンスで、チャンスはピンチに変わりやすいんだよ」

男の背後で言う

我ながら、カツコイイ

「だ、誰だお前はっ！？」

「名乗るか馬鹿野郎め」

ちなみにただ今コイツがピンチ。  
だって逃げ場無いんだもん。

「フ、フンツ！だが、丸腰とは！馬鹿はお前だっ！」

コイツはこっちを向いて、完全に女の子に背を向けている。  
声を張り上げる

「そこの子っ！今だっ！」

「な、何っ！？しまっ」

咄嗟に振り向く男。

そこには、ぼけっとした女の子が

「へ？あたし？」



ゴスツ（後ろからバットで強襲）  
バタツ（擬音どおり）

「……………」

ああ、なんでだろう。  
なぜかオレ、ダメな気がする。

「……………うん、何も言わずに、帰りなさい」

この手に残る感触、すなわち爽快感、そしてそれに伴う『何やってんだオレ』感を感じながら静かに言う

「うん、分かった。ありがとね……………」

駆けて行く女の子を見送る

うう…何か、間違った気がする

く自室く  
く夜く

…とりあえず寝よう。  
一つ、夢を叶えたんだ。

そう思いながら寝室に向かう

ガチャリ

扉が、開ける前に開いた。  
ガチャリ、と。

目の前にはついさっき助けた女の子



またオレはソファアか。  
まあいいけど。

「ベッドで寝ているあたしに何をしよう……！……！」

「何もしねーよ！……てかお前が泊めろって言ったんだろー！？」

## 第19話 独白（後書き）

今までで一番長い！  
長い方が楽しいです！

時間はかかりますが…（汗）

（とある日記）

「今日はミラゴールさんが私の家にやって来て、うっかり魔本を開けちゃった。

そして本から出てきたのは可愛い女の子だった。

そういえば前に無理矢理閉じたとき、やけに可愛い声を上げていたような気がする。

そしたらその女の子は『願いを、我が主』なんて言ってきた。

開いたのはミラゴールさんなのになぜか私に。

願いなんて、そう簡単に決めれなかったから、とりあえず保留にしておいた。

女の子はすごく迷惑そうにしてたけど、いいよね？」

第20話 旅立ち（理由不明）（前書き）

なんかもう………すいません（^-^-）

第20話 旅立ち（理由不明）

（自室）

（朝）

目を覚ました。

「……眠」

嗚呼、毎度のことながら朝弱いのは辛い。

朝弱いのは低血圧だからだと聞いたことがあるが、それはどうすりや直せるんだろうか？

レバーでも食って血を増やせばいいんだろうか？

というか知り合いに低血圧で朝強いヤツがいたんだが、それは何故？

「……ああ、そっか。今日は起きる必要なんてないし、二度寝してもOKなのか」

「えと、とりあえず連絡の有無は確かめたほうがいいと思うよ?」

「！！！？？」

「……そんな驚かれても……」

そうだった

コイツがいたんだっけ。

てか昨日はフィリスだったような……  
トラブルメーカーだったのか？オレ

ついでに頭も覚醒した

「あゝスマン、忘れてた。…連絡って何？」

「え。知らないの？ホラ、家を出てすぐの」

OK把握

「ああ、それか。確かになんかあってたら大変だしな」

外に出てポスト(?)を確認



「あ、来てら

読み上げる。

いや、そんなことはしない  
黙読だ黙読。

『差出人 第3部隊』

…げっ

訓練…か？

『模擬戦をする。気が向いたら来い。』

無視決定。

家内に戻る

「どうだった？」

「あつたよ、模擬戦。まあ行かなくていいみたいだから行かないけど」

「え？てことはあんたって第3以上の兵士？」

「ん？うん、第3部隊。でもなんで？」

「いや、模擬戦が自由参加の部隊って第3以上でしょ？」

「あれ、そうなの？第3部隊で良かった〜」

「これは一般常識……。あたしより無知な人ってそういないよ？」

自分で言っけて悲しくならぬのだろうか？

「いや、ちよつと最近この国に来たばかりだね。勝手を知らないんだ」

「ああ成る程ね。ってことは旅人？…あれ？じゃあなんで家なんて持つてるの？」

「ちよいとここらで腰を落ち着けようかな、とね。…ところで、一つ聞いていいか？」

話し始めから感じてて、今現在も膨れつつある疑問が一つ

「え？いいよ？」

「昨日の君、もっと馬鹿っぽくなかったか？」

「うわっ！ちよ、酷い！確かによく馬鹿だっって言われるけどー！というかそこはまず名前とか聞くもんじゃないの？」

確かに、それもそうだ

「じゃあ…オレの名前は坂神裕也。君は？」

「人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るもんだよっ！」

「……………」

「……………？」

成る程。



コイツは本当にお姫様なんだろうか？  
仮にお姫様だとして、コイツでいいのだろうか？

「ほえ？ビックリすることって何？」

「勇者になりそうだ」

いかん即答してしまった。  
これじゃイタい発言じゃないか。

「……………え？何言ってるの？」

「ゴメン、真顔で聞かないでくれ。なんか心に突き刺さるから」

「あ、ゴメン。……………なんであたしが謝ってるんだろっ？」

知らんがな

「それはいいとして……………勇者ってあの、お告げの？」

「ああ、それぞれ。やっぱりアリスも知ってたん」

ガチャツ（扉が開く音）

「裕也さん！次のお告げがありました！……っであれ？アリスじゃないですか」

「あ、久しぶりフィリス」

突飛だなあ。

「ようフィリス、なんでそんな慌ててるんだよ？」

「あ、そうでした！裕也さん！すぐにここを発ちますよ！」

「……………は？」

（城門）

「ん？サニルさんにアレックス！見送りですかいな？」

「そうね、一緒に行ったほうがいいと思ったけどまたあんな化け物に襲われたら国がね」

「アレックスじゃないというに……オレもな、同じ理由だ」

ん？

アレックスってゴーレム戦、何もしてなかったよな？

「アレックスって……強いのか？」

「アハハハハ！だってよアレックス！何もしてなかったもんねー！」

「うっさい！あんな硬いヤツじゃなかったら楽勝だったんだよ！これでも一応第一に所属してんだぞ！？」

マジ？

サニルさんと同じ強さですか？

「とりあえず、第一部隊にはサニルさんとアレックスさんの二人し

「かないんですよ」

フィリスが補足する

「マジですか」

「そういえばアレックスさん、あのおじいさんは誰だったんですか？」

「ああ、あのおじいさんか。さっぱり分からん」

「へ？」

「あのおじいさん、いつの間にか消えてたんだよ。全く意味分かんねえ」

「………そうですか。一体何者なんでしょうか」

「あーはいはい、見送りに来て長話なんて聞いたことないわよ」

確かに、この調子じゃ長話になるかもな

そのとき、一人の少女が城門をくぐり、内部に入る



「……ん？」

「「「「今までどこに!？」」「」」」

「え？迷子」

……もう突っ込まないようにしよう。  
てか迷子で外にいたんかい。

「えーと……そろそろ行かないと時間ですので、これで」

「え、ええ……それじゃあ気をつけてね」

「死ぬなよー、と。そうだ、これを渡しとかないとな」

「これは？」

「じいさんからだ。お前達じゃ昨日の化け物みたいなやつには勝てないからな」

アレックスがくれたのは二枚のお札  
あんときじいさんが使ってたやつか？

「確かに……あの黒マントにも勝てないですし、ありがたく頂戴し

ますね

「おつ

札をしまつ。

……どこにしまったのかは分からなかった。何故？

「それじゃあ、行きましょつ」

「分かった。じゃ、サニルさん、アレックスさん、ありがとうつ」  
「いました」

「どういたまして

「おつ

「え？これなに？」

アリスの疑問

第20話 旅立ち（理由不明）（後書き）

無理矢理終わらせた感が…（汗

文才が…文才が欲しいのですよ

## 第21話 道中

〈道中〉

何の変哲もない草原を歩きながら、かれこれ数時間。  
まだ日も傾いていない時間。

さすがにもう歩けない、とかはないけれど。

「なあフィリス」

「はい？」

「そっぴゃ今どこに向かっているんだ？場所の名前と方角を頼む」

てか傾いてたら困る。

出発したのは昼前、いや多分朝だし。

そんなに歩いたら足が棒になっちまう。

それでも多分何時間かは経ってるだろう。

日は真上を越えている。

「ああ、セラフス国ですよ。方角は南ですね」

「ふーん。あ、それとお告げってなんなんだ？あんなにいきなり」

ホント、物凄く間が悪い気がするんだよ。

「それが……なんでも既にこの世界が危ないらしく、早くある塔を守りに行けと」

「塔？」

「はい。えーっと……名前は付けられてないんです。でも、よく呼ばれているのは『闇の塔』や『奈落の塔』、ですかね」

うわぁ、随分と物騒な名前だなぁ。

「『闇の塔』って言うのは見た目からですけど、『奈落の塔』っていうのには理由があって……」

「？」

「上がると二度と戻れないんです」

なに？二度と戻れない？

…怖っ

「上がるとどうも下りれないようで……調査団が向かったんですけど、誰一人帰ってこれなかったんです」

とんでもない化け物でもいんのか？

いや、それでも一人も帰って来れないっていうのは……。

「なんかいるのか？」

「多分いません。ただ、『ここから出してくれ』って悲鳴が上がったんです。それに断末魔は聞こえませんでした」

「ん？それってつまり……」

「はい、文字通り『戻ってこれない』んです」

うわぁ

「それ以外は何も分かってませんね……」

……ん？

ちよつと待て。あれ？

「もしかして、それ、オレ達、上る？」

「……………はい」

……………ええ〜。

「お告げでは、大丈夫らしいですよ」

「……………信用できる？」

「口調は…あんまり…」

「……………」

泣いても、いいですか？

…とかそんな冗談はいいとしてですね。

「そっぴや、フィリスって体力スゲーよな。もう何時間も歩いてるのに全く疲れる気配が見えん」

「んー……………日々の特訓の成果ですかね？」

「特訓とかしてるのか？やっぱ凄いな」

「逃げ切れないときは」

「逃げてんのかっ!?!」

そうだった。

コイツは毎日それで走っ(逃げ)てるんだった。

訓練された兵士もビックリの速度で、しかもこの修道服で。

そりゃ鍛えられるわ。

「ちなみにこの旅も逃げの一貫だったりします」

「うそ!?!」

フィリス、一々意味が分からん

「それより、もうすぐ着きますよ」

「お、そうなのか」



第21話 道中（後書き）

短い……

いや、久々で、道中だから、ということ（汗

）なんかもう日記

「昨日おじいちゃんのお父さんがいなくなってたらしい。今日帰ってきたけど、なんだったのかな？」

第22話 占いましょう(前書き)

更新遅いなあ…

また一日更新したいなあ…

## 第22話 占いましょう

くセラフス国く

「やっと着いたか」

「そうですね」

フィリスの聞くところによると、この国は割と自由な国らしい。商売やら政治やら、悪い言い方だと『いい加減』とか『テキトー』みたいだけど。

ただ一目見た感じだと、かなり活気に溢れてるな

てか、何時間歩いたんだろうね  
もう日が傾いたよ。  
しかもノンストップ。

「それじゃあ私は許可をとってきますので、商店街辺りで適当にぶらぶらしてて下さい」

許可っていうのはおそらく塔に入る許可だろう。  
こつこつ制限はこの国では珍しいらしいけど、つまりそれだけ怖れ  
られてるってことなのか？

「商店街ってどこだ？」

「南ですよ」

「……………南ってどっちだ？」

「……………あっちです」

うわぁ恥ずかしい

「んじゃまた」

「はい」

〈商店街〉

「うおっ、スゲー」

武器屋とか防具屋とかありきたりな店がいくつもある。

というか値札がある店と無い店があるみたいだけど、無い店は値下げOKって意味か？

てかオレ今無一文なんだけど

「……………ん？なんだあれ？」

あれは……………占いか？

というかその占い師の服が、フィリスと似た修道服なとこにちょっとビックリ。

そして『料金＝気分』の札に二重のビックリ。

ちよいと見てみる

~~~~~

「あ、ただいまの気分は150Gですね。あなた、運が悪いですね」

「あ、ちくしょー！今日はくじやめとくかなー。あ、はい150G」

「……………ではいきます」

手元の水晶玉を見つめる。

じいーっと、何もせずにじいーっと見つめるだけ。

しばらくして

「今日あの宿で泊まるのはやめたほうがいいです。不吉です」

「まじでか！？今日そこで予約してんだが……くうっ、何も無いことを願うか……」

くくく

…何あれ、テキトーにも程があるだろうが。

てかバリバリ営業妨害じゃね？

客も客だけど…

というか、通貨ってGコインだったのね。

「まあ金持っていないし、試してみたいっちゃんみたいんだけどなあ」

タダを期待してあれに行く度胸はオレにはない。

と、残念に思いながらその占い師の前を通っていくと。

チャリーン

「……………（汗）」

その占い師がオレの足元に50Gを投げた。

……………え、何？

これって『この金で占え』って意味で捉えるべきですか？そうですか。

「あ、あの、これは…」

「ただいまの気分は70Gですね」

…足りねーよ

「……………すみません足りません」

「何を言ってるんですか？20Gも持ってなかったんですか？アホ

ですか？そうですね」

「そこまで言いますか！？」

そんでやっぱり50G投げたのは確信犯だったのね。  
いや分かってたけどね。

「じゃあいいです、今の気分は20Gです」

なんだか、金額が低いと気分が悪いって言ってるように聞こえる不思議。

てか投げた50Gより安くたっていいんかい。

「…じゃあ50Gから」

「どうも」

んでしっかりお釣り30Gを受け取る。

……なんだろうこの人、オレを罪悪感とかでイジメてるのか？

「では、いきます」



そう言っつて水晶を手をかざす。

しっかし……

よく見るとこの人、めっちゃ綺麗だ。

色白で、銀髪で。

まあ不思議度が強すぎて、『美人』ではなく、『変人』って言ったほうが正しい気がするが。

とか思っていると、その占い師は突然金づちを取り出して

カツコオオーーーーン！

おお、いい音。

そして、金づちを水晶に振り下ろした状態で数秒。

オレが『何やってんのこの人？』とか思い始めたころ。

バキッバリバリッ！

グシャッ！

「……………」

沈黙。周りの人もみんな沈黙。

そんな中一番に口を開いたのはやはりその占い師で。

「割れちゃった!!」

「何驚愕してんですか!？あなたが割ったんでしょうが!？」

「とまあ茶番はここまでにしておいて」

「茶番なのか!？」

あんだその言葉テキストに使ってるだろ!？」

「占いの結果ですが……。困ったときは、がむしゃらではなくひらめきが重要になります。力に対しては、力以外の方法もありますから。特に、次の困難では」

……………おお?

今一瞬『すげえ、占いっばい』とか思ったけど、よく考えるとかな

り抽象的だな、おい。

「それと、魔力の補強剤を買っておいたほうがよろしいかと」

「あ、うん。…というか、この金…」

「それはいいです、それでアモー の水でも買ってください」

ドラクエがよ。

「ああそうだ、金と占い、ありがとう」

「礼には及びません、仕事ですから」

そう行って謎の占い師はスタスタ歩いていった。

そして不覚にも最後の台詞がカッコイイと思ってしまった。  
オレはアホだろうか、と思った。

「あ、その水晶はあげます」

スタスタスタスタ

「……要らねー」

つーか割れてるし

とか思いつつ四次元袋に入れた。  
オレはアホだろうか、と思った。

その後、道具屋で魔力剤らしい『マジックメディ』略して『マジメデ』を買って（アモーの水は無かった）しばらくぶらついてると、フィリスが来た。

「お待たせしました、やっと許可が下りましたよ」

「おう、ところで……今から行くのか？」

もう暗いです。

日は沈みました。

「はい。ここにいたら、もう太陽は拝められないらしいです」

「……そっか、じゃあ行くか」

第22話 占いましょう(後書き)

頭にあっても指が動かないのです。

こつこつこつって考えたらダメなんですかね？

第23話 普段の限界は本当の限界の10%くらいらしい。…もっと低いかな？

キャラ崩壊注意

え？これくらいじゃ崩壊とは言わない？むしろ自然です？

第23話 普段の限界は本当の限界の10%くらいらしい。…もっと低いかな

〈奈落の塔〉

「……これ？」

「はい、これです」

窓の無い円柱状の真っ黒な高層ビル、だろうか  
まさに『闇の塔』というのがピッタリな感じの塔が目の前にある。

「これを、上るのか」

「はい。これを、上るんです」

高いなあ………というか、足が棒なところにこれは酷いと思うんです  
よ。

「じゃあ行きましょうか」

「お、おし」



中に入ると右に上りの、左に下りの階段がある。

……下り？そんなのフィリスから聞いてないが。

そんなものお構いなしに左の階段に向かうフィリス。

え？下るの？

「え？いや、ちよつ、フィリスさん？」

「どうしたんです？裕也さん」

「下るの？」

すると物凄い『何言ってるの？』な表情になった。

そんな顔すると綺麗な顔が台なしですよ、とか言ってみたい。と思った。

「何言ってるの？」

「口調そのまま!？」

そう言っただけで堂々と左の階段を下りようとする。

この場合、『何言ってるの？』の意味は『当たり前だろ？下るに決まってるんだろ』と取るべきだろうか？

でもさっきの『何言ってるの?』の表情は『何寝ぼけてんの?』上るに決まってるんだろ』って表情だったんだが。

「お、おいフィリス!」

「なんですか?」

「オレたちは今どこに向かっているんだ?」

「頂上ですよ?決まってるじゃないですか」

おっと、やっぱり上なんだな。

「なんで下るんだ?」

「何言ってるの?」

「なんでその口調にこだわる!?!」

癖になった…のか?

…まあいいか。

…いいのか?

「と、とりあえずこっち来い」

「?どうしたんですか?」

「あれを見る」

そういつて上りの階段を指さす。

「?」

「何が見える?」

「……壁?」

「……ちょっと待ってる」

上りの階段の前へ行く。  
上る前に一言。

「見てるよ?」

階段を上る。

フィリスにはどう見えてるんだろうか。

「……!?」

「お、ビックリした？」

「……見えない階段…？」

おお、そう見えるのか。

「分かったら来いよ、そっちは下りだ」

手招きする。

フィリスはおずおずと見えない階段に足をのせようとす。

「んなびびんなくても……」

「びびってません！」

思い切り足を踏み出す。

「…あれ？」

踏み外したわけでもなく、つまずいたわけでもなく。

なのにこちらに倒れてきたフィリスを慌てて受け止める。

「うおっ?」

「あ、うあっ。すみません…」

「大丈夫か?もしかして……クールな顔して、実はここまで無理してた?」

「い、いや、そんなはずは……っど、ととと、あれ?あれねえ?」

よろけまくりだ。

全く立てないように見えるが…

「……よっ」

「っひゃっ」

とりあえず階段から下ろしてやった。

……軽くだっこして。

「ほら、どっだ?」

「あれ?楽になりました。ということは……」

「この階段のせいみたいだな」

「どございませうっ。」

「……この場合仕方くない？」

「……でしょうか」

「いや、了承してくれないと……どうにも……」

「……仕方ないですもんね。うん、仕方ない」

「そんなじゃ、ほら」

背中を向けてしゃがむ  
要するに、おんぶだ。

え？お姫様抱っこ？  
無理無理、んなことしたらどんな関節技かけられるかわからんから  
な。

「行きますよ、……重いつて言ったら」

「いいから乗れよと」

「は、はい。それじゃあ……せーのっ！」

「っおっ。……？」

「重いつて言ったら」

「いや違う、違うから。そんな服着てるのに異常なくらい軽いなと思っただけだから」

「……まあいいです」

どうして女性ってそんなに体重を気にするのか？  
そりゃオレも少しは気にするけど、そこまで反応しないよ。

「んじゃ、行くぞ」

「はい」

既に足は棒のようで、フィリスは軽いとはいえ一人の人間。

これは……気力にまかせて爆走しかないだろう!!

「うおおおおおおおおおお!!」

「ちよっ!?!?そんなにとばしたら!!」

~~~~~

「ぜい……ぜい……」

「……………大丈夫ですか？」

結果、三階。

分かっていたけど、よく考えよう。

よたよた歩いてたら二階くらいで潰れていたさ、もっと時間かけて  
そう考えるとこれは失敗じゃないぞ、うん。

それに…

「気力がある限り！乳酸が引く限り！体力が戻る限り！オレは走れ  
るうううううううう！！」

「ちよっ！キ、キヤーー！！！」

今オレは、間違いなくトランス状態だった。

…トランス状態って何？

~~~~~







第23話 普段の限界は本当の限界の10%くらいらしい。…もっと低いかな？

「その限界ってむしろ余裕だらけですか？」

## 第24話 グダグダ感Ⅰ

く頂上く

「コ、コビュー…コビュー…」

上りきった…というか、走りきった、といったほうが正しいだろうか。

ちなみに、実際に入った階数はそんなに多くない気がする。

いやホントに百階とかだったら絶対挫折してたと思うんだ、うん。

「す、すいませんでし つ…！」

急に禍々しい気配を感じて、フィリスが臨戦体制を取る。

なんなんだいきなり。また何かいるんだろうか。

だとしたらオレはもうダメだな、足が震えてる。

それでも首は動くので、その気配の主を見ようと視界を動かす。

視界に入ったのは三つ。

一つは景色。高台からの眺めは素晴らしかった。  
なんてどうでもいいことを始めに持ってきた。

二つ目、少女っぽい石像。

……以上。

三つ目、石像の前で仁王立ちしてる黒髪の綺麗な女性。  
どうやら禍々しい気配ってのはこいつみたいだ。  
微動だにしないその姿は見る者に畏怖の念を抱かせる、とか言っ  
てみる。

「「……………」」

黒髪の女とフィリスは全く動かない。

まるで先に動いたほうが負け、みたいな感じ。

だけど、フィリスは戦闘意欲バリバリなんだけど、黒髪の女のほう  
はなんだか……気配は凄いんだけど、殺気とか、もっと言えば意識  
を感じない。

気のせいだろうか。

「あゝ、フィリスさん？」

「なんですか」

うわぁ緊張感。ぴりぴり。

こんな状況でこんなこと言うのもなんだか気乗りしないんだけど、やはり言わなければなるまい。とか無駄に軽く決意してみた。

「その人……寝てるんじゃない？」

「……………」

嗚呼、一気にいろんなことがバカバカしく思えてきた。そんな空気になってしまった。

でもしょうがないんだ。

言わずにはおれなかった。

だって人間だもの。

フィリスは警戒しながらその女に近づいて行く。

そして目の前に立ち、未だ仁王立ちのまま禍々しい気配とバカっぽさを放つその人を指で軽く押そうと手を伸ばした。

「っ　　っ！！」

いきなり開眼っ。カカツ。

二人とも即座にバックステップ。  
だが、その行動は間違っていた。片方だけ。

いや別に足場が無くて落下、とかそんな真面目なミスじゃなくてです  
すね。

ただ後ろの障害物に当たって頭を抱えることになっただけです。

「~~~~っ!」

「「……………」」

なんだろうこのグダグダ感。

なにか話そうと思ったが、横になったまま話すのもなんだよなあ、  
と思いついてみるとフィリスが口を開いた。

「あ、あのー…?」

「……………なんだ?」

目が潤んだ状態でナチュラルに上目使い!  
しかし、オレは今それを正面で見ることができない!惜しい!  
とか言ってみる。

「あなたは誰なんでしょう?」

「こっちが聞きたい。いきなり目の前にいて。あれか？人の寝込みを」

「違います。違いますから落ち着いて下さい」

「私は落ち着いてる」

「真つ赤な顔してよく言えません」

「……？といつかなんでお前はそんなに半分死んでるんだ？この塔に魔物はいないはずだが」

「いや普通に上っただけだけど」

「軟弱者め」

「返す言葉もございません、はい」

てか話の流れを修正しないと。  
このままじゃ脱線し続けるぞ。

「で、お前達は誰だ？」

お前が修正すんのかよ



「えっと、私はグランス国の」

「あー、肩書きはいい。名前を教える」

「あ、はい。私はフィリス・レジーナ、こちらのかたが坂神裕也さんです」

「そうです私がおじすいません」

眼光恐い。

「フィリスと坂神か。了解した。で、何故ここに来た？」

「神の啓示に従って」

「神の？ということとはまさか、お前と？お前が？いやそんな馬鹿なことがあるわけが無い。そもそもこいつらじゃ無理だろう……だがしかし……」

何をブツブツ言ってるんだろう？

てかものすごく馬鹿にされてる気がするのは何故だろう？

「てか名前教えるよと」

「ああそうだな、すまない。私の名はファウストだ。知ってるとは思うが、この塔、というかコイツの番人をしている」

「ゴメン、完全に初耳だ。フィリスは？」

「私もです」

「……………は？ちょっと待て。どっいつことだ？」

「「？」」

「とりあえず、その神の啓示とやらを聞かせてくれ」

「時間が無いから早くここに行け、と。なんだか焦ってましたけど」

「ああそうか……………ということとは…もうすぐ、か」

ファウストが何やらものすごく遠い目をしている。

てかさつきから何を言ってるのかイマイチ分からん。

「いいから教える。何が始まるんだ？何をすればいい？」

「ああ、今から話す。ちなみに、今話すことができなかった場合…」

「？」

「世界が滅ぶ」

「……………」

「そ、それって一体」

「そう急くな。坂神ですら落ち着いてる」

「ですらって何！？いきなり貶すな！」

「悪い。それより、よく落ち着いていられるな？」

「まあ…異常が普通になっちゃったみたいで。慣れって恐ろしいんだよ」

「そうか、そうだろうな。流石は異界の者」

「!?!」

「そんなまやかして私を欺けるとでも思ったのか？」

「いや、ぶっちゃけバレてもいいんだけどね。説明が面倒臭いだけで」

そのままカツラを外そうとして気付く。

あ、フィリスいるじゃん。

ちなみに予断だが、このカツラは特別製で目の色も変わる。

敵を欺く一つの技、といったところらしいが。

「え？裕也さん？一体どういう」

「あーはいはい、それは後でね。そんなことよりファウストさん？あんまり時間が無さそうなんですが」

ファウストは『確かに』という表情をしたが、少し遠い目をしている。

というか……何かを諦めてるような……

「そうだな。まあお前達には無理だとは思ってるんだが……」

「いいから話せや」

「そうだな、話そう。まずあの塔は見えるな？」

そう言っつて石像の後ろ、はるか遠くの塔を指差す。

「ああ、見える」

「あれ以外にもあるんだが、あの塔とこの塔、というかコイツを破

壊しようとして『何か』が起こる」

と、次に背後の石像を指差す。

「それを、私達がどうにかして止める。と、それだけだ」

「終わり!?!」

「ああ、終わりだ。ちなみに、それはとてつもなく強大な力だ。少なくとも私とコイツじゃ打つ手は無い」

そこでフィリスが萎縮しながら質問する。

「あ、あの……ファウストさんはどれくらいの力を持ってるんでしようか？見た感じ、果てしない力を……」

「察しがいい、というかやはり分かるな。私は、おそらくこの大地に足のついている生物の中では二番目に強い。一番はコイツな」

また石像を指差す。

コイツ、そんなに強いのか。どうりで寝てても威圧感バリバリなわけだ。

では目が覚めた今は？

感覚が麻痺してわかりません。

「そんな！そんなあなたが打つ手が無いなら、私達なんて」

「だからソイツがいるんだろう？なあ、坂神？」

「え？オレ？」

そうか、そういうことならサニルでもよくね？少なくともオレよりよくね？とか思ってたけど、神が選んだ、オレにしか無い何かでどうにかしろと、そういうわけですね。

「分かった。でも神様も色々は無謀だな。オレに任せるなんて」

「そうだな。でも何もしないより何かして、お前が解決すれば儲けの感覚なんだろう」

「うわー。そう考えたらオレってめっちゃ不憫」

「同情する。が、とりあえず今は今を考える。神を憎むも呪うも後にしてな」

確かに、今神に対してキレても何も変わらない。

「それもそうだな、うん」

「……割とあっさりしてるんだな」

「こづついう性格なんだ。仕方ない」

「……まあいいか。それじゃ、私はコイツの封印を解く」

するとファウストはどこからか宝石を取り出し、石像の額に当てる。

そして目を閉じて、少し念じる。

「……っ！！」

突然、石像から弾かれたようにファウストが吹っ飛んでフィリスにダイブする。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「……やはり拒絶されたか。いやあ、仕方ない。どうやらコイツ無しのようだ」

「そんな!」

フィリスがかなり慌てる。  
てかフィリス、感嘆符多いぞ。

それから何回か同じことを繰り返していたが、フィリスがやっても結果は同じだった。  
そしてしばらくしてファウストが呟く。

「あー…参った。どうやら時間のようだ」

……絶対絶命。



第24話 グタグタ感―（後書き）

……長いですね。

よくやった、自分。

第25話 全力抵抗（前書き）

自惚れていたことが発覚してしまいました。むう。

あ今回も長めです。やったー！。

## 第25話 全力抵抗

今の構図を説明しよう。

まずオレこと坂神裕也は足が笑っていて、横になって『それ』を見ながら状況確認。

我ながら肝が据わっているなあ。

んでフィリスはただ呆然と『それ』を見ている。よく見ると歯をガチガチ鳴らして震えている。

確かに秋の夜にこんな高台にいれば寒がるのも当然だろう。

だがその身に纏っている修道服はなんとも暖かそうだ。

…やはり『それ』に恐怖しているのだろう。

ファウストはフィリスと違って恐怖を感じているようには見えないが、なんとというか、達観？

全てを諦めたような感じだ。

石像は変化無し。

反抗期じゃないか？コイツ。

最後に『それ』。

『それ』は巨大な剣だ。

なんかもう超絶ウルトラハイパービッグだ。

分かりやすく言うと、あれだ、ビルよりでかい。

それがここに向かって飛んでくる。

オレ達は『それ』をどうにかしないとイケないらしい。

「ガチガチブルブルガチブルブルガチ」

「いやいやいくらなんでも慌てすぎだろ、フィリス」

「い、いや、ででもあんなの、どうすれば」

「えーっと……ファウストさん？」

「なんだ？何か名案でも思いついたのか？」

「あれ、この世界にない物質に当たるとなんか色々な偶然が重なって破裂する。とか無いですかね？」

「現実逃避はやめて真面目に考えろ」

だってそれしか無いんだもんよ。

一か八かで巨大ダイヤでも創造するか？

……左手で触れて、もっとでかいやつ創造して反撃？いや無理だから。

……。

「おいファウスト」

「なんだ？」

「その石像増やしてみたりするのは？」

「できるのか？命を作り出すようなことが。そんな神ですら難しいことが」

「あー…多分無理ですね…」

神すらに難しいことを今のオレにできるはずが無い。  
となると…うーん…。

「そろそろ直撃するな。おいフィリス、震えてないで自分の全てを吐き出せる状態にしろ。坂神、立て」

「は、はい！すーっ…はーっ…」

「そこは『立てるか？』って言うて欲しかったなー」

フィリスは深く深呼吸して精神を落ち着かせる。  
オレはもうさすがに普通に立てるので普通に立つ。

「本当に、お前は冷静だな」

「そついう性格なんだって」

「……まあいいか。とにかく、二人とも全力だ。全力で向かえ。万が一があるやもしれん」

「すーっ、はーっ……………はい」

「分かった」

フィリスの目に炎が灯ったように見えた。

なんだろう、自分の心をコントロールするのに長けているんだろうか。

だがしかし……………どうしたものかね。

とりあえず、一縷の望みにかけてダイヤでも創造しますか。

『困ったときは、がむしゃらではなく、ひらめきが』

『

突然あの占い師の言葉を思い出した。

……………ひらめき、かぁ。

なんだ？あのア……………じゃなくてマジメデでも使えとっ……………やって？

四次元袋からマジメデを取り出す。

「……………あ。」

とても、馬鹿らしいひらめきだった。

「どうした？坂神？」

「い、いや、なんでも無いです……」

「？おかしなヤツだな……あ、フィリス、そろそろ始めるぞ。詠唱を」

「はい」

そう言うとファウストは両の手を胸の前で合わせ、フィリスは両の腕を胸の前でクロスさせる。

「《主は無属なれ。主の性は乙女なれ。主の身は常に清められし身なれ。主は主であれ。汝は汝なり。その理、決して破ること勿れ。そして、主は汝の気に召す者であれ》

《我は条件を満たせし者。よって汝、此处に降臨せよ。ワルキューレ》

フィリスの口が聞いたことがあるような詠唱をする。するとフィリスの周りが白く染まり、純白の戦女神、ワルキューレが降臨する。

「《予感、兆し。宿命、運命。この世の理、決まり事。その全てを

掌握、吟味し、我が決議する、その未来。

予兆<sup>ネル</sup>」

ファウストがそれを口にすると、途端にどす黒い障気が辺りに立ち込める。

これが二人の最強の術なのかと思っていると、フィリスが詠唱を再開する。

「《我が白の戦女神。今ここでその真価の発揮を求む》……ありがとうございます。《では、仮初の名、剣、盾、兜、鎧、姿、心を封印。今、真の汝を解き放つ。銀の猛き戦女神 アテネ》」

ワルキューレがその姿を変える。

身につけていた物が剥がれ落ち、背中から三対の翼が生え、どこからともなく現れた兜、鎧が装備される。

しかし、武器も盾も持っていない。

結果。眩しすぎて直視できない、けれど見るものを捉えて離さない、矛盾した存在が誕生した。

そしてファウストも詠唱している。

「《 我が道は暗黒、非道。それでも我は欲する、未来<sup>ネル</sup>を掌握する力を。全てを塗り潰し、全てに塗り潰される力を。予兆<sup>ネル</sup>よ全てを、解き放て。 滅びの、未来<sup>ネル</sup>》」



その瞬間周りの障気が始めから何も無かったかのように消え、次の瞬間、ファウストを中心に『黒』が広がる。アテネの銀をも一瞬のみこんだそれは、力の調整でもしたのか密度を増してファウストの周りだけに留まる。

「ファウストさん…やはり、凄いですね…」

「お前こそ…正直、想像以上だ」

「光栄です…」

銀と黒のツーショットは正直、冥土の土産に最適だと思った。けれどオレもやることはやらなきゃなので、手をかざし、巨大なダイヤをイメージしている。

既に巨大な剣は眼前に迫っている。

てかこれ、思ったよりでかい。

ビル二本は下らんのではなかるうか。

とにかく、二人の邪魔にならないように一番に攻撃する。

とてつもない痛みが身体を襲ったが、痛すぎる痛みで気絶しなかった。

良かった、気絶したら最終兵器を試さずに終わるところだった。

そして剣の前に創造したダイヤは

無惨に粉々に破壊された。

どうやら全くの無意味だったようだ。

……ちよつとショック。

ただあまり凹む時間がなさそうなのでゴロゴロ転がって石像のところまで移動する。

次にフィリス。

「 》 。 純粹なる無の力。 沈黙の光線！ 》」  
サイレント・レイ

フィリスの右手が剣に向けられ、アテネの右手もそれと同時に剣へ向けられる。

そして即座にその右手から真っ白なレーザーが放たれる。

巨大な剣はそれを真正面から受け止め、それでも失速すらする気配がない。

次、ファウスト。

「《 》。完全なる力。其の前で無力でないものなど存在しえない。《 塵と成せ、崩壊！<sup>クラッシュ</sup>！ 」

ファウストの周りの『黒』の気配があのかつて剣に移る。

するとその剣が真っ黒に染まり、『ギイーーーーー……！！』と謎の音が聞こえる。

が、剣が壊れる気配は微塵も感じない。

「ちいっ！やはりダメか!？」

「まだ……ですっ!！」

アテネがレーザーをやめ、フィリスがああ老人の札を取り出す。

そして何やら印をきくと、その札はフィリス手の平で霧散した。

見るとアテネがバカみたいなかさの槍を二本構えている。

「グングニル！アンド……ロンギニス！」

アテネが思い切りぶん投げる。

それは投げる腕の速さを関係なしに一瞬で目標に直撃する。いくつもの空間を切り裂く音が連続的に響いて、鳴りやむ。

が、その剣にはダメージが無いように見える。

「くっ！なら……最後！」

言葉通りおそらく最後の一枚であるう札を取り出し、印を結ぶ。札が霧散し、アテネに装備されたのはなんと神々しい剣だった。

「エクスカリバー！」

もうあの剣は目と鼻の先にある。

その切っ先目掛けて振り下ろす。

ファウストもそこで可能な限りの力を振り絞る。

一瞬、均衡する。

「はああああああああああああああああああ……！」

バキンと

アテネのエクスカリバーが折れ、フィリス達が絶望し、また剣は目標目掛けて前進する。

目標　則ち石像の額。

しかし、その切っ先と石像の額との間にはあと一つの存在、オレがいる。

額からの視点で、切っ先の正確な軌道は捉えたつもりだ。

あとはその軌道を信じて、緊張で震える指を使って、そのライン上にあるものを構える。

四次元袋を

あとは、この小さな入口に、あのでたらめな速度の切っ先が入ることを祈るのみ。

「いっ、いっ、いっ、来いやー！……」



第25話 全力抵抗（後書き）

うむむ…。

第26話 再来（前書き）

そういえば、「BEYOND MAX」の補足をば。

芯がゴムのバットです。

飛びます。

目茶苦茶飛びます。

…以上っ



## 第26話 再来

足の爪先から手の指先、ついでに頭のとっぺんまで震えているような気がする。

全力疾走した分の熱は既に奪われてしまっていて、秋の夜空の下で塔の頂上というこのシチュエーション、寒くないわけがない。

おや、フィリスが倒れている。この寒さにやられてしまったのだろうか。

それとも、この冷たく強い風をしのごうとしているのか。それはそれで可愛い気がする。

ファウストは何やら呆然としている。

てか手から血が流れているのが見える。それはまずい。

濡れた手をこんな風に晒してみる。あっという間にかじかんで痛覚が顔を出す。

それなのに風にもマケズ、雨にもマケズ、いや雨は降ってないけども。

とにかくそんな状態で直立不動を保っている。理解不能だ。

あ、それともう一つ。

全身が震える。

んで身体に少しの負担がかかる。  
激痛。

「あー…、倒れたら死にそイテエ」

どうやら言語による表現の自由に制限がかけられたようだ。  
人権侵害だー。

…そついやここ異世界じゃん。  
保障されてないじゃん。

……現実逃避終了。

どうやら成功したようだ。

まだ世界は終わっていない。

背後の石像も無事だ。

それよりもフィリスだ。

あの反動で倒れてるんだろうし、この寒さで倒れてたら生きてても  
風邪をひくだろう。

痛む身体に喝を入れてフィリスの元へ歩み寄る。

そしてフィリスを担ごうとしたとき、金属音。

……あの、もう寝ちゃってもいいかな？

音のした方を見るといつぞやの黒マントとファウストがいた。石像を壊そうとする黒マントから石像を守るようにファウストがいる。

そして黒マントの黒い剣をファウストが手刀で止めている。

……？

黒マントって剣持ってたか？

それによく見ると鎧まで……換装したのか？

手刀には触れない。

「ファウスト！加勢いるか！？」

「いらん！逃げてろ！」

「了解！」

背後の多数の金属音を聞きながら、とりあえずフィリスを塔の中へ避難させる。

階段で下ろすとなんかダメみたいだから広間に。

少し、思索する。

上に行ってもただの邪魔にしかならないのだろうか。  
それとも少しは役に立てるのだろうか。

……無理だろうな……

今のオレは満身創痍だし、てか元々強くない。  
そんなオレが行ってもファウストの守る物が増えるか、犬死にする  
だけだ。

「ちえ……アニメだとここは行くべきなんだろうけど……けどなあ……  
……だってそういう主人公ってみんな強い、もしくは何か秘策がある  
じゃん。オレは弱い上にボロボロだぜ？確かに神さんからの力はある  
けど、今強い使ったら死ねそうだもんよ」

上から聞こえる金属音が増えた。ほぼ二倍に。

……もしかして、もう一人来た？

「しまっ！」

ファウストの声とともに剣を持った一体が階段を下りようとしてい  
る。

が、その足がぐらつく。おそらくフィリスのときと同じ現象

パニックった脳で左手に持った四次元袋に右手を突っ込み、『BEY  
OND MAX』を取り出す。

そして、打席に立つように構え、つんのめった黒マントにタイミン  
グを合わせる。

「ビュンドー……マールックス……！」

胸部のプレートに芯がめり込む感触。腕が破裂したかのような激痛。独特の鈍い音。

それら全てを噛み締めて全力で振りぬく。

きた、ホームランっ。

黒マントは入ってきた場所から綺麗に飛んでいった。

「うおっ!?!」

ファウストの驚いた声を聞く。そして大きい金属音が三つ。何となく、塔から落としたんだろうと思う。

オレは興奮した頭で勢いそのままに階段を駆け上がった。

第26話 再来（後書き）

メリークリスマス……あり？

もう過ぎてる？

何も無さすぎてわかんなかったよアハハ

…メリークリスマス…

第27話 石像（前書き）

無駄だと分かっている、なんかやっちやうときってありますよね？

こう、カッコイイから。

## 第27話 石像

五体いてビックリしました。

……あ、黒マントね？

あと一体だと思ってました。

でも五体とは、ちと多すぎじゃあ無いですか？

ふと、目の前に剣を振りかぶる黒マントがいた。やば……

ギーン！

「このアホ！」

目の前の黒マントは一瞬でファウストになっていた。

助けてもらったんだと気づくのに一秒かかった。

そしてその一秒で自分を恥じた。

なんで出てきたんだろ、オレ。



「おい坂神！」

「はいつ!？」

「アイツをどうにかしろ！」

と、宝石を投げ付けられた。

これはおそらく、ファウストあの石像を復活させるために使っていたヤツだろう。

というか邪魔扱いされなかったことに、なんとというか、こっ、感動した。

すぐに石像に向かって走りだす。

オレには黒マントの攻撃を躲しながらいくのは無理だから、ファウストを信じて、走る。痛い。

走りながら、『まだ走れたんだなあ、オレ』と何故か少し複雑な気持ちになった。

「具体的にはどうすればいいんだ!？」

「それを額に当てて魔力を流し込め！」

「え!?!こっやって!?!魔力!?!」

「どバカ!?!お前のじゃない!?!ソイツの額にだ!?!」

ツッコミながら五体からオレと石像を守る。すげえ。つかオレどバカ。恥ずい。

石像まで着いた。

さて、コイツの額に……

バチッ！

「あでっ！」

………触れない……

「ファウスト！どうすればいいんだ！？」

「どうにかするんだ！」

気づけば、時折攻撃に転じてたファウストが守るだけになっている。

これは結構……ヤバイパターンなのでは？

………どうにか、ねえ……

バチッ！

「あだっ！」

バチイッ！

「あいだっ！」

「ふんっ！」

ピシイッ！！

「がふうっ！」

テクテク

ダダダダダ

「うおおお！」

バシヤアッ！

「ぐわあっ！」

「どバカ！少しは考えろ！」

「すみません……」

強行じゃ無理ですね、はい。

考えてみる。

そういえば、幾度も電撃を食らって何か違和感を感じた。

「何だろう、この違和感！」  
「知るか！」

さいですか。

んで、まさかの『知るか！』で気づいた。  
どうやら、電撃を出す感覚がバラバラなんだ。  
つまり……この石像が自分の意識で電撃を発している、と。

「なあファウスト！」

「なんだ！」

「お前、拒絶された、とか言ってたよな！」

「そうだったか!？」

言ってたんだよ。

だからこの石像は生きていて、意識を持ってるはずなんだ。

「言葉は届くのか!？」

「知らん!！」

さいですか。

まあいいや。とりあえずやってみよう。

石像と目を合わせる。

見たところこの石像は女だ。

そして多分子どもだ。

じゃあ恥ずかしいはずなんだ。きつと。多分。

じつと見つめる。

じつと見つめる。

なんか、ふと、オレがイケ面じゃ無かったら恥ずかしがらないんじゃないかと気づいてしまった。まあいいや。

……

だんだんコイツの目線を感じれるようになってきた。

……

恥ずかしい。

……あ、目線外した。今だっ！

パンツ！ (猫騙しの音)

ペチッ (宝石を額に当てた音)

「ヤッター!!……………(汗)」

「バチイツ！」

「ぬわっ！」

……………失敗？いや、当てれたから、成功？てかぶっちゃけ無理じゃね？

魔力なんて知らんわ！

「ファウスト！」

「なんだ!？」

「魔力の流し方が分からない！」

「…それは……………こう…なんだ…えいつ、て」

「可愛いつ!！」

「黙れっ！ええい邪魔だっ！殴らせる！アイツを殴らせる！」

思わず言ってしまったが、黒マント達が頑張っているので大丈夫だろう。微妙に頑張れ、黒マント。  
それよりも、どうしたものか……

「……あ」

マジックメディ。

固体みたいな名前だけど実は液体で少し驚いたマジックメディ。  
略してマジメデ。

かけてみるのはどうだろうか？  
バシヤツと。

……考えても仕方ないな、やってみよう。

また石像と睨み合う。

さっきの方法はもう使えないので、睨み合っただけに

「わっ！！」

ビビらしてみた。

マジメデをぶっかける。かかった。

宝石を額に当てる。当たった。

「よしっ、また成功だ「貴様あ！」ぶふっ！！」

殴られた。

ファウストよ、さっきの言葉は本気と書いてマジだったのか？んなアホな。

「貴様っ！貴様っ！貴様ああ！」

「ガッ！ゴフツ！ガハアツ！」

三連コンボが決まった。

三発目でめっちゃ吹っ飛んだ。

だけどそんなに殴らなくてもいいと思うんだ、オレ。というか、声がファウストと違うのに気づいた。

「ま、まさか…「貴様あー！」…………ゲフウ」

あー…意識が拳にスクリーンアウト…………何言ってるんだオレ。

最後に真っ赤な髪と真っ赤な顔を視界に映しながら、意識が押し出された。



第27話 石像（後書き）

今回は、初の主人公じゃないサイドの予定です

第28話 赤の少女（前書き）

かなり細かくしたつもりなのですが……  
くどくなっていないませんか？

なんか詰めちゃったな、読みにくいかな、と少々不安です（汗  
逆にまだ足りないのでしょうか？

## 第28話 赤の少女

深夜

しっかりと冷えきった風が吹きすさぶ塔の最上階、そこには一人の少女と一人の女性、それと複数の黒マントが立ち、一人の男が倒れている。

少女の顔は赤く上気し、平常心を保っているようには見えない。

「うわああああ!!」

だから相手が既に気絶しているのにも気づかずに、周りの状況も把握しないでまだ追撃しようとしているのだろう。

「ちょ!?!おい待て!」

それまで今まさに殴られようとしている男（坂神）が殴られるのを見てみぬふりをしていた女性 ファウストが間に割って入る。何故なら今少女が坂神を殴り飛ばせば、それが坂神を死なせるか、塔から落ちてやはり坂神を死なせることになるからだ。

「何よ!」

「アイツは気絶してる!殺す気か!?!」

「もちろん!」

もちろん!と即答された。

殺る気だったのか、と半ばうんざりする。真つ赤な顔してるくせに、しかしだからといって坂神を殺させるわけにもいかないの、説得を試みる。

『照れてる？ぷぷー』なんて言ったら自分もろとも消し炭にされそうなのでそこは自重。

「周りを見る！全員お前を狙っているんだぞ！」

「わ、私を狙って!?!」

「なんでそこで赤くなる!?!そうじゃないだろう!」

少女は相変わらず正気ではないようだ。

全く、坂神の機転でコイツを復活させたまではいいが……  
どうしてアイツは気絶しているのだろう、起きてコイツの世話をしろと言いたい。

「全員お前の命を狙ってる！撃退するんだ!」

「わ、わかってるわよ!」

黒マント達は襲い掛かってこない。

コイツが復活したから慎重になっっているのか？  
いや、違う。あれは

『《ラ・ヘルブランド》』

黒マント達が呪文を発し終える。

今の彼等の数は九体。一体ずつ現れていたのだが、少女が復活してからそれが途絶えた。

ただ、それがこの呪文のトリガーなのだとしたら、この呪文は所謂『奥の手』

油断はできない。

できないというのに。

「ふんっ！」

少女が黒マント達に向かって跳躍する。高く、高く。

当然それに合わせて呪文によって具現された魔法を放つ。

刀身から出たどす黒い衝撃波が少女を襲う。

「《ふんっ！》……………はぁあっ！」

少女は炎の息吹を吐き出す。

その火炎は衝撃波をたやすく飲み込み、消した。

そして少女は黒マント達の中心に降り立つ。

彼女は鼻で笑っただけ……………のはずだった。

いや、鼻で笑っただけのように見えただけだった。

あれは《ふんっ！》という詠唱だったらしい。信じられないが。

「《紅蓮》」

敵の群れの中心にいる少女は、まず一番近くにいる黒マント目掛けて右の拳を振るう。

黒マントはそれを盾で防ごうとする。

が、右の拳の前に左の拳が先に対象の横腹にめり込み、振りぬかれる。フェイントか、これで一体落ちた。

よく見ると少女の拳が赤いオーラのようなものに包まれている。

おそらく、さっきの《紅蓮》によるものだろう。まさかの二字。

ここで、前後左右から黒マントが斬り掛かってくる。

「ほっ」

少女はそれを１メートルほど跳躍して躲す。

それに合わせるように跳んでいた一体が袈裟掛けに斬りつけようとする。

が、少女はそれを両手で挟みこみ、無力化させる。

真剣白羽取りというやつだ。

その少女の背中に黒い魔法弾が襲い掛かる。まさか六体による連携とは。

少女はそれを一瞥して高らかに叫ぶ。

「《紅炎『プロミネンス』！！》」

少女を中心に紅い衝撃波が生まれる。

少女の真下にいた四体はその衝撃で地面に叩きつけられ、大きくバウンドし、空中の一体はそれを一番近くで受け、為す術もなく場外へ飛ばされ、魔法弾は塵と化す。

地に降りた少女は再び叫ぶ。

「《もういっちょ！！》」

なんとも不可解な詠唱で先程と同じ現象、つまり衝撃波を放つ。それはバウンドしてまだ地に着いてない黒マント達を吹き飛ばす。

二体が場外に飛び、一体が魔法弾を放った一体に当たり、一体がファウストに迫る。

「ふんっ！」

ファウストは右の手刀を横風ぎに払い、黒マントを断裂させようとするが、鈍い金属音と共に黒マントは右に吹き飛ぶだけ。どうやら剣で弾かれたようだ。

全く、この黒マントは無駄に防御が上手い。

ファウストに飛ばされた黒マントは両足を地面につき、滑りながら勢いを殺している。

ファウストはその一体に一瞬で詰め寄り、蹴りを放つ。再度宙に浮いた黒マントはこれ以上何もできずにただ落ちていく。

振り返れば黒マントの一体が坂神に斬り掛かろうとしている。

しまった。

奴らの狙いはあの少女だけだと決めつけていた。油断していた。

絶望していたファウストの視界に颯爽と一人の少女が現れる。

少女は黒マントの背後から飛び蹴りをかまし、黒マントを場外に飛ばす。

その衝撃で多少は少女の速度が緩和されたが、完全ではない。

「あっ……………」

それはどちらの眩きか。

少女の両の素足は坂神のどてっ腹をロックオンしている。

ゆっくり、ゆっくり。

ゆっくりと落ちていき、やがて鈍い音と鈍い声上がる。

「……………ゴフッ」

力無い声とともに一瞬痙攣した腕と足が、やはり力無く落ちる。

『ああ、これは死んだかな』とファウストは思った。

少女は素早く飛びのき、おそらくクリーンヒットしたであろう坂神の腹に右手を当て、拳動不審になる。

大丈夫、私が見ている。犯人はお前だ。

好機と見たのか、残りの二体がこちらに二人に向かって駆ける。

それを見た少女は左手を二体へ向け、言い放つ。

「《消え失せろ!》」

少女の左手から、完全に理不尽な大きさの真っ赤なレーザーが放たれる。理不尽だ。

ただ私には、それがただの『八つ当たり』のように見えたが、それはいいか。

その尋常じゃない火力は二体をあっという間に消し去った。

ここで思った。私、今回何もできてくない?と。

少女はそんなこと気にも留めずに、とりあえず坂神の胸に耳を当て



る。

そして安堵の表情を浮かべた。  
生きていたのか、坂神。

そして少女は私に気づいたのか、即座に坂神から離れる。

「なっ……何よ！」

「……………」

「何！？何が言いたいのか！？はつきり言ってよ！」

みるみるうちに少女が真っ赤になる。面白い。

「……………（ニヤリ）」

「……………（ボツ）」

少女が俯く。

おそらくは羞恥に堪えられずに。

そしてわなわなと震える少女を見て、ファウストはやり過ぎた、と後悔した。

「《殺す！殺してやる！貴様ああ！》」

右手をこちらに向け、詠唱なのか怪しい言葉を言う。

その右手は一瞬だけまばゆい光を放ち

……………プシュン

「……………あ、あれ？」

不発した。

それと共に少女の憤りもすっかり抜け落ちたようだ。

「……………とりあえず、坂神を階段に運ぼうか。ここじゃ寒いだろうか」  
ら

「……………うん。でも、その血まみれの手で？」

両手を見てみる。

なるほど血まみれだ、時間が経ったのか、どろどろにぬめっている。気持ち悪い。

「それもそうだな。じゃあ頼んだぞ」

「え？私？」

「他にいないだろう。それとも何か？恥ずかしいか？さっきなんか」

「だ、黙れ！殺すぞ！」

「魔力の枯渴した奴に言われてもなあ」

「貴様だってほとんど使い尽くしてるじゃないか！」

「それでも少しはあるからな、殺されはしない。……………試すか？」

「買った！その喧嘩買った！死んでもしらない！あの世で後悔しろ」  
「！」

そんなこんなで、日の出まで退屈しなかった、まる。

第28話 赤の少女（後書き）

……あれ、長じ！

第29話 事後（前書き）

どこかへ突っ走ろう。

## 第29話 事後

「……………んう？」

日差しを感じて、俯せで目を覚ます。

頬に当たる床が冷たい。

というか、体制がおかしい。

下半身が階段に乗っかっていて、足のつま先が天に伸びている。

身体が若干反っている状態だ。

階段を転げ落ちて気を失った、と言われても納得しそうな状態だった。

「……………いてえ」

身体の節々、いやもう全身というか全面が痛む。

本当に転げ落ちたのか？オレ。

顔だけをあげ、顎を冷たい床に付ける。

広間にフィリスが転がっている。まだ寝てるのか、あいつは。

次に俯せのまま起き上がろうとしてみる。

駄目だ、反ってるのもあって力が入らない。

どうしよう。眠いし、このまま寝てしまおうか。

「それはさすがに、いかんだらうなあ」

眩き、仰向けになるために一回転する。

そして起き上がろうとするが、腹筋に力が入らない。てか痛い。起

き上がれない。

「……………??？」

それでも、と頭を上げると、視界に何かが入った。

仰向けで大の字になっている真っ赤な髪の少女が。

長い髪がぶあつと広がっている。

頭が下にあるのだが、血は上らないのだろうか。

「……………ああ、あれか、元石像か」

勢いで気絶に追い込んだ、危ない娘。

多分だが、オレを運ぼうとして階段を下りようとしたところで平衡感覚を失って倒れたんだと思われる。うわ、名推理。

仰向けなのは適当に動いた結果だろう。じたばたする様を是非とも拝みたかったな。

それより、とりあえず起き上がるとしよう。

足を曲げ、段に足を固定する。

そのまま、全身に力を入れて……

「ブリッジ!! いたあ!!」

馬鹿だと思った。

仕方が無いので両腕を使って後ろにずりずりと退く。

下半身が全て床に着いて、ようやく腕の力で上半身を起こす。

「あ、そういえばファウストは…」

立ち上がり、階段を上がる。

途中少女が気になったが、じたばたするのを見られるかな、と思ってそのままにしておいた。

屋上は寒かった。

そういえば早朝が一番寒いんだっけ。寒さに比較的強いオレもこれはダメだ。風が冷たい。

ファウストは階段の近くで腕を組みながら座って眠っていた。

この人は寒くないのだろうか。オレはそろそろ歯がガチガチなりそうなんだが。

それと両手が血まみれだ。黒マントが強かったのか？なんだか少し申し訳無い気持ちになった。

とりあえず室内に運ぼうと手を伸ばすと、突然ファウストの目が開いた。

そして少し口の端を上げて

「襲う気か？」

「違つっ！！」

からかって満足したのか、ファウストが立ち上がる。始めから起きてたのだろうか？分からない……

「冗談だ。それより、これからどうするんだ？」

「ん？何が？」



「これから、だ。世界は無事だった。それで、次はどこに何しに行くんだ？」

ああ、そうか。

今回の目的は達成されたんだ。

それじゃあ、次は？

それよりも、もしかしてこれで終わりなのか？この世界でのオレの存在理由は消えたのか？

これは…考えるだけ無駄か。

「……まあ、普通に過ぎすよ」

「普通に？」

「普通に。フランスに家あるし、そこで帰る方法でも探しながら生きるぞ」

ファウストは少し考えた後、ちょっと申し訳なさそうな顔をして言う。

「…そうか。襲ってきた奴らも気になるが、その様子だと何も知らないんだろっな。」

一度襲われたのだが、だからといって何かを得られたわけでもない。なのでそれは言わない。

「だが、アレはどうする？」

「アレ？」

ファウストが階段を指差す。  
そこには仰向けの少女が。

「放っておいてもいいが、何をしでかすか分からんぞ？」

「……………そうだな、連れて行くか。あ、ファウストはどうするんだ？ やっぱりここから出られないのか？」

今までそうだったみたいだし、そういう可能性は十分にあるだろう。そうだったときのことはあまり考えてないが。

「それは無い。守る対象がいなくなるからな。ただアレを守るのは変わらないから、そうだな、必然的にお前に同行することになる」

「そうですか。」

「なんでか、とつても賑やかになりそうな気がするなオイ。や、もちろんオレもやぶさかじゃないが。」

そんなとき、階段で仰向けになっている少女が動いたのを感じて目を向ける。

少女は目を覚ましていた。

「が、オレが想像していたように暴れたりしない。あれ？ どうやら諦めているようだ。」

「あ〜……………うあ〜〜」

こちらに気づいたのか、手をこちらに上げようとする。助けてと言

わんばかりに。

だけど真っ直ぐには上げられず、宙をぶらんぶらんさせている。可愛い、というより可哀相だ。とてつもなく。

「ちょっと、助けるわ。心が痛む」

そう言って階段に向かおうとする。

そのとき、ふとファウストが言う。

「いいのか？ 問答無用で気絶させられたんだぞ？」

「生憎、そういうのには寛大なんだ、オレ」

「Mか」

「断じて違う」

痛いのは嫌いだ。うん。

そうして少女をお姫様だっこで持ち上げたとき「うわーっ！」「、急に殴られた。もう嫌だ。

殴られて少女を落としそうになる。

が、それはやはりマズイので暴れるまま、殴られるままに階段を下り、投げた。

予想通り、少女はいとも簡単に足から着地する。

そしてオレは素早く階段へ避難。

「ふーっ！ふーっ！」

猫がお前は。

「あーハイハイ。落ち着け」

気がつくとファウストがオレの隣にいた。  
どうやって下りたんだ？

「とりあえずこの塔を下りよう。ほら、フィリスを持って」

「ん？なんで？」

「いいから持て」

少女はしぶしぶフィリスを抱える。片手で。

そしてファウストは突然オレを抱え、少女に言った。

「競争だ」

言った後、すぐに下りの階段目掛けて走る。

一瞬呆然とした少女もすぐに走り出す。

「ちょ！階段どうするんだ！？下りれるのかアイツ！？」

「バカか？、こうすればいい」

ファウストは段ギリギリで思い切り足を曲げ、全身のバネを使って  
跳ぶ。

そうか、跳べばいいのか。

ただ、地面と水平に跳ぶってというのはジャンプに入るのか？

そして、二人とも段々ヒートアップしていき三角飛びまで使い始めた。

……酔った。うえっぶ。

第29話 事後（後書き）

よく分からないのです。

第30話 黒いですもん(前書き)

遅いっ  
短いっ

### 第30話 黒いですもん

夜の自室に可愛い女性が三人。これはなんという状況なのか。

二、三日使ってなかったこの部屋が喜んでるように見えるのは、少女とファウストの移動の速さに対抗して全力疾走した結果だろう。おそろく。

「あ、ねえ、髪留めない？髪留め」

唐突に部屋をうろろしていた少女が言う。

ちなみに、この少女の名前はネイスと言うらしい。道中で聞いた。

「あ、ハイ。私持ってますよ」

とフィリスが言ってどこからか髪留めを取り出す。

その修道服、ポケットが無いように見えるが、内ポケットがあるんだろうか。

髪留めを受け取ったネイスは、喜々として髪をツインテールにし始める。一部始終を見ていたが、どうやったか微塵も分からなかった。どうなってるんだ、あれ。

そこでファウストが話し始める。

「それでこれからなんだが、坂神は元の世界に戻ろうとは思わないのか？」

ここに来るまでに、三人にオレのここまでに至る経緯を全て話した。みんなあまり驚かなかったけど。



気がつくともネイスもこっちに耳を傾けている

「そうだな…必死になって帰る方法を探そうとは思わないな。気長に探すよ」

「じゃあ、見つかったら帰るのか？」

ネイスが尋ねる。

「あ…どうだろう。その時次第だと思う」

「優柔不断だな」

ファウストが痛いところを突く。

それはよく分かってるっちゅーに。

「あ…それはいいとして、フィリス？あの神っぽいやつからなんか来てない？」

何かあればいいんだけど。

すぐに動けるし。

「全く無いですね。どうしたんでしょうか」

「そうか…んじゃやっぱり普通に暮らしていくしかないか。…そうになると、お前達はとうする「来るぞ」か」

急にファウストが立ち上がり玄関に移動する。

そして、勢いよく玄関の戸が開かれるとともに、入ってきた者の首に手刀をあてがう。

「おつと。あー……降参だ」

そこに立っていたのはアレックスだった。奥には何人かの兵とサニルもいる。

その全員が警戒心丸出しなのだが、何がなんだか全く分からない。

「全く、やれやれね。」

そう言いながらアレックスの隣に来たサニルは、突然短剣をファウストに刺そうとする。

ファウストは跳んでそれを躲し、天井を使って身体のパネを活かして急降下。手刀をサニルに振り下ろす。

アレックスが急に加速してサニルを抱えて距離をとり、剣を抜いて一人でファウストに突進する。

「マーズボール！」

それに合わせてサニルが四つの火球を放ち、それは左右と右上、左上に放物線を描きファウストに向かう。

それを見たファウストはじと目になり、ため息を零す。

「まったく……」

アレックスの剣を左手で握って潰し、前進しながらアレックスを右手でサニルに殴り飛ばす。

火球は前進した際に背後で四つが衝突した。

そして折り重なっているアレックス達の眼前に高速で移動し、二人の首元に両手をあてがう。

「お前達に私は百年は早い。それぐらい分かれ」

と、ファウストは至極だるそうに言い聞かせる。  
すると二人は観念したように身体から力を抜く。

「はあ…負けだ」

「……………くっ」

そろそろ割り込んでもいい感じかな。てかさニルが恐くなってる。  
何故に？

「で、何の用ですか？こんないきなり」

「あ、お前は…えっと…坂…………？」

「坂神です、アレックスさん」

「いやだからアレックスじゃないと…」

「んで、何の用ですか？」

「ああ、そいつだ」

アレックスはファウストを指差す。

そしてなんかアレックスって諦めてる気がする。

「いやな、ここまでどす黒い気を堂々と出して来たんだ。気づかない訳がない。警戒もするさ」

そういえば、オレが初めて会ったときも威圧感を感じたな。  
完全に慣れてしまっていたけど。

いやあ、慣れって恐ろしい。

「で、奇襲し終わってなんだが……あんたは何者だ？」

「確かに今更だな……、まあいいだろう。とりあえず上がれ」

いやここオレんちなんだけど、等という疑問は限りなく無駄に感じ  
たので、無かったことにしておく。

第30話 黒いですもん(後書き)

…スランプ？

第31話 ある程度無駄な会話（前書き）

ふと気づくと物語に振り回されてる自分がいた。  
あーれー

### 第31話 ある程度無駄な会話

どこにでもあるようなコタツを坂神、ファウスト、アレックス、サニルが囲む。

坂神の向かいにアレックス、ファウストの向かいにサニルといった具合に。

ちなみにネイスとフィリスは坂神の後ろで座って まあ床暖房完備なので不満はなさそうなのだが いた。

たった今、塔でどうということがあって、どういった経緯でファウストがここにいるのかまで話し終えたところ。

「話は大体理解した。つまりファウスト、お前は味方として考えていいのか？」

「できるだけ考えてもらいたくない。ここに思い入れなどは勿論、無いしな」

「ふざけないで。貴女はこの国を壊すことができる。今すぐに、味方なのか敵なのか、誓ってもらわないと困るわ」

「そうか、それではこの国に危害は加えないことを約束しよう。…ただ、この国の手足となることは御免被るが」

本当にグランス国に危害は加えないのだろう。ファウストはサニルを躲すように敵でない意思を伝える。

ただ、国に深く関わることを拒む言葉も本当なのだろう。

坂神は、ファウストは嘘をつく人間じゃないんだな、と感じた。

「いいえ、この国にいる限り貴女はグランスの国民。国に尽くす義務があるわ」

「面倒だな。旅人にも何かしら押し付けるのか」

「それで？グランスの為に働くの？それとも」

「だから言っただろう。この国に興味はない。栄えようが滅びようがどうでもいい」

言い切った。

おそらく、彼女の意思を曲げることが出来る者は今この場にはいないだろう。

そう思わせる声色だった。

「なんですって！？そんな」

「おいサニル、そうムキになるなよ」

サニルが逆上する寸前、堪え切れずにアレックスがそれを制する。

「でも！」

「でもないだろうが。というより、ちょっと頭を冷やせ。今のお前じゃ話し合いにならない」

「！……」

アレックスに少しの怒気を含ませた言葉を受けたサニルは勢いを殺



され、押し黙る。

そこでやっと坂神が口を開く。

「で、どうしてサニルさんはあんなにピリピリしてるんだ？」

性格変わってるよな、絶対。

「ああ、お前達がない間に色々あったんだよ。それで少しやさぐれちまってな……どうしたもんかね」

アレックスはサニルを見、睨まれ、肩を竦めてため息を零した。苦勞してるんだな。

「まあ…それは置いといて…」

そしてようやく、本当にようやく、坂神にとっての本題に入る。

「なんでいきなりファウストを？」

後ろではネイスが退屈そうに会話を聞いていたが、この質問には全く感心が無いようだ。大きな欠伸の音がした。

逆にフィリスは律儀に正座している。

「知らないわけじゃ無いだろう？漆黒の髪と眼、それはこの世界じや忌み嫌われる存在なんだ。それにファウストは強い黒の気をばんつぱん放っているから、ある程度の距離だと嫌でも気づかされるんだよ」

「え、黒髪と黒眼？それなら…」

そう言つて、坂神は自分の髪を晒そうと手を伸ばす。  
その手をファウストが神速で掴む。

途端、叫ばずにはいられなかった。

「うわあいたたたあああああああ！！ちよちよとおお待ち！  
待あああああっ！」

多分、70kgくらいはあるんじゃないかと思うほどには痛かった。  
その中、ファウストが向ける目から「やめる」という意思が伝わっ  
て来た。了解っ！

「てかファウスト！お前が気とやらを抑えてりゃよかつたんだろ！  
？なんでばんばん放つてんだよ！？」

「いや、これでも抑えていたつもりなのだ、一応」

「「「……………」」」

「ま、これくらいでいいか。と思つていたのだが……………楽観視しすぎ  
たな」

ま、うん。

髪に手を伸ばしたことを無かつたことにするには十分だったようだ。  
アレックスもサニルも頭の中からはすっかり消えているだろう。

「まあ、なんだ……………結論、この国に危害を加えるつもりは無い、と  
いうことでいいのか？」

問題の核心。それだけは絶対につやむやには出来ないため、仕方な

さそうにアレックスが聞く。

「始めからそう言っているつもりなのだが……」

「確認だ確認。それだけ約束してくれば十分だ。帰るぞサニル、きつと外の部下達が凍えてる」

「……………」

反論が無いことを肯定と受け取つアレックスは、サニルが後をついて来るようにゆっくり立ち上がる。

次いでサニルも立ち上がり、坂神達と目を合わせないように部屋をでていく。

というか部下達可哀相…あれ？そついやオレも部下にあたるのか。

「ああ、それと」

ふとアレックスが思い出したように言う。

「その気、できるなら完全に抑えてくれ。息苦しすぎて窒息しそうなんだ」

「明日でいいか？」

「いやそれは……………」

「冗談だ」

言うてすぐ、一気に周りの空気が軽くなる。

重い空気に慣れていた坂神は、急に身体が軽くなった感覚を覚える。後ろのフィリスも同じようで小さく感嘆の声が聞こえた。

「……まさかここまで出来るとは……」

とアレックスは驚きつつ、だったら始めからやってくれ、とため息を零した。

サニルは背中越しだったからよく分からないが、とりあえず驚いていたことはわかった。

そしてアレックスとサニルが出て行ったあと、ファウストは坂神のほうを向いて言う。

「何も考えずに行動するな」

「ああ、ゴメン。でも一応考えてはいたんだよ。どんな顔するかなって」

するとファウストは本当に盛大なため息をする。

「坂神、お前はアレだろう。成績のいい馬鹿。もしくはアホ」

「……それ、本当によく言われる」

「そういうヤツは色んな人に心配かけるんだ。注意しろ」

「ファウストも心配してくれてるのか？」

「……よくもまあそんな恥ずかしいことをのうのうと……」

ファウストの頬が若干赤く……とかは当然のごとく無かった。

「ゴメン、言ってから気づいた。……成る程、これがよく考えずに喋るといふことか！」

呆れられた。

「あのさ坂神、もう眠りたいんだけど」

唐突にネイスがそう言う。

坂神は、もう夜遅いことにようやく気づいた。

別に起きている理由も無いので喜んで賛成する。

「ああ、そうだな。……それじゃ三人とも、ベッドはあっちだから。自分のが欲しいとか贅沢言うなよ、お願いだから」

指差す先には一人一人が寝るには十分過ぎるほどの大きさのベッドがある。

が、さすがに三人は予想していなかったのか、三人寝ると間違いなく朝には一人落ちていいるだろう。そんな大きさだった。

「……あれしか無いの？」

ネイスはあからさまに不満そうな声を上げる。

フィリスとファウストも若干不服そうだ。

全く、じゃあどうしろと言っんだ。

「一人暮らしにそんな二つもベッドはありませんー。落ちるのがそんなに嫌だったら床で寝る。ちなみにソファーは譲りませんのであ

しからず」

そう言いつつ寢室の押し入れに向かい、かけ布団を取り出す。そこでネイスが名案を思いついたように声を上げる。

「あ！あたしそこで寝る！」

「「「？」「」」

ネイス以外の全員が見守る中、てけてけとネイスが入ったのは押し入れの中。

成る程、名案だ。

下手したら、というか普通にソファより寝心地が良さそうだ。

「じゃ、おやすみっ！」

ボタン、と戸を閉められる。

これで残ったのは三人。一人はソファで寝るので、ベッドで寝るのは二人。

問題は解決された。

「あの、このまま寝てもいいんですか？」

とフィリスが聞く。

そういえば風呂に入っていないし服はボロボロだ。

「……………いいよ別に。それとも今から風呂沸かす？それに着替えなんて無いぞ？……………まさか裸でおっとファウスト失言だったゴメンだからその拳を振り上げないでそのまま力を抜こう」

危ない危ない、もう少して毛布を血で染めるところだ。

と、毛布片手に冷や汗が止まらない。

「ま、まあそういうことなんだ。大人しく寝てくれ」

「はい…」

そうして全員無事に寝ることが出来た。

ふと、フィリスが何故この家で寝るのか疑問に思ったが、考えるのが億劫になったので止めた。まあいいや。

第31話 ある程度無駄な会話（後書き）

次話をもっと早く…



第32話 どこにもない朝の風景（前書き）

最近夜眠いです…

夜更かしが出来ない……

### 第32話 どこにもない朝の風景

朝。

それは清々しい一日の　　などと頑張ってみようとしたが、自分には無理だと気づいたのでやめる。

朝起きていきなりこんなことを考えた自分を叱咤し、坂神はふと完全に目が覚めていることに気づいた。

昨日寝た時間は早かったのだろうか？時計を見ていなかったの、思い出す以前に知らない。

それよりも、こんなにすっきり目覚めたのは久しぶりだ。前回の失敗すら覚えている。

二の足は踏むまいと、辺りを見回してから体を起こす。激痛が走った。

「あだだ……筋肉痛っスか」

よく考えると、昨日も一昨日も頑張ったもんなあ……当たり前か。と妙に納得して、割と頑張った自分を少し褒める。そうしているとフィリスを発見した。

「あ、起きましたか……って何構えてるんですか？」

どうやら無意識に右手の牛乳を警戒してしまっていたようだ。

というか、『取る』構えなのだが、液体をどう掴もうとしているんだろうか？

コップを掴んでもどうしようもないだろうに。

「いや、なんでもない。そういえばフィリスって結構牛乳好きだよな？」

前も飲んでたし、日課にでもしているのだろうか？

「いえ、そこまで好きってわけじゃ無いんですけど……冷蔵庫にあるのがこれだけでして……」

なんと。

そう言われてみれば、金を持っていないから当然、買い出しなんか行ってない。

つまり、冷蔵庫の中身は始めと全く変わっていないと。

……………あれ？

「そういえば、その冷蔵庫ってどこにあるんだ？」

よく考えてみれば、まだこの世界のこと全く分かってないじゃないか。

と、慣れてきた筋肉痛を無視してフィリスに聞く。

「え？…いや、こっちですけど……知らないんですか？」

そう驚いたままのフィリスについていくと、台所についた。

そこには確かに、とても古い型の冷蔵庫があった。

台所も火を点せる。

すっかりガスも使えるんだな。てっきり魔法で全て済ますものかと思っていた。

「いやあ、そこまで万能じゃないですよ。使える魔法には個人差がありますし、第一それがどんな魔法かは決まっています。……………坂神さんの出身では違ったんですか？というかその前に、冷蔵庫の位置知らなかったんですか？」

「どうということなんだ？」

魔法、というものが上手く掴めない。

それと、あまり無知を曝すのは得策じゃなさそうだし……………

「いや、オレの出身は田舎だったからな。都会は違うもんだと思い込んでたんだ」

結論。

魔法図書館とやらで調べるにした。

「そうだったんですか。でもそれより冷蔵庫……………」

そういえば、冷蔵庫の中身が無かったことを思い出す。

……………こっちのほうの問題じゃないか。  
というか、厳密に言えばそれプラスお金が無いことこそが問題なのだが。

「なあフィリス、えっと、金あるか？」

それを聞いたフィリスはキョトンとして、修道服の、おそらくは内ポケットがあるであろう場所に手を突っ込む。

取り出した手には十円硬貨のようなものが。

まさか、円が使えたりするのか！？

「銅貨一枚しかありませんでした」

打ち砕かれた。

円が使えるなら……とか。

フィリスが金を持っていれば……とか。

そんな淡い希望が、簡単に打ち砕かれた。いや、想像はしてたけどね。

ファウストとネイスはやっぱり持ってないだろうし。

「なあフィリス。冷蔵庫に食べ物はない、お金も持ってない。これが何を意味するか分かるか？」

それ則ち、

『働かざるもの餓死すべし』

袋の食糧もそんなに無いし、持って今日だし。

「え？牛乳があるじゃないですか」

「三食牛乳でいいのかお前は。それに、四人で一日三本ずつ飲んだら一日で消えるだろ」

ちなみにオレは牛乳あんまり好きくない人間だ。

コーンフレークは歓迎するが。

「え、じゃあどうすれば？」

「そこオレに聞くか。…とりあえず、少しでも一日で金が入る方法とか無いか？」

バイトってこの世界にあるんだろうか？

いや、あっても出来ないだろうな。何にも知らないから。

坂神に出来ること、といったら客ひきくらいか。

「ああ、それだったらいいのがありますよ！短時間で簡単にお金が手に入る方法！」

その方法とは。

ギルドという場所で依頼人の依頼を受けて、完遂すればその場で報酬が貰える、というものだった。

依頼内容は材料調達や救援要請まで多岐に渡り、政府のものと民間のもので分けられている。

それと依頼人は、パーティーが最低何組、最高何組受けれるかを決める。

これは依頼を承諾して、そのまますっぱかすパーティーが出たときのためだそうだ。大体は最低1組らしい。

ちなみに万屋のようなものをしている人もいて、そっちに依頼することもあるらしいのだが、坂神達には無関係だろう。

「もはやゲーム感覚な自分がある……でも都合がいいなそれ。すぐにでも稼げる、今すぐ行こう」

こう、ヒマしてる時間が勿体ない。

フィリスも、そう言うと思っていたみたいだった。

「それじゃあファウストさん達起こしますね　ってキャ！」

「『キャ！』って……『キャ！』って……」

気配を完全に消してフィリスを驚かせた犯人　　ファウストはなん  
だか衝撃を受けていた。

「おお！起きてたってか居たのかファウスト……」

昨日黒の気とやらを抑えてから、どうも気配も一緒に消しているら  
しい。心臓に悪いので止めて欲しいが。

そのファウストは驚いた坂神にすら気付いていない様子で衝撃を受  
けている。

一体なんなんだ？

「……一体なにが？」

「あ、いや。なんか違和感をひしひしと……現実味が無いと言うか  
……」

どうやら感覚的なものらしい。

「起きてたんだったら一言言って下さいよもう……もしかしてネイ  
スさんもどこかに！」

そう言っただけを警戒するフィリスは、とても危なげだった。色ん  
な意味で。

そのとき、ガラツと押し入れが開く。

……そういえばどうして『押し入れ』のある部屋に『ベッド』があ  
るんだ？いや畳じゃないから逆か、押し入れが異端なんだ。

「うん？呼んだあつぶげらうわああ！」

説明しよう。

外界に身を乗り出したため、体重に引かれて布団と一緒に落ちたの

だ。

というか、何故布団が？ベッドがある部屋に何故布団が？  
分からない……

それはともあれこのメンバーでまともに依頼を受けたりできるのだ  
ろうか？

とにかく、先行きがとっても不安になった。



第32話 どこにもない朝の風景（後書き）

むむむ！

『む』って言いづらいけど、なんだか響きがいいのです。  
え？頭おかしい？大正解。

第3話 じねはいわゆるおとじ(前書き)

…長いです。

どうしてこうなった。

### 第33話 これはいわゆるおとり

眼前に広がるのは緑ばかり。

空を仰ぐと、その空の青よりも木の荘厳さばかりが目にとまる。そのくらい緑。

そう、今オレ達がいる場所は『森』。

通称『迷いの森』 この呼び名は、入った者が森を出る確率があるに少ないため、らしい。

とりあえず、どこまで行けば森に『入った』ことになるのかは甚だ疑問ではあるが、そこを考えると止まらなくなりそうなので割愛する。

とにかく、今坂神は若干後悔していた。

いくら世界最強クラスが味方にいるとはいえど、いきなり難しい依頼に挑戦するのは無謀だった。

何せ魔物に出くわせば、選べるライフカードは『喰われる』又は『逃げきれずに喰われる』しかなく、流れ弾が当たれば風穴が開いてしまうのだから。

「やっぱオレは帰ったほうが良かったかな……」

ちなみに、今喋っていた間にも竜の吐いた火球が身を掠めたのだが、いい加減リアクションもし飽きた。

その火球はヒットすると周りに燃え移る前に対象を灰にし、すぐに消える。

まともにあたればどうなるか想像もできない。

「まさか、竜の種族がこんなにいるとはな……私達は今どこにいるんだ？」

ファウストが不機嫌全開でぼやく。

彼女は坂神に四方八方より向かう火球をことごとく弾き返しながら、反撃にその辺の木を投じている。

彼女いわく『空中に有効な魔法だと森が焼ける』だそうだ。

「まったく……あの二人とははぐれてしまったし……あつ」

直撃する軌道。坂神に。

これまで彼女は坂神が躲すことが出来ないものを弾いていたのだが、一つ逃してしまった。

「あん？」

坂神の視界にその火球が映る。

そこへ天より飛来した一本の木がその火球を踏み潰す。

呆然としたまま、理解するのに数秒を要した。

「いやさ……なんで木が降って来てんだよ……」

分かっていたけどね。

ファウストが投げていたヤツだつてことぐらい。

そして死にかけたことは見事にスルー。

いちいち突っ込んでたらキリが無い。

「…………… 計算通り！」

「嘘つけえ！」

補足しておくのと、直撃するようなものは全てファウストが弾いて掠るのは見逃していたので、本当に死にかけたのはこれが初めてである。

だが、坂神にしてみれば全て奇跡的に避けているように感じるので、そんなことは心底どうでもいい。

空から坂神達を肉片一つ残さず消し炭にしようとする竜は見る限り三体。

ちなみに、依頼内容は『ワイバーンを倒し、その牙と爪を持ってきて欲しい』だ。

ワイバーンと竜ってどう違うのか、そもそも違うのか、それは些事だろうか。

とにかく、予定では一体しかいないはずのその竜（ワイバーンは字数が長い）が三体もいるのがおかしいよな。

そう脳内で愚痴を吐いていると、またバスケットボール大の火球がテニスのサーブ並のスピードで飛んでくる。

ぶっちやけ、相手が一体だけだったら余裕（？）で躲せる。火球はね。爪は別だけど。

「あのさ、ファウスト」

一度ファウストに聞いたけど、あの爪の攻撃をまともに食らったら穴が空くらしい。くわばらくわばら。

「なんだ？ ふんっ」

ファウストの放った緑いつぱいの木が宙を舞う。  
ただ、一回も当たってないが。

「ファウストが苦戦するなんて考えてなかったんだけど」

正直、勝ち目がなさそうだ。

というかファウストが瞬殺するものとはかり思っていた。

「お前の世界で一番強い人間は野生の一番強い動物に勝てるのか？」

つまり、オリンピックとかで優勝するような、もしくはアフリカやらで強靱そうな肉体を持った人間が、ライオンやトラかける3に勝てるのか。

……いや、普通に無理じゃね？

「……何となく、理解したよ」

「それと坂神、私も聞きたいことがある。今更だが……」

ファウストの手刀と竜の爪が交差する。

そのファウストの手刀はなにやら黒いものに覆われている。何かしらの魔法でも使っているのだろう。

「ん？なんだ？」

「なんでお前も来たんだ？」

「……………」

沈黙。沈黙。沈黙。

沈黙の果てに見えたのは沈黙で、その果てに見えたのも沈黙。さて、次は何黙？

……ああ、こういうのを『頭が真っ白になる』って言うんだな。

「……………ノリとしか……………」

「だからよく考えて行動しろと」

ファウストが溜息する。

がっくりと肩を落としながら竜と格闘している。なんと器用な。坂神の目にはそれは余裕で捌いているように見えているのだが、やはりそうではないのだろう、そうだったらもうケリはついている。

おっと、少し肩に掠った。

「坂神」

「ん？」

ファウストは三体の竜を交互（交互？）に見ながら坂神に声をかける。

もちろん両手は眼前の竜を捌いている。

「二体に集中したい。お前にその一体の注意を集めれるか？」

そこ、というのはおそらく目の前の竜のことだろう。  
うん、無理だとは言えない。  
何故だつて？お荷物だからさ。

「まかせろ。ただ、助けを呼んだらヘルプミー」

「ああ、………任せた！」

ファウストが彼女と格闘している竜を渾身の力で殴る。  
それを羽で受け止めたその竜は、あろうことか何メートルか吹っ飛んだ。

その竜に向かって木を投げつける。

そして後ろへ跳躍。

身を焼こうとした火球は地面に突き刺さり、一部分を灰にする。

その火球を吐いた竜は、次に坂神に向かって吐く。

それに木を投げつけて相殺させる。

直ぐに肉薄し、その一体と本気で一回の攻防。拳が竜の顎を捉える。  
しかしすぐにもう一体へ意識を戻し、目の前の竜をもう一体のほうへ投げ飛ばす。

「ぐっ！」

投げ飛ばす際に竜の爪が背中をえぐる。  
が、そのくらいの犠牲は覚悟していた。

これで二体が、一箇所に纏まった！

木を抜き取り、二体に向かって跳躍する。

火球が襲い掛かるが、それは木で防ぐ。

三発で切り株みたいになった。

可哀相な木のおかげで一体にしがみつくなることが出来た。



もう一体の火球をこの一体に受けさせる。悲鳴。

それで火球を放った竜が動揺した一瞬を狙って跳び移る。首に一撃、息の根を止める。

未だ悲鳴を上げている竜にもう一度跳び移り、また首に一撃、息の根を以下略。

終わったあと、本当に残りの一体の存在を忘れていたことに気付いて顔を青ざめる。

一方、坂神SIDE。

とにかく注意を逸らさないといけないので、とりあえず投石してみた。

全力で投げたにも関わらず、その石は火球と交差して偶然竜の頭にヒット。

火球は紙一重で躲す。本当に紙一重、もはや躲したというより当たらなかったといったほうが正しいくらいだ。

『グギヤアアア!!!』

咆哮。

音圧が緊張か、はたまた恐怖か、心臓が早鐘を打つのが分かる。

どうやらキレたようだ。全く、今時の竜はキレやすくて困るなハハハ…

火球を乱発してくる。

実際、先述したように一体ならば避けられないことは無い。

他二体が撃ってきたら別だが、ファウストに任せたので完全に無視。これは信頼？

周りの足場が炭やら灰やらで真っ黒と真っ白がマーブル状に気持ち悪いことになった頃、竜が滑空してきた。

実際ファウストに火球を吐かれると坂神にはどうもできないので、そういう意味では僥倖。

しかし、竜の爪を防ぐ手段が無いことを考えると空前絶後の一大ピンチ。

とにかく石を左手に持ち、石の剣を即席で『創造』する。

こんなもの、腕力的にも強度的にも無謀の極みでしかない。

竜の爪の前では。

「うおおおおお！」

気を奮いたたせる。

タイミングが命だ、失敗させるわけにはいかない。

竜が爪を前面に突き出す、おそらくは坂神の身体を切り裂くつもりで。

しまった！頭に当てるつもりなのにこれじゃあダメだ！

……やむを得まい！

竜が両足を振り上げる。

それに合わせて『創造』

振り上げた両足と坂神の間にダイヤを

創造する。

本当はフレイにしたように頭にぶつけるつもりだったんだけどなあ

……

ダイヤに左手をそえて竜に突き出す。

振り下ろし始めは力が入らない。

竜の動きがピタリと止まる。動けないのだ。

「ほああ！」

無我夢中で奇声を上げながら、左手を離して右手の剣を両手で構える。

そして剣を竜の胴体に突き刺す。この剣は防御ではなく攻撃手段なのだ。

『ギィアアアア!!!』

耳をつんざく悲鳴。

それに威圧されたのか、『創造』の反動か、それともあるうことが油断したのか、坂神はその場を動かない。

炭素の塊は重力に従って地面に落ち、今彼は竜と肉薄している。なにより

まだ、竜は死んでいないというのに。

竜がその身体を切り刻もうと、上げていた両足をまた少し引く。

その動きを見た坂神はやっと状況を理解し、悟る。

(あ、やべ。死んだ)

人間など鎧ごと切り裂く強靱な凶器が振り下ろされる。

そこに神速で割り込む黒い影一つ。

金属音、次いで竜の血飛沫が舞う。

竜の爪は目標を捉えることは無く、手刀に弾かれて行き場を無くし、その首には腕が突き刺さっている。

その腕の持ち主は、息を荒げて安堵の表情を所持。

「間に……合った」

坂神はただ呆然としている。

死の狂気と生の驚喜が脳内、もしくは胸の奥底で渦を形成している。有り体に言えば、パニック、混乱、凶器乱舞しているのだ。最後の漢字も意味も違うなあ。

「あ？どうした？ショック死でもしたのか？」

「それブラックジョーク」

心臓が働きすぎて逆に止まりそうなくらいだ。もっとサボれ。

「よかった……」

ファウストが本気で安堵する。

……正直、面食らった。  
こう……鬼教官がチラリと見せる白い歯というか優しさというかなんというか。

「あの……ファウストさん？」

「っ！」

い、いかん！このままじゃ『あなたの心配なんかしてないんだからね！？』とか言い出しそうだ！

それはアレだ！マズイ！

「ブ、ブラックペッパー………」

「……………は？」

やってしまったー！！

空気をどうにかしようと考えた結果がこれだよ！

「いや、と、とりあえず色んなものは棚に上げてそのまま棚ごとひっくり返してですね！」

「あ、ああ…分かった、分かったから落ち着け」

深呼吸を数回。

落ち着いた頃に『なんでオレが取り乱してるんだ？』と思っただが、盛大に無視した。

「ふう……とにかく、これで依頼完遂ってことで」

「そうだな、本当に色々あったが………ありがとう」

「……ん？」

疑問符。

「お前のおかげだ。よくやった」

待て待て。

礼ならこっちがすべきだろう。確実に。

ファウストがいなかったら多分三桁くらいは死んでるぞ、オレ。

「何言ってるんだ、頑張ったのはファウストだろ。ほら、オレは無傷だ。お前のおかげでな、ありがとう」

大して筋肉質でもなく、こっちの世界じゃおそらく貧弱であろう身体を見せつける。

『反動』もあまり気にすることは無い。

服はもう人前に出れないレベルまで損傷しているが。

対照的にファウストは背中から血が大量に流れている。

手刀として酷使した両手も血だらけだ。

とても楽観視できるものじゃない。坂神だと失神しているだろう。

「傷じゃない、成果でもないんだ。普通、お前みたいなほぼ非戦闘員は竜とまともに向き合えない。私は戦うのが普通だ。だが、お前はそうじゃない………それでも、お前は戦った」

有無を言わせない何か　　プライドのようなものが見えたような気がした。

しかし、坂神にも譲れないものがあった。

これといった理由は無いが、男として、何か、何かがあった。

「つまり、『私には力があるから戦うのは普通で、あんたは力が無いから戦うのは凄いことだ』ってことか？それは自惚れですー」

「…？」

断言しきるのはなんだか恥ずかしいので、少し茶化した喋り方をする。

実を言えばキャラが壊れる不安があったりするが、まあいいや。

「オレは強くなきゃいけないんですー。こんな竜くらい小指で弾けなきゃいけないんですー」

「坂神？一体何を　　」

茶化す喋り方が面倒になった。

我ながら早い。

「つまり、だから、すなわち！オレは弱者じゃ駄目なんだ！こっ…ファウストと同じ土俵に上げなきゃ遅い！そうじゃなきゃ強くなれない！何故なら！その理由は！曖昧で不明瞭だけど！」

なんだかもうノリで喋っている。

勢いに任せて、ここぞとばかりに。

そして締めにかっこイイ台詞が浮かんだ。

よろしい、ならば使っしかあるまい。

「オレは、勇者らしいから」

後に、この台詞は坂神の黒歴史に認定された。

だって、恥ずかしすぎる by 坂神 裕也



第33話 これはいわゆるおとり（後書き）

ノリは大事です……多分。

第34話 気苦労(前書き)

別視点なのです。

### 第34話 気苦労

「……………」

サニルを見る。見つめる。

滝に打たれ続けるサニルを。

ちなみに今の気温は10度くらいだと思う。サニルは何時間かずっと打たれ続けている。

……あれ、コイツ、凍死してないだろうな？

「……………はあ……………」

アレックスはあからさまに溜息してみる。が、彼女は意にも介さない。

まあ反応されたらされたで困るんだけどな。

……彼女が突然修業を始めたのには理由がある。

坂神達が去ってしばらくすると、急に魔物がグランスを襲おうとした。

普段はこんな短草草原に魔物は足を運ばない『はず』。格好の餌食になるから。

それでもただの魔物なら倒し尽くせば終わりだった。眼前に広がる全ての魔物を、サニルの星魔法なら、それができた『はず』だった。けれど、現れたのはそこら辺に転がる雑魚ではなかった。

それはもう、赤々として黒々として、とにかく普通じゃなかった。

どろが頭で、というかどろが中枢部で、どろが、というかどろが腕なのか。異形としか言いようのない化け物が沢山いた。今までどろに隠れていたんだこんな危険生命体ってくらい。

まあとにかく、そんなものにサニルが魔法を放とうと微塵もダメージを与えられなくて。

サニルは終いには足が竦んで動けなくなっていた。

結局国が総力を上げて殲滅にかかり、偶然発見できた弱点を発見してなんとか勝ったわけだが、サニルは酷く自分を責めた。

別に、国が一体となつて勝利を収めたんだからあつぱれじゃないか、と俺は思つわけなんだけどなあ……

兎に角、それ以来サニルは自分に厳しくなつた。後輩の面倒をそつちのけにするのを良いこととは思わないが。

それと平和ボケしてたのか、国民のほぼ全員が逃げ腰だったのはどういふことか。情けない。

今ではBランクの依頼をこなす者はほとんどいないし、Cだって危うい。もうCをDに潜ませてみるか？……流石に駄目か。

そういえば今朝Aランクを請けたのがいたな。皆も見習つて欲しい。……せめて死なないでくれと願う。

おつと脱線してた。

兎に角、サニルの機嫌が悪いのはそういうわけで。

向上心があるのはいいが、それで身体でも壊したら基も子もないぞと。

「……………」

…… 本当に凍死なんてしてないだろうか？

彼女に近づくアレックス。

足が水に浸かって痛い。

修業に休息は必要だってことくらいお前だって知っているだろうに。

「おいサニル」

それに彼女が反応を示す。

まぶたをゆつくり、本当にゆつくり上げる。

その顔は、なんとというか、予想どおり青かった。

「……………ん」

かろうじて聞こえた小さな声。もしかして身体が麻痺して動けないんじゃないだろうか？

彼は彼女にの肩に触れようとして、水の冷たさを感じた。痛い。…

…痛い？

「ちょ、おい！こんなに冷てえのかよ！」

慌てて彼女を水から引きはがす。

けれど、彼女に纏わり付く水はどうしても取り払えない。

腕の中のサニルは、震えていた。

目の焦点が合っておらず、歯をガチガチさせ始める。

こんなの修業じゃねーだろ！クソッ！アホかコイツは！？

「おい！動けるか！？」

返事が無い。

サニルの目は虚ろで、重心がこちらに傾いているだけだ。

「この馬鹿野郎め！」

サニルを肩に担ぐ。

そのまま、修業用のパワーリスト（左手）に仕込んだ術印を発動させる。

体感時間が遅くなる。

身体が軽くなる。

『反応』と『身体能力』を高める雷の魔法の基本形

「ふう……」

とりあえず暖かい着衣水泳させてやった。

脱がす？無理だ。まだ命が惜しいからな。

サニルが溺れたりしてないことを祈りつつ、先行きを考える。

あのサニルにファウスト、さらにだらし無い国民 近い内に大会

でも開いてやるうか、傷ついた部下達。

問題は山積みだ。

「あー……、どうしたもんかねえ……」

「どうしたんですか？」

「っ！？……おお楠葉、お前か」

ビックリ。した。

現れたのは部下の一人、楠葉。

彼女はフルネームで楠葉らしい。名前というものは性と名があるものだが、不思議な子だ。

漢字の名前というのも、希少とまでは言わないが、少なくとも多くはない。

髪の色は緑、特異な色だ。

そういえばどこかの部隊のレオンといったやつ、あいつも青に黄が混じった（緑ではなく、一部青で一部黄）変な色をしていたな。

楠葉は背筋をピンと立てている。

うむ、背筋を伸ばしても例え海老反っても、目のやり場に困らないのは大変よろしいことだ。

おっと睨まれた。

女の勘というのは恐ろしいな。

「で、何かあったんですか？」

「ああ、それがな……」

言っても仕方が無いのだが、隠す必要も無いだろう。ということだ  
彼女に愚痴った。

そっぴや彼女はどこの部隊だったか、隠密？

いや………忘れたな………

ともかくにも、少しだけ気が楽になった。



第34話 気苦労（後書き）

アレックス君、ちみは脇役中の脇役つまり表に出るはずが無いのでは無かったのかね。

と思わなくもなかったりしないわけでもないとは思わない。

第36話 名無しの武器（前書き）

あれ……なんででしょう。

どうも笑いが入らない……

### 第36話 名無しの武器

「おお、いやまさか本当に持ってくるとは……ってなんだこの量は!?」

坂神が依頼の品　ワイバーンの爪及び牙　を渡すと同時に、それを渡された依頼主である武器屋のおじさんが驚嘆の声を上げる。

依頼では一体分持って来てくれればOK（もしくは、一欠けらでもあればまあOK）のはずだった。

「え?」

「あ、いや、すまない。これ、一体から取れたのか?」

店内には数々の武器や防具が　というわけではなく、入口に両刃で細身の剣が二本あるだけだ。もう一つ言えば、防具は売っていない。

所謂、高級店というやつだ。

「いえ、三体」

「成る程三体か。それなら納得が………いくかよオイ」

「?」

なんとモダンディズムを纏ったおじさんが、驚愕に目を見張っている。いやあ、うっすらおひげが雰囲気を出してるなあ。

「いやはや……まさかここまで出来るとは……俺の目も衰えてきたのか」

感慨深げに呟いているおじさんをほっといて、坂神は渡された金貨を眺める。

この世界では金銭に紙幣等という概念は存在しない。

そんなものがあっても、この世界じゃすぐに使い物にならなくなるためである。燃えたり裂けたり、主に交戦中に。

よって必然的に硬貨になるのだが、硬貨には金貨、銀貨、銅貨があり、それぞれに二種類存在する。マリス硬貨とイリス硬貨。つまりは六種類。

坂神は未だ（というか使ったことが無いので当たり前だが）硬貨を円に脳内変換することができないが。

ちなみにマリス銅貨十枚でイリス銅貨、イリス銅貨十枚でマリス銀貨、マリス銀貨五枚でイリス銀貨、イリス銀貨二枚でマリス金貨、マリス金貨十枚でイリス金貨である。

ややこしい？見づらい？

すいません勘弁して下さい。

とにかく坂神は、手の平にあるイリス金貨五枚とマリス金貨五枚を『うおい金一色じゃまいか』等と思っていたりする。

後ろではフィリスが目を輝かせているのには気付いていない。

「ああ、そつだ。予定以上買ったんだ、何かやろつ。何がいい。短剣二本か？長剣か？」

そついえばあの後、無事にフィリス達と合流できた。

そりゃあ木がポンポン飛んでるんだ、不審に思わないほうがおかしいよな。

それとフィリス達は竜に遭遇しなかったみたいだった。

ファウストを見やる。

彼女は右手を挙げて、その手を左手で指差す。

手刀で十分だと言いたいのだろうか、それとも血が固まって凄く痛いことをアピールしているのか、多分前者だろう。

「ネイスは？」

「あたしは剣は使わないからいいや。あんたは要らないの？」

「いや、オレに良い剣は早過ぎると思うし……フィリスは？」

「私は剣を使ったことがありませんから」

「そうか？それじゃあ……」

あれ？うちのパーティー剣要らない？そんな馬鹿な。

「あ。……おい坂神」

ファウストに呼ばれる。なんだか嫌な予感がした。

「……何？」

「お前、勇者なんだろう？」

「っ!?!」

やめてオレに恥をかかせないでお願いします本当にお願い。

弱い部分を突かれて、坂神には選択肢が一つしかなくなった。

「んで、どうするんだい？」

「あー…それじゃあ、に、日本刀ってありますかね？」

「二ホントウ?なんだそりゃ」

「……………」

いやあ、まさか無いとは。

ここはある流れだろうがよ。

しばし考える。

日本人だから日本刀にしようとかふざけすぎたのかもしれない。

とにかく……………あー…短剣…双剣……………長剣…太刀……………やっぱどっちでもいいや。

「じゃあ長剣お願いします」

「あいよ、ちょっと待ってな」

そうして、おじさんが店の奥から取り出してきたのは二本の長剣。

片方は西洋の両刃の剣、もう片方は峰があり、和風の剣 所謂、

日本刀。  
どちらにも何やら文字が彫られている。

「さあ、どっちがいい？」

「……え、いや、それって日本刀じゃ……？」

日本刀に見えるものを指して言う。  
するとおじさんは少し驚いたような顔をした。

「お前さん、お目は高いほうかい？」

「多分ダメだと思います」

「そうか……コイツをニホントウと呼ぶのかは知らねえが、とにかくわけの分からん代物なんだよ。何の魔術が施されているのか全く分からん、剣としての性能の高さは保障するが」

「おい坂神、お前にはそつちのほうが良いんじゃないか？」

ファウストの言う通り、魔力が必要なものはオレには使えない。  
どうやらオレの身体からは魔力といえるものが微塵も感じられないらしい、ファウストから聞いた。

「それじゃ、それをお願いします」

「はいよ。またよろしく頼むぜ」

「暇でしたらね」

まあ二度と行かないと思うけど。

「ねえ坂神！。終わったんならもう自由行動でいいのー？」  
店を出てすぐネイスが聞く。

「ん？いいよ。ああでもファウスト、今からその髪隠すもん買いに  
行くぞ」

さっきのおじさんめっちゃ驚いてたしな……

「それじゃ私は……久々に戻ってみますかね……」

そうして今日はこんな感じ。



第36話 名無しの武器（後書き）

でもまだ終わらないのです

第37話 元剣士（前書き）

この小説を読み返してみても、序盤は書き換えたほうがいいのでは、  
と思いました。

序盤で読むのを止められてはどうしようも無いことに気付きました

……

……どうしますかねえ。

### 第37話 元剣士

真っ白な床、真っ白な壁、真っ白な天井。気を抜けばその三つを混同させてしまいそうな空間で彼女　フィリスはそこにいた。

「ああ、全く。どうしてここはいつもこんなにキレイなんでしょうか」

このぼやきは、建物に対して高揚したためではなく、単に居心地の悪さからきている。

教会であるこの建物には聖水やら聖石やらなんやらかんやら使われており、床、壁、天井はもちろん空気さえ清浄に保たれている。それゆえに身体に抗体が全くできず、長い時間いると必然と病弱になるのだが。

「こんなとこに住む人間の気がしれないです、全く……」

とにかく、早くボロボロになった服の替えを取りにいかないとなあの人に見つかる前に

「呼ばれて飛び出て」

「死にさらせえええ!!」

「ちよっ！待っ！今フィリスの姿が見えた気が」

「同じ手が五回も効くかあ！」

「十回は効くんじゃないかと本気で思ってたりする。てかプリン食ったくらいでそんなに」

「その台詞これで何回目だあああ!？」

「……………」

やっぱりボロボロでもいいかな……

これでも滅多なことが無い限り防御性はバツチリだし。

ちなみに服がボロボロの理由の十割はネイスの流れ弾である。

「はぁ……気が重いなぁ」

とにかく自室まで駆け足で向かうことにした。

無論、足音を消しながら。

なんの捻りもないただの変哲なノブを回す。

自室に入ると、そこは悪夢だった。

「うわぁ……………」

机の上に山ほどの書き置き。

書き置きって普通、出て行く人が書くんじゃない？

どう処分するかしばし悩み、処分すること自体を諦めた。

処分しても、増えますし？

「やあ」

「キヤアー!!」

突然肩に手を置かれ焦るフィリス。

「いや、そんなに驚くんですか?」

「驚きますよ……ああ、そうでしたね。元剣士でしたっけ」

「おお!もう忘れるとこまで来ましたか!脱剣士も近いっ!」

そういえばこの人は元凄腕剣士だった。気配を消しきるなんて出来るはずもない。

「いやいやバレたことを悲観する必要は無いですよ、フィリスは魔法使いですからね」

「はあ……」

この爽やかな感じの青年の名はクリス・リーティン。

元は名のある剣士だったのだが、今は剣を捨て、僧侶となっている。

「それで今日はどうしたんです?その服がボロボロになるなんて、あまり考えられないのですが」

「いや……ちょっと連れの流れ弾が」

「連れですか?……ということとはやはり、修業に帰ってきたわけじゃ無いんですね?」

……あれ？

どうしてか、気付けばあの場所が自分の居場所になっている。そんなに長い時間一緒にいたわけじゃないのに。今日もあの家に帰ろうとしている。別にまたここで寝れば、暮らせばいいのに。

……何故？

……あ、そうかな？

「まあ、まだ仲間、というわけでは無いですけど」

「あれ、読みが外れましたかね？」

「今日は初収入のパーティーがありますから」

そういうことにしておこう。

「……成る程、そうでしたか。まあ彼女には黙っておいてあげますよ。」

「おお、クリスさんが仏に見えます」

「僧侶ですからね。とはいえ、仏の顔も三度までですよ？」

どうやら、脱剣士が近いのも案外気のせいじゃないのかもしれない。

「あ、そうです。プリンも奪取も程々にしたほうがいいですよ。」

「隣の芝は青いと言っじゃありませんか。美味しいんですよ、他人のプリン」

「僧侶は欲望に従うのは良くないのではないですか？」

「欲は人間の行動原理の基ですよ。例え僧侶でも仏でも、人間であるならば欲を消すなど不可能です。ですから、プリンは食べる」

「まあ私も欲望を消すつもりはありませんけど……」

一度かもしれない人生、そりゃ楽しみたいから。

「ですから、やりたいことはやってもいいんですよ。大体は」

「そうですね、多めに賛成です。やりたいことはやるべきですよね。大体は」

「ハッハッハ」

「フフフフッ」

「さあ、着替えなさい」

「部屋出て下さい煩惱僧侶」

さあ、着替えたら楽しみなパーティーに行こう。

第37話 元剣士（後書き）

一日、何故か閲覧数が急増したのです……

何故？



第38話 住む者（前書き）

とつても遅く……なりました（汗

### 第38話 住む者

自由とは何か。

ただ拘束されていない状況を指すのか。選択肢を複数持っていない状態を指すのか。ならばそれは二つあれば自由なのか、あるいはどこかに線引きがあるのか。やりたいことが出来る状態を指すのか。それとも、『何でも』出来る状態を指すのか。

私は今、自由なのだろうか？

拘束などされていない。

選択肢は、ある。生きること死ぬことも出来る。食べることも動くことも飛ぶことも出来る。

やりたいことは……ふむ……腹が減ったので飯を食いたい。そしてそれは可能だ。

……『何でも』とは何だ？

どこまでが範囲だ？

未来を知ることが出来ないし、過去を変えることも出来ない。ただ大体のことは出来る。

「むう……」

何の変哲も無い森の中、いくら考えても詮無きことを彼女は思案する。

それは思案『してしまっ』のではなく、『試している』だけではないか。

そして終わりの無い一人問答に飽きたころ、次の命題を口に出す。口に出したのは、ただ単に喋らないと言葉を忘れてしまっ気がしたからで、大した意味は無い。

「そういえば、最近『魔』が増えてきたな。この前は人間を襲ったようだったし……むっ……今度はこれを考えるか」

しかし、先程の『自由』について思案していたせいか、頭を回すのが億劫になった。

そして頭を使っていた間に身体が鈍ったような気がするので、大きく背伸びしてみる。爽快感が回復した。

「くあ……」

ついでに背伸びに感化されたのか欠伸を一つ。相乗効果で爽快感がメーターを超えた。うえっぶ。

爽快感を減らすために歩く。

食糧を捕るといふ選択肢が浮上したが、それはもう少し気分が高揚したらでいいだろう。今は暇な状態の気分でいたいのだ。

もういつそのこと、飯が転がっているといいんだけど。

「……………おおう?」

少し歩くと思わぬ収穫があった。

それを見て覚醒した頭で周りの情景を処理する。

視界に重点をおいてみると、辺りには灰と化した部分がちらほら、それと根っこから抜かれてあちこちに転がっている木が存在している。

「なんだ? 鬼でも出たか?」

あまりに常軌を逸した光景にしばらく魅入ってしまう。

これが形成される場面を想像できなくて、でもしようとして、頭がフリーズしているのかもしれない。

というか鬼なんていたら間違いなく気付くし、そもそもこんな有様にはならない。

とにかく、その中で彼女に物理的に(?)関係があるのは、倒れている竜の一種。

見れば牙と爪が無い。

確か、最下の位の竜だったはず。

息絶えているので、毒が無ければなんでもいいが。

「まあいつか。それにしても始めてだなあ、竜なんて始めてだなあ。うわ凄い楽しみ」

見た感じだと繊維が硬そうだけど、まあ柔らかいところはあるだろう。

と、ワクワクしながら歩みよる。

少し小走りになっていたかもしれない。もしかしたらスキップしていたかも。

「さあて」

皮に手を伸ばす。

それは予想以上に、予想以上に、予想以上に。

「……………堅い……………」

これは骨が折れそうだ。

……………なんだか、楽しくなってきたでゴザル。

その後も四苦八苦し続けて、その竜に丸一日程かけた。

暇を持って余す彼女にとって、それは至高の時間だったそうなの。

第38話 住む者（後書き）

暇な時間こそ至福の一時である？

第39話 修業（前書き）

強くなりたい気持ちは男の子なら誰もが持ってる……と思います。



### 第39話 修業

姉さん事件です。いや姉なんていないけども。

朝早く、オレ 坂神裕也は苦悩していた。

先日ある程度お金が貯まったので、数日間ずっと図書館に行つて魔法について調べていた（興味が十割）ころに、それはやって来た。

オレは第三部隊とやらに所属しているわけだが、訓練その他諸々全て自主参加なので一度も行っていない。

まあ自分は凄腕魔法使いみたいに思われているので、わざわざボロを出して降格させられるのは望むところでは無いのだ。

しかし、その日に伝えられたのは『コロッセオ』……つまり所謂『闘技場』……あれ？闘技場って会場の名前？まあ伝わればOKってことだ。

とにかく、そのコロッセオについてを通知されたのだ。

二週間後に開催らしい。そこまでは何の問題も無い。そこまでは。

「……………強制参加……………だと…？」

その文字を見た瞬間、脳裏に浮かんだのは『腹痛』『怪我』『用事』  
次の瞬間に浮かんだのは『食べ過ぎたので』『昨日戦闘で負傷』  
……用事は無しだな、選択肢から外そう』

そして最後に『一度も訓練に参加してないだけでアレなのにこれじやますます怪しまれる』

それじゃ、出るとみせかけて棄権？

全く解決策になっていない。

通知を見てフリーズした坂神をどう思ったのか、ネイスが話しかけてくる。

他二人はリビングでダレている。

あれ、よく考えれば女性の割合75%じゃないか。いつの間にかこんな状況が、ってこれ考えたの何回目だよと。

「どうしたんだ？何かあるのか？」

「珍しく早起きした結果がこれだよ。みたいな」

「その『珍しく』ってあたしのことか？」

「オレのことってことでどうかーっ」

「よねっっ」

そうした他愛もないやりとりをして、やはり追求の意を示すネイス。追求されて困ることは無いけど。

「んで、なんかあるの?」

「ああ、これこれ」

「ん?」

コロッセオについて書かれた用紙を渡す。

それを見たネイスはしばらく文字と悪戦苦闘して、読み終えたころには目がキラッキラに輝いていた。

分かり易すぎるよ。

そして彼女は『読め!』とばかりにその用紙を突き出して言う。

オレもすっかり読んだから、そんな突き出されても困る。少し落ち着け。

「出たいつ!」

まさかこんなに直球でくるとは思わなかった。

ダラけていた二人も首をこっちに向けている。  
この人達は出ないだろうなあ、と予想した。

「え……いいよ、うん。」

これは全くオレの一存で決めることじゃない、というかそんな  
権利無いし自分で決めろよ。

などとネイスが坂神に許可を求めてきたことに若干混乱してから、  
三人に聞いてみる。

「なあ、この中で戦いの指導できる人っている？」

名付けて、『本当に強くなってしまえば無問題』作戦。  
ここにいるのは全員強いし、なら効率的に強くなれるのではないか、  
と。

それにいつまでも守られっぱなしなのはどうにかしたい。女性に戦  
いを学ぶってのも不甲斐ないけど。

その問いに初めに答えたのはネイスだった。

「一回死んで生き返ったら超常の力をだね」「却下」

「ぶっちゃけアタシに指導を求めるのは無謀」

「了解」

うーん、あと二人。

次にファウストが怠そうに右手を上げて言う。

「あー…剣は教えないぞ？身体鍛えるのはいいけど。魔法も教えないことは無いけど……お前には無駄だろう？」

「そっか、そういうえばファウストは手刀メインだったな。じゃあ鍛えるのは任せてもいいか？」

「スパルタだからな」

「……………」

あれ？悪寒がする。

次にフィリスが上半身を起こして右手を上げる。

「私が教えることはもう何も無い……………」

「ああそっか。フィリスも魔法主体だったな」

「魔法使いですからね」

ん？

「僧侶、とかじゃないのか？そんな印象なんだが……」

「いえ、魔法使いですよ。ああ、魔術師でもいいですけど」

「魔法使いと魔術師の違いって確か、魔法を主に使うか魔術を主に使うか、だったか？」

「まあ最終的には感覚的なもので判断するものだと思ってるんですけど……」

魔法は口頭で、魔術は術式　つまり文字や形　で発現する……

まあそんな感じだったはず。

伊達に図書館に入り浸っていたわけじゃないやい。

そこでファウストが左手を上げて抗議する。

「じゃあ強化魔法を主に使うのは魔法使いか？」

「……あれ？」

深く考えなかった二人は虚を突かれて混乱する。  
確かにその場合、魔法使いとは言わなさそうだ。

「いや、曖昧でも別に全然いいけど」

「あ、それじゃアタシはどうなるの?」

唐突にネイスが言う。

他三人は各々考え、それぞれの答えを口にする。

「異質女魔法使い兼戦士」

「そういえばオレ、ネイスが戦つてるところ見たこと無い」

「その他」

上から順にフィリス、坂神、ファウストである。

「あ、確かに坂神の前で戦ったこと無いかも」

「てか、フィリスの長いな」

「ファウストさん、その他って……」

「それか例外だな。コイツの戦い方はまだよく分からん……あ、未定か」

「ファウスト……なんかあなたの台詞には侮蔑が混じってる気がするわ!」

「これは失敬、出来るだけ抑えたつもりなんだが」

「とりゃー……！！！」

飛び掛かったネイスの両肩をファウストがつかみ、右足を腹にいれて一気に後ろに投げ飛ばす。所謂巴投げというやつだ。

てかこりビングなんだけど

そんな他愛もない『遊び』をしていると、不意にフィリスが何かに気付いた。

「あ、心当たりありますよ」

「ん？何が？」

「坂神さんの剣の指導できる……と思う人に　ちよつと面倒臭いんですけど」

「お！？誰？」

「元剣士のクリス・リーティンという僧侶なんですけど……」

「僧侶？」

「はい、僧侶だそうです。今日中には交渉してみますよ」

「いや、オレも行くよ。オレが行かないでフィリスを行かせるなんて、失礼すぎるだろ」



そこでフェイントの掛け合いをしていた二人が割り込む。  
部屋ではあまり暴れられないので、フェイントで相手の裏をついたほう  
が勝ちという極めて安全で安心な勝負だ。

「アタシも行くー……びびちゃー！」

「私も行くぞ。暇だしな……甘い！」

「おっと！」

「ぐっ！とみせかけて！」

「アタシはそのさらに上に行く！」

「だがしかし！」

「まだまだ！」

「だがしかし！」

「まだまだ！」

……

ネイスが額を小突かれた……とみせかけて背後に回っていたのをフ  
アウストが察知しさらにネイスの背後に回り、しかしそのネイスは  
残像で実はフアウストの後ろに……なんてやっている。

正直、壮観だ。

二人がたくさんいる。

人間離れしすぎだろ、オイ。

「まあ、いいですけど……」

とにかく、四人で行くことになった。

第39話 修業（後書き）

話を早く進めたい、けど進めれない。

矛盾ってイガイガします。

第40話 修業その2(前書き)

むう……新作のアイデアばかり浮かんでくるのですが、むう……

## 第40話 修業その2

真っ白な宮殿の中で、目の前にはまだ二十代に見える青年がいる。フィリスの話だと、この人がその元剣士らしい。今、指導を頼んだところだ。

「剣の指導ですか……うーん……断らせて頂きます」

「え？」

意外だ、と言わんばかりに驚きの声を上げるフィリス。その態度にフィリスは不服そうに顔を歪める。

「いやいやフィリス、あなたが驚くところじゃないでしょう？私がなんで剣を捨てたと思っっているんですか」

「いや……フィリスさんなら『ああ、また脱剣士が遠退く……』とか言っただけさ引き受けて……」

「あなたねえ……」

割と真面目に言っているフィリスをため息混じりに見つめつつ、フィリスは次の言葉を発する。

「とうとうより、そもそもの問題なんです……教えて欲しいのは坂神君なんですよね？」

「あ、はい」

「私の剣術つて魔術を応用したもののんですが、貴方はですね、その」

ああ、魔力の無いオレには無理だつてことか。

納得する坂神を見てどう思ったのか、クリスは一つな提案をだす。

「ですが、貴方が目指すのはコロッセオで勝つことでしょうか？」

「はい……まあそうですね」

他にも女性に守られっぱなしが嫌だとか、そんな理由もあるが今はそういうことにしておく。

「剣の指導はできませんけど、基本の型なら教えますよ？相手が相手なら大体はその型を振り回すだけで十分ですし」

「いいんですか！？是非お願いします！」

「太刀筋とかは教えられませんかから、暗記みたいになるでしょうがね。それでいいなら」

「十分です、ありがとうございます！」

「でも今日は私は用事がありますので明日からやりましょうか」

秀困氣的に教えてもらえなさそうだったので少しビックリしたが、  
教えてくれるならこれ幸いだ。

~~~~~

「んで、帰ってきたわけだが……」

自宅に戻ってみたはいいが、何もすることが無い。帰るなりみんな  
寝転がるのもどうかと思うが。  
まだ昼だというのになぁ……

暇すぎるので筋トレでもしてみることにした。

「いち、にーい、さー……」

飽きた。

「……なあファウスト」

「なんだー？」

「スパルタって具体的にどんなことするんだー？」

「お？なんだ、今日からやるか。それもいいな、暇つぶしにはなるよし、そうときまれば早速行くぞ、善は急げだ」

そう言うとファウストはすくと立ち上がり、坂神の腕を捻り上げる。

手をとるのがなんとなく恥ずかしかったからとかなんとか。本人以外には知る由も無いが。

「あでで！ちよ、ファウスト！？まだ昼飯が」

「いるのか？じゃあこれでいいだろ」

ポケットの携帯食料を口に突っ込まれる。

これ、パサパサしてて飲み込みにくいから苦手だ。味よりもそっちが目立つ。

他の二人を見ると、どちらも異論は無いようだ。自宅警備の意思を示している。

ここにいる全員はどうやら極度の面倒臭がりらしい。類は友を喚ぶってか？



「なあファウスト？」

「ん？」

「そろそろ腕ヤバ気」

慣れて（？）感覚が無くなってきたからか、幾分落ち着いて話せた。それを聞いたファウストは数秒黙って、おもむろに走り出した。

「っ！！？今っ！今確実に捻れたっ！腕の皮じゃなくて中身がっ！捻れたっ！！」

「……………」

手の離し方が分からなかったとか、そんなことは誰にも分からなかった。

彼女はただ走り続ける。なんとなく、止まれなかった。

~~~~~

「着いたぞ」

「……………」

着いたのは滝の……………なんと言つのか、上流？とにかく、滝の上である。

しかし、そんなことはどうでもいい。  
腕が動くか確認しなければ。

「むっ……………紫……………」

握られていたところから先が毒々しく紫色に変色している。  
手を握ろうとしてみると、微動だにしない。

あれ、アウト？これアウト？

現実から逃げるように何回か試すと、段々と感覚が戻り、最後にはちゃんと動くようになった。

「おい坂神？」

「そこ、なんで本気で尋ねてる？てめえ今オレが腕一本諦めたの知らないだろうが」

「過ぎたことだ、気にするな」

「それは決してお前のセリフじゃあない」

浮いてたからな。ファウストが走ってるとき、オレ、浮いてたからな。

マジで腕ちぎれる気がしたんだからな。

「ともあれ修業を始めるぞ」

「てめえ……まあいいや、んで何するんだ？ぶっちゃけこんな大掛かりな修業するとは思ってなかったが」

「滝だぞ？」

「滝だな」

「ならやることは一つだ」

「……は？まさか」

「行ってこい」

「うお！？うわああああ！？」

ファウストは坂神を滝壺に向かっていきなり投げる。

坂神は途中に抜き出た岩になんとかしがみつき、というか落ちて身体を打って悶絶する。

「いつてえ！おいファウスト！殺す気だな！？オレを殺す気なんだな！？下に落ちてたら多分死んでたぞ！？」

「それに向けて投げたんだ。大丈夫、私を信じろ」

「どの口がそれを……」

「ほら修業だ修業。さっさと滝に打たれろ」

「……落ちたら死ぬ高さで、滝を受けろと？」

「御託はいいからとっととやれ」

「この鬼め！ああもういいよやってやるよ！神様、今なら簡単にオレを殺せるぜ？」

意を決して足を踏み出し、プラスチックなら簡単に潰せるであろう水圧を全身で受ける。

思ったよりキツイな

「……お前、さっきからやけに諦めがいいな」

「ばー！？ばぶばっべー！？あばばばば（は！？何だって！？）」

「喋るな、舌を噛む」

ガッコン

「ば？」

「？」

坂神が乗っていた岩がいい音を奏で、重力に逆らうのを止めた。

まさか、本当に殺しにくるとはねー

滞空時間、数秒か数十秒。

体感時間、数分か数十分。等ということも無く結構短かった。

走馬灯が浮かぶわけでもなく、ただ単に『この高さってやっぱり下が水でも死ぬかなあ？』としか考えなかった。

「坂神いーーーー！！！！」

ファウストが必死の形相で叫ぶ。

なんだよ、てめえ私を信じろって言ったろうが

第40話 修業その2（後書き）

坂神は基本極度の楽観主義者です。  
マイナス思考が好きで、前向きな。

## 第41話 生け贄（前書き）

……どづどづ。

あ、そういうば一話と二話の内容を少し変えてみたのです。

## 第41話 生け贄

死んだ。

多分、死んだ。

そう思った。

水面に衝突したときに身体が飛び散る感覚を覚え、気付いたら一面真っ白の『世界』に足をつけて立っている。

ここを死の世界と、 いや、何も無いのなら定義によっては『世界』とは言えないが 認識しても不思議じゃないだろう。

「死の世界だったら死人がいるだろうなあ……てか何で床があるのさ？」

『床』を靴で小突くとコンコンと小気味のいい音が響いた。響いたということはどうやら『壁』があるらしい。距離は計れないが。

「あー…あれか？魂ごと部屋があるのか？だったらどうしよう。マジで死んだのか。ファウストのやろう、あいつなら助けれると思っただのになあ」

ファウストに助けられることを望んだ発言をしたことに軽く自虐的になっていると、『世界』に反応を示された。



「部屋では無い、狭間だ」

「うおあ！！？いきなり誰！？」

振り向いても誰もいない。

そんなはずは無い、と辺りを見渡しても白以外の色を認識できなかった。

「ここは世界の隙間にして世界の狭間。世界の無い空間」

「っ！」

この『世界』のある一点から黒い液体が『漏れ』、蒸発し霧となる。その霧はやがて一つの人を形作り、人間であれば頭に当たる部分の裂け目から声を発する。

感覚でわかる。コイツは、『危ない』

「貴様が……貴様が、『生け贄』か……まさか、本当に寄越すとはな」

「生け贄……。お前はなんだ？どうしてオレをここに『喚んだ』？」

「ほう……今の問答で貴様が『喚ばれた』ことに気付いたか。なか

なかどうして、理解の早い」

『それ』の裂け目が笑ったかのように形を変える。

今まで死を受け入れていた坂神は、『それ』にだけは絶対に殺されたくないと思った。何か嫌な予感がする。

けれど逃げる事が出来ないであろうことは容易に想像できる。

「で、お前はなんなんだ？いいから答えろ」

「答えても貴様には意味が無いのだが……まあいい、貴様達の言葉で表すのなら、化け物、悪魔、魔王、魔神、悪、魔、魔人……といったところか」

「見た目からなんとなく分かってたけどなあ……やっぱり『生け贄』つてのは……」

「ふん……やはり理解が早いな、話がしやすい」

「そりゃどーも」

「貴様は、貴様がいた世界のことを知っているのか？」

生け贄にするのならこの会話は完全に無駄なのだが、『それ』は坂神と会話をしようとしている。

坂神にはそれが何故なのか分からなかった。

いや、半分くらいは分かっている。あまり認められないだけだ。

『これ』がオレに興味を持った？

「この世界？……いや、知らん」

「その世界は貴様達の言葉で言うと、冥界、地獄、闇の世界、か？  
いや、負の世界といったほうが分かりやすいか」

「……………」

「そして貴様が初めて逢った超常の力を持った者はおそらく、天界、つまり正の世界の住人だろう」

「……………そして、オレ達の世界は二つの中間？」

「そつだ。貴様達が正の世界と負の世界の住人の力を超常だと感じるのは、貴様達が正と負を合わせ持ち、ある程度打ち消し合っているからだ。」

「へえ、じゃあ具体的に言うとなつていいるんだ？まさか打ち消し合つてゼロになっているわけじゃないだろう」

「それは人それぞれだ。打ち消し合う量もな。だから多彩なのだ。完全に打ち消し合つて正や負しか持っていない者や、どちらも多く持っている者もいるからな」

「成る程な。それで、まだ不可解なことがいくつかあるんだが……………」

こうなりや全て聞き出してやる。といった感じでさらに会話を伸ば

そうとする。

「それも全て話して我が同志にでもしたいところなのだが……いかんせん、それは不可能だ。時間も無い」

「？」

「もう時間が無い。我も完全には程遠いからな。だから今からお前を喰らう」

「っ!？」

霧の塊が一瞬収縮したかと思うと、一気に弾ける。

『それ』は坂神の視界を瞬く間に覆い、坂神を喰らおうとする。

「ちいっ!」

逃げようと振り向くが、既に上下前後左右全てが黒に塗り替えられていた。

どこに逃げればいいのか全く分からない。

「フハハ!!逃げようとしたのか?逃げられないと分かっていただろっに!」



考える考える考える！今どうすれば生き残る！？選択肢は？  
択くらい用意しとけよ全くもう！何か、何か何か

「……………何でいつも下らない方法ばっか浮かぶかなあ」

「ん？どうした？諦めたか」

裂け目のニヤケ具合が増す。  
そこで坂神は

「あつ！あれ何だ！？」

「ん？」

『それ』が後ろを向いた瞬間に  
動く動く動く動く抵抗する抵抗する振りほどく振りほどく！！

だが力に自信のある『それ』はわざと緩慢に首を戻す。

「ふん、滑稽だな。 なっ！？」

「ドルアアア！！」

振りほどいた。  
振りほどけた。

まさかの事態に坂神も『それ』も困惑する。  
そのまま力に引っ張られるままに上に移動する坂神。

「くっ！」

『床』から再び手足を掴もうと霧が伸びる。  
必死な坂神はそれらをひよひよいと手足を引っ込めることで一回だけ躲す。『それ』が少しでも冷静になればこんな躲し方など意味を為さないだろう。

あとはこのまま行けば！

とは思ったが、霧が上から伸びてきた。万事休す。

しかしそれも急に上がった坂神の速度によって空を切る。  
まだ『それ』は焦っていたようだ。

あとは、上に広がる『それ』

坂神は、もうどうにでもなれというように両腕を『それ』に突っ込





「それは名前を聞いてるの？それとも種族？はたまた何をする人なのかを？」

質問に質問で答えてきた。

その場合、先の質問に不備があったか、または先の質問を無視したかに分かれる。今回は前者だろうか。

その質問に対するベストアンサーを模索し、たどり着いた答えを言う。

「……自己紹介をお願いします」

「自己紹介ね、それって私に任せるってことでOK？」

「OKです……」

会話してみて、坂神はなんとなくこの人は言葉遊びが好きなんだろうなと思った。

同時に、暇人なんだろうなとも。

「えっとねー。名前はセイナで、種族は妖怪。多分君を救ったんじゃないかな、と思ってるんだけど……。あと好きな食べ物はねー、人間が作るものって大体美味しいよね。あと真水。炭酸飲料でも可。あと自己紹介で紹介することって……」

「ストップ、ちょいストップ」

ペラペラと理解しがたいことを平然と言ったのけるその人をとにかく止める。

この時点で話題がありすぎる。どうしようか。

「はい、どうぞ?」

「えっと……妖怪?」

「うん妖怪」

話題一つ目、終わり。

この調子なら案外早く済むかもしれない。

「救った、の部分について詳しく説明プリーズ」

「その前にさ、名乗ったんだから名前言ってよ。ついでに君の名前プリーズ?」

……どうもマイペースだな、いや後半には激しく反省するけども。

「坂神、坂神裕也だよ。えっと……。……セイナ……さん?……ちやん?」

「さかがみゆうや……サカガミュウヤ……坂ガミュウ也……坂神裕

也、坂神裕也。おっけ、バッチグー」

どこらへんがバッチグーなのか理解しにくいが、それよりも深刻な問題を解決させて欲しい。  
さん付けか、ちゃん付けか。

「ああ、呼び捨てでいいよ。」

「……それはちょっと抵抗がですね」

「じゃあセイナみゃん」

「さん付けでいい?」

「つれないね。分かった、じゃあちゃん付けでいいよ」

「分かったよ、セイナ……ちゃん。……ゴメン、やっぱり呼び捨てで」

「おっけー」

どう足掻いてもこの人には敵わない気がした。いや、妖怪か。イメージしてた妖怪とは大分掛け離れてはいるが。そこは偏見によるものなのだろう。

「で、セイナ。救ったっていうのは、あれか?魔王とか邪神とかに生け贄にされそうだったオレを?」

「あ、そうだったの？やっぱり救ってたんだ、良かった〜」

「？」

早く結論を言っただけ欲しい。

この妖怪、理系じゃないな。

「いやね、次元の狭間っぽい『歪み』にバラバラの君がズルツとね。これは新手の自傷行為？とお節介かなと思いつつも、出してあげようと尽力したわけなのよ」

そんな自傷行為を誰がするかとツッコミを入れようとしたけど、自重してみた。

おそらくだが、坂神も同じ立場だったら同じことを考えるだろうと思っただけから。

「まあ……ありがとうな、助けてくれて。セイナがいなかったら、多分死んでた」

「いえいえ」

セイナが畏まったようにお辞儀する。

「あ、そうだ。私のことはなるべく秘密ってことにしてね」

「いいけど、なんで？」

「妖怪だし」

「成る程」

理由として不十分ではあるが、坂神はなんとなく承諾した。

「んじゃっー！」

「……………うお？」

気付いたら既にセイナはいなかった。

今のは速さによるものか、それともワープ的な何かによるものかを考えようとしたけど止めた。

川の上流から声が聞こえたからだ。

「坂神ー！ー！」

「あ、ファウスト」

第41話 生け贄（後書き）

始動までもうすぐ

第42話 修業その三(前書き)

こんにちは

## 第42話 修業その三

魔王か魔神が知らないけど、帰って一連の事象を三人に話した。話し終えたところで三人に反応は無いのだが。

「でもま、つまりあれだろ？そいつ倒せば全部終わるんだろ？坂神がこつちの世界に来た理由もそいつじゃない？」

「成る程、それっぽい……いやでもだったら何でオレなんだ？みんなより普通に弱いだろ、オレ」

ネイスが正論っぽいことを言う。

けれどそれならオレが倒す必要性が見当たらない。なんでこの世界に飛ばされたんだ？

「あ、あの……坂神さんがこつちの世界について」

「そっか、フィリスには言っただけ。オレは……あれだ、正と負の世界の人間だよ。この世界を救うためにつて飛ばされた」

「ええっ！？それじゃあ本当に勇者だったんですか！？」

「勇者かどうかは知らん。そして多分違う」



隠す必要があるのか分からない秘密を打ち明けると、フィリスは妙に驚いた。

勇者の定義をオレは教えて欲しい。

「ま、なんにせよ強くないといけないわけだ」

「そういうことになるのかな。でもどうしたら……やっぱり筋トレかなあ」

また滝壺に落っこちるのはゴメンだ。

大体、なんでオレなんだろうか。身体能力もこの世界の人にかなり劣ってるだろうし、魔法も使えないし。どうして……

「あ、ナイスアイデア思いついたよ。肉体強化の」

「ん？死ぬのは却下だぞ」

割と本気で言った自分は何なんだろう？強くなる方法が死ぬってオイ。

とりあえずネイスの提案を聞くことにする。

「サンドバックすれば耐久性みるみるアップだよ」

「何言ってるんだよ、んなの駄目に」おお、それいいな………決まってるだろう？」

言いきった！言いきったぞ！サンドバックなんかゴメンだ！

「でも少しくらい荒療治じゃないと間に合わないのも事実じゃないのか？」

「うっ……」

「大体ね、楽しんで強くはなれないんだよ？苦勞や苦痛の分強くなれると思つて、男を見せなよ」

「むぐっ……」

言い返す言葉が無い。何故だ。  
ファウストとネイスがじりじりと寄ってくる。

「でも家人中だし……」

「安心しろ。家には一切傷付けない」

「さっさと決意しなさいよ。出来るだけ躲すようにね」

「む……分かった。やるならおもいきり来「死ぬよ？」「やっぱお手柔らかにお願いします」

「」「よしてきた」



ったと思う。

「……とにかく、これ」

「ん？紙ですか？」

渡された一枚の紙。

それには、1、2、と区切られてそれぞれに縦線横線や逆三角形などが書かれてある。

まさか……

「そんな感じに剣を振るんです。私の剣は剣筋よりも形が大事なんですよ。その組み合わせで魔術の印を切って……魔術と剣技の複合ですね」

「じゃあ、魔力が無い人には……」

「ほとんど意味ありませんね」

「三点リーダー三点リーダー丸」

「?????……とにかく、型があるのと無いのではまるで違いますから。あと念のため魔術を組む順番もお教えします」

「は、はい。よろしくお願いします」





第42話 修業その三(後書き)

何事も慣れです。

第43話 ゴメンなさい(ヒヤッハ・(前書き)

ひっそりこそこそ

煮込んだフール

熟成あほうを召し上げれ



### 第43話 ゴメンなさい（ヒヤッハ）

一回戦。

「  
……」

相手は女剣士。所属とかは面倒だったから見ていない。

身軽さを第一に考えたのか、胸当てと、あとは肩とか膝とか、要所に薄い鉄板を備えている。ま、身軽さでいったらオレの右に出る者はいないな。全裸には負けるが。

「  
……」

試合前から熱い視線の交錯。相手がこちらを見る目は『ふざけるな』か『うわあ』だろうな。どっちかって言ったら『うわあ』だろう。

遂に耐え切れなかったのか、彼女が言葉を発する。

「……その、格好は？」

その言葉は果たして、この『私服』に向けたものなのか、また、『顔』に向けて言ったのか。多分、どちらもだろう。

ただ、鎧なんて面倒だから着なかっただけで深い意味なんて無い。でも傷とか痣とかについては、男の勲章としか言えない。

しかし、オレはあえておどけてみた。

「時代を先取るニューフェイス」  
「……」

ドン引きされた。うわあ。

「  
……」

なんでもない、ただの沈黙。ただ、先程のそれとは明らかに質が異なっている。おそらくはオレが、一番可哀相なことになっている。

「……始めようか」  
「……そうだね」

今度はオレが沈黙に耐えられなかった。というか、始まらなかったら棄権を申し出るくらいには精神をやられてます。

ルールはただの一本先取。勝つ条件は、相手を場外に出すことのみ。場外、というのはつまり、リングがあるわけだが、これがなんの変哲もない約直径50メートルの円だ。ちなみに、明らかに『過ぎた行為』と見なされた場合、それなりの処置が下される。

試合のゴングは、戦う者同士がリングに立つこと。今までオレだけ立っていたのだが、ようやく相手もやる気になったようだ。

「えっと、真剣だけど、怪我しても知らないよ？そんな薄着でさ」  
「……お手柔らかに」  
「まあ、いいけど　ねっ！」

跳躍。

50メートルあった距離が一気に詰められる。というか、その脚力はおかしくないか!?

「うお！」

ギイン、と金属音。まずい、一步も下がれないこの状況。相手の懐を抜けて中央へ出るか？いや、できるか？やったことないわそんなこと。

「　　っ！？」

と、一気に試合が決まりそうな状態から、有利であるはずの女剣士がリングの中央までバックステップする。

……蹴られたらそれだけで致命傷受けそうなんですけど。真剣よりもその足のほうが凶器じみてる。

「　　とうか、え？」

「　　…………っ！」

なんで距離を空けたのか、考える間もなく再跳躍。もう一度金属音。

その衝撃をまともに受けると場外に吹っ飛びそうなので、身体を逃がしていなす。

結果、オレは場外ギリギリの位置から逃れることができた。

「　　《この掌てのひらにわずかの雷を！》」

振り向き様に腕をこちらに向ける。その手の平から一閃の煌めきが襲う。

それを剣で薙ぎ払うと、目の前に女剣士。魔法を防がれるのを承知で追撃してきた。所謂フェイク。

「うおー！」

慌てて振り下ろしたオレの剣は、悲しいかな、虚空を撫でただけだった。切り掛かると見ていた女剣士は、オレの剣のリーチの少し外で、オレが無様に空振るのを見ている。

（ フェイクっ！！ ）

やられた。この女剣士のほうが数枚上手だった。明らかな実力の差だ。

オレを一気に場外へ吹っ飛ばす蹴りが腹部に迫る。ああ、骨は覚悟かなあ。

パリッ……バシィッ！

「え……っ？」

一閃の煌めきが、女剣士の胸当てに直撃した。そのまま吹っ飛んで場外を期待したけれど、残念ながら少し浮いた程度だった。

それは女剣士にとって全くの不意打ちであつたらしく、どさっと尻餅をついてそのまま硬直している。

かく言うオレも、何が起こつたか理解できていない。

「……」

自分の剣を見つめて思索する。そういえば、雷の魔法を防いだときに剣が雷を纏った気がしないでもない。

「……おおっ」

「な、何よ今の!?!」

女剣士が文句を言う。言われても困る。オレだって知らなかったんだ、こんな便利な機能があるなんて。

そうとわかれば、試合は続行しなきゃな。いつまでも驚いてるわけもない。

「行くぜっ!」

オレは一足で何メートルも移動できる脚力を持ってないので、まあなんと無様な走り方なこと。仕方ないじゃないか、相手はまだ腰を抜かしてるんだ。

ステージの端っこ、そこにいる女剣士の前に立つ。さすがに女剣士も立っている。

初めて剣を構える。我流だ。左手を剣の腹に添えて、切っ先を下げ、右手に持つ柄を上げる。

「……あんだ、初心者丸出しよ」

「ほっとけ。ちゃんと意味はあるんだ」

目を見開く。左手を剣の腹に添えたまま、右手を柄から離し、相手に突き出す。

瞬間、女剣士の剣が馬鹿みたいな大きさの鉄球に変わる。

「ちよ、な…:によこれ!」

「よっしよしよー!」

右手を柄から離れたから剣は放棄。女剣士も何十キロあるか分からない鉄球をすぐに放棄。  
右手と左手が重なる。どちらも足を踏ん張って、相撲と言えなくもない状態。

「づぎぎぎぎぎいー！」

「あんだ、意味が、分からない！」

「ゴフツ！」びちゃり

「……………血？」

血が、女剣士の顔にぶちまけられる。

オレが突然吐血したんだ。もちろん故意じゃないぞ、何か刺さったんだ、腹に。

……………腹に何か刺さった？

「……………ああ、打撃にしか慣れてなかったからなあごぶっ」

「いや、あんだ、刺されて……………後ろ……………」

「アアアアッ……………」

誰か二人が同時に、オレの後ろにいる何かを蹴り飛ばす。残ったのは、オレの腹に刺さった剣のみ。ってそうか、剣で刺されてたのね。今気付いたわ。



### 第43話 ゴメンなさい(ヒヤッハ・(後書き)

「え、何？ これって最終更新日いつよ？」

「忘れたよ。確か……2、3年前だったよ。そんな気がする。そもそも今話だつて1、2年前に書いたものだし」

「『今話』って単語、造語なの？ 『次話』があるから使ったんだろうけど。それにしてもお前、ふざけすぎだろ」

「なんか当時、ここで詰んでね。他の話も執筆してるんだけど、これ完結してないし、未完の小説が氾濫するのもあれでさ」

「いつそそれらも投稿しちやいなさいよ。……ん？ これ今回投稿しちやってるけど、これ以降はまだ未執筆なのよね？」

「うん」

「大体無駄に伏線多いし、全部把握しようとしたら羞恥心で読めないし。どうするのよ、これ」

「伏線つてさ」

「うん」

「回収するものじゃん。基本」

「そうね」

「回収しないのもありかなって」

「しろよ。てゆうか回収できないんでしょ」

「あれだよ、当時の厨二ぶりが遺憾なく発揮されてるよね。卒業文集に載せたポエムくらい恥ずかしい」

「え、載せたの？」

「クラスメートがね」

「『ご愁傷様です』」

「で、なんで今回投稿しちやったの？」

「実は俺、今性質の悪い風邪にかかって。気の迷いと共に、勢いで。つい」

「ちゃんと続けなさいよ」



「そもそも読者がこの回を読んでくれるかどうか。絶対途中で読むの止めてると思う」

「意味無っ」

「だからこそ投稿したんだけどね」

「なるほど、割り切ったのね」

「そゆこと」

「そういうわけで」

「え、お前が仕切るの？」

「あんた切り上げるタイミング分からないでしょ。ほら、

『そういうわけで！』」

「まあ……そうなんだけど。」

『ここまで読んでくれた方、』」

「おそらく綺麗にまとまらないでしょうが」

「伏線とか忘れてもらって」

「寛容な心で読「読んでくだ」……」

「……」

「……ドヤッ」親指グッ

「……」グッ

「グエ」「パタッ

「読んでくださると、とても助かります。というか、ここまで読んで下さるだけで、いや、ここだけでも読んで下さるだけで、心から感謝致します」

「なんか卑屈すぎね？」

「あんたをフォローしてやってんのよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2414i/>

---

勇者になろう

2011年6月17日17時39分発行